手を引く勇者と引きずられる魔王

hiko8813

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
手を引く勇者と引きずられる魔王

【Ｎコード】
Ｎ５９９８Ｗ

【作者名】
ｈｉｋｏ８８１３

【あらすじ】
　とある世界で暇を持て余す平和主義の魔王がいた。そんなヤツにある目的で会いに行ったのは、既に一度世界を救ったという自称勇者の女の子。
　彼女は魔王が思う勇者像とはどこかズレている。引っ掛かるものを感じながらも、魔王は勇者と行動を共にすることになる。道中で当然のように騒動に巻き込まれていく彼らには、この先どんなイベントが待っているのか……という話です。※１０／３０二章まで完結しました。

※基本的にコミカルな話にしたいのですが、物語の進行上どうしてもシリアスな話も出てきます。そういった話が苦手な方はご注意ください。

0．ある魔王の愚痴（前書き）

はじめまして。小説を自分も書いてみたくてやってしまいました。
もしも気に入ってもらえたなら嬉しいです。

基本的に主人公視点で書いています。一部に残酷描写と考えられる部分が有る（予定の）為、ご注意ください。

0．ある魔王の愚痴

なんか面白い事が起きないかなーと思う。

面白いコトなら何でも良い。今も俺を苦しめ続けている退屈という名の暴力から全力で逃げたいのですよ。何か良いアイデアがあれば是非お願いしたい。

自分で考えろって？　そこを何とか。もう自分で考え付く限りの暇つぶしを試した後なんだよ。もう飽きちゃってさ、何するにしてもやる気が出ないんだよね。

こんな事ばかり言ってると、もしかしたら俺を「つまんねーつまんねー」と口だけ動かしてるぐうたらな男だと思ったかもしれないけど違うからな。俺はそんなんじゃないぞ。

ホントだってば！

……すまん、ちょっと取り乱した。が、しかし。

そうじゃないんだ、解かってくれ。飴あげるからさ。すっぱい果実を贅沢に使った一品だからきっと疲れも吹き飛ぶぞ。多分。

要らない？　美味しいのに。

ま、ともかくだ。

俺はそんなんじゃないんだ。自分で言うコトじゃないかもしれな

いが、行動力はあるほうなんだ。叶うなら今すぐに元の世界へ飛び出したいと思っているさ。

なら勝手に行けば良いだろって？　それが無理だから困ってるんだ。俺は、この見渡す限り真っ白な世界に閉じ込められているんだよ。

辺りには何も無く、小さな家がポツンと建っているだけ。その中にはベッドが一つ置いてあるだけで、何の面白みも無い世界だ。

何故か空腹にはならないし、それに伴うアレとかも起きない。だからお見せできないような光景になっていないのが救いといえば救いだ。

何か発見が無いかと試しに十分ほどボロ家から真っ直ぐ歩いてみたんだが、ふざけた事に辿り着いたのはこのボロ家だった。たった十分で世界一周は間違いなく世界記録だな。ぶっちぎりの。

……そう、出口が無いんだ。

例えここが海に囲まれた無人島でも、世界最大の砂漠ど真ん中だとしても俺なら脱出できるのに、この世界のどこを探しても出口が見つけられなかった。

酷い話だよ。虐待だよ。非人道的な仕打ちだよ。

何も無いこの世界ではあまりに暇すぎたので、実はこの家一度ぶっ壊した。

今建っているこの家は、その残骸でまた組み立てたものなんだ。

……そんな目で俺を見ないでくれよ。俺だって壊すつもりは無かったんだ。ただ、世界一周感動のゴール地点にのほほんと突っ立ってたボロ家をみたら無性に腹が立ってさ、つい自分を抑えられなかった。

たぶん経験なんて無いと思うけど、こんな所に何年も閉じ込められるのって大変なんだよ。　自分で言うのも変だけど、よく気が狂ってないと思う。

どうしてこんな事になったのかって？

うん、さっき言ったけど閉じ込められたんだよ。故意に。

そいつ酷いヤツなんだよ。俺はただちょっと世界征服でもしようかなって思っただけなのにさ。……世界征服は気ままに出来ることじゃない？　うん、そう考える貴方は全く正常な感覚の持ち主だと思う。ただ、俺の家だと世界征服ってのが普通に話題になるんだ。

俺をこんな所に閉じ込めた犯人は誰かって？　えーと、面と向かって聞いた訳じゃないんだけど、仲間らしきやつらから”ユーシャ”って呼ばれてた。変な名前だよな、あはは。

……あー。思い出したらまたムカムカしてきた。あいつらは世界を自由に歩き回れるんだもんな。酷い話だよ。俺が何したってんだよ。そりゃ確かに世界征服しようかなーって思ってたけどさ、思っただけなんだよ。本当だって。最近は妄想まで取り調べられるのか？　時代って変わるよな。

『あの……』

今思えば昔は良かったよ。あの時は親から憎むほどの愛情を貰っていたけど、まだこの世界よりはマシだった。死ぬほど酷い目に遭ったけどこの世界と違って刺激が有るしさ。本当に何回か親に殺されかけたけど。

「愛情よ」なんて戯言を抜かしながら地獄の火炎を投げつけてきたお袋様とか、無言で俺の苦手なホーリーブレスを延々と浴びせかけ続けてくれた親父殿とか。懐かしいな、絶対あれ夫婦喧嘩の八つ当たりだったと思うけれど。

『あのっ……』

5歳の時にグレイトドラゴンの巣に放り込まれた事もあった。あの時はもう凄かった。卵産んだばかりらしくてピリピリしていたから、俺が侵入させられた時はとんでもない勢いだった。見てるはずのキール……俺付きの執事なんだけど、こいつもちっとも助けてくれなかった。

……やっぱり何度思い返しても酷い生活だ。だんだん今より良かったなんて思えなくなってきた。

『もしもしっ……すみませーん』

この空耳しつこいな。まあいいや、どこまで話したっけ……ああそうだ。

そんな過剰な愛情に囲まれていた俺は、ほとほと嫌気が差してい

た。だってこんな生活を続けてたら近いうちにきっと死ぬ。だから両親から逃げ出したくて言っちゃったんだ。

「世界征服してきます」って。

何故こんな事を宣言したかって？　それは親父達が四六時中口を開けば「お前は選ばれしものらしいので、人間世界でも征服してこい」なんて言うからだよ。今思い出してもテキトーな予言だよなこれ。

当初は世界征服なんて興味なかったし、明らかに面倒そうだからそんな予言は無視していたんだけど……歳を取るごとに段々と身の危険を感じるような愛情を向けられるようになっちゃってさ。両親と執事の三人がかりで闇討ちとか、本当に洒落にならないと思う。愛情が歪みすぎてもう殺意があるとしか思えないっての。

……だから世界征服に行くって言えばこの家から逃げられると、そう思ったんだ。

計画通りに、俺は人間の世界へ潜り込めた。

自由に歩ける初めての異世界が嬉しくて舞い上がっていた俺は、色々な国へ観光に出かけた。市場に行くと美味しそうな物を売る屋台がずらっと並んでいたから、全部制覇する勢いで食べ歩いたりしていた。そんな風に自由を満喫しながら辿り着いたある町で、俺はいきなり大勢に囲まれた。

がちゃがちゃと汗がダラダラ出そうな鎧を込んだ人間がざっと千

人くらい。あれ？　と思ったらあれよあれよという間に捕まって、俺は偉そうな髭もじゃジジイの前まで連行された。抵抗なんてしないさ。だって俺は何も悪い事をしていないから。

すぐに開放されるだろう……そう考えてていた俺の読みは完全に外れた。見事なまでに俺の言い分は無視され、俺はそのまま牢屋に閉じ込められたんだ。

ほら、俺これでも魔王の息子だし。やっぱり普通の人から見ると怖いのかもしれない。

あれ言わなかったっけ、俺はこれでも魔族の王子をやってるんだ。よくある御伽噺に出てくるアレの息子だよ。俺も昔は悪い魔王を勇者がやっつける話を良く読んだもんだ。

格好良いよね勇者って。当時は聖剣エクスガリオンとか欲しかったなあ。

……ああ、話が逸れたゴメン。捕まった後の話ね。俺はこれでも平和主義だから、3日ほど断食してアピールした。どっかの聖人みたいに。

我ながら結構続いたと思う。でも何の効果も無かったし、空腹で段々馬鹿らしくなってきたからもう止めようかなと思ったその時、ちょっと強そうな男率いる集団がぞろぞろと登場した。

そいつらは、俺がフレンドリーに話しかけても全く無視して大掛かりな魔術を唱え始めた。人間にしては大層な魔力だったと思う。でも俺は鎖に繋がれて動けなかったし、死ぬような魔力でもなかったから何とかなるだろうと大人しくしていたんだけど……。

何度思い出しても溜息が漏れる。

その結果、此処にご招待されたんだよ。

浅はかだったと思ってるさ。でもさ、何度も言うけどちょっと酷くないか？　俺は本当に何もしてないんだ。見た目だって人間と違うのは銀髪ってコトと、人間と比べてちょっとだけ尖った耳だけで、ほとんど変わらないしさ。それなのにこんな非人道的な世界に飛ばしやがって……俺は奴等こそ悪い魔王とその一味だと確信したね。ここから出たら、

『あのっ！！　すみませんっ！！！』

「うるせえよ空耳！　俺の記念すべき独演会通算一万回目を邪魔すんじゃ」

……ん？　やけにハッキリ聞こえたな今の空耳。

「そ、空耳じゃありませんっ」

やっぱり聞こえた謎の声の方に振り向くと、そこには長い黒髪の小柄な女の子が。

誰？

「は、初めまして魔王さん。わた、わたくしは勇者のリアと申しますっ」

……誰？

0．ある魔王の愚痴（後書き）

頑張ってコメディーを目指していますが、小説って難しいです。

1.「私と一緒に旅をして欲しいのです」

どーなってんだよ。

何故俺は知らない誰かとお茶しているんだろう。

「ですからね、私と一緒に旅をして欲しいのです」

顔が隠れる程のチョコレートパフェを幸せそうにつつきながら、目の前の誰かさんが頬を染めて言う。俺の注文の品はまだなので先に食べてもらっているのだが、かなり美味しそうだ。

ちなみに俺は”ジャンボデラックススーパー”という名称の、この後に何が続くんだよと思わず言いたくなる品物を注文した。金は持っていないけれど、目の前のコレが奢ってくれるらしい。

もう一度目の前の少女をよく観察する。背の高さは俺の肩くらいで、何処となくあどけなさが残る雰囲気なので十五、六歳くらいだろうか。ちなみに俺の歳を人間に換算すると大体十七、八くらいだけど興味ない？　よね。うん。

少女の容姿は恐らく可愛い部類に入ると思う。やや青がかった黒い瞳は綺麗に透き通っていて目もぱっちりしているし、透明な程の肌に添えられた鼻と口も理想っぽい形と配置ではなかろうか。肩まで真っ直ぐに伸びる艶やかな黒（だと思っていた）髪が降り注ぐ陽光を受けて青く輝いている。髪の色は黒ではなく、濃い青らしい。

服装は少しアレンジしてあるけれど、至ってシンプルな旅人の服ってやつだ。傍らに畳んである純白の外套といい、ぜんぜん汚れて

いないところを見ると恐らく卸したてなのだろう。妙に小奇麗でなんだか旅人らしくない。そして傍らに控えている、持ち主に全く似つかわないゴツイ剣に目が行ったところで、相手が声をかけてきた。

「あの、聞いてます？」

「実はあんまり聞いていなかった」

「……えっと、どこまで覚えてます？」

「お前が何処かに旅立ちたいとか何とか」

「殆ど全部聞いていないじゃないですかっ！　しかもその内容も間違ってますっ！」

俺の気が抜けた返答に「むー」と唇を尖らせるよく知らない人。チョコついてるぞ。

「ちゃんと聞いてくださいっ。私は魔王である貴方に」

「なあ、さっきから引っかかっていたんだけどさ」

相手の形の良い眉が動く。

「何ですか？」

「とりあえず一つ目。俺は確かに魔族だけどさ、魔王じゃないんだ。魔王は俺の親父でまだピンピンしてるはずだが」

「あなたのお父様というのはあのジェノサイ王ですよね」

仮にも勇者が魔王を捕まえてお父様は無いと思う。

「……そうだけど」

「残念ながらすでに亡くなられています。もう１００年も昔の事ですので私が直接見た訳ではないのですが」

脳の回転は速いほうだと思っていたがそれはどうやら悲しい思い込みのようだ。今言われた事がちっとも理解できない。

「すまん。もう一度言ってくれないか。どうも今まで変な所に居たせいで耳と脳がとろけてるらしいんだ」

「ですから、１００年前に先代の魔王ジェノサイさんは亡くなっているんです。ですから、息子である貴方が魔王さんってコトになるんです」

はあ、そうですか。そう言ってもう一度相手を見る。

嘘をついているようには見えない。やるな、なかなかのポーカーフェイスだ。だが勇者が善良な市民を騙すのは良くないな。

ちっとも信じようとしない俺に向かって不思議そうに首を傾げる目の前のコレにも解る様に、丁寧に説明してやることにする。

「だって俺は少し前に親父に会ってるし。１００年前に死んでたら話が全然合わないだろ」

「最後にお父様に会われたのって、新王期の何年くらいですか」

「えーと、確か１００２年くらいかな。その直後にこっちに来て、大体半年位は世界を見て回っていたと思う」

そう説明したのに、どうやら全く得心がいっていないご様子。仕方ないので壁の方を指差す。

「だって今は新王期１００５年だろ？　そこのカレンダーにも“０５”と書いてある」

つまり約３年もあの忌まわしい空間に囚われていたのか。良く気が狂わなかったな俺。

どーだ参ったかニヤリと悪者ぶった笑みを浮かべてみる。どうよ、嘘は止めて本当の事を白状しちゃいなよ。……どうしてそこで悲しそうな目をするの？

「あの……今は新王期２００５年です。本当です、信じてください」

「にせん、ごねん？」

「２００５年です」

「本当に？　せんごねんじゃなくて？」

「違いますよ、にせんごねんです」

「はっはっは。まさか。いくらなんでも１０００年は無いっしょ」

確かに俺はあの真っ白な世界に長い間閉じ込められていた。でも

自分の感覚ではせいぜい数年。おまけしたって１０年も居なかった筈だ。時を忘れるほど愉しい世界では断じてなかったぞちっくしょう。

現実を認めない俺に対して勇者様は「あ」と呟いてから何やら俺に差し出した。

月間誌”極上スウィーツ”の５月号だった。

ほう、確かにこれは美味そうだな。む、目の前のパフェの絵もこれに載ってるぞ。ここは有名な店なのだろうか。そうだ、さっき頼んだのにちっともこない”ジャンボデラックススーパー”も載ってないかな。どんなシロモノだあれ。

「違いますっ。年のところを見てくださいよっ」

……わかってるさ。イマイチ勇気が出なかったけっすよははは、と白い歯を見せながら確認したそれは、何度見ても２００５年５月号だった。

「うぇえええええええ！！！？」

久しぶりに絶叫したかもしれない。喉がちょっと痛くなるくらい叫んでしまった。

「あの、魔王さん……」

はっ。

我を取り戻した俺は、周りからの視線に気まずい思いをしながら

着席する。いい加減真面目に今の状況を考えよう。

長い間閉じ込められていると思っていたが、まさか１０００年も閉じ込められていたとは思わなかった。そんなに長いこと一人遊びを続けていられるなんてある意味ショックだ。俺はひょっとして一人で遊ぶことがものすごく楽しかったのかもしれない。

「あの、大丈夫ですか？　そんなにがっくり下を向いて……気分が悪いようでしたらこの剣を翳せば」

「何やって……ぐはァ！？」

むしろ病んでいるのは心の方だったが、勇者が剣を掲げた直後から本当に気分が悪くなったので慌てて止めさせる。

「？」

ヤバイ。それヤバイよ聖剣の類だ。何て名前の剣かは知らないけど、さっきから感じている軽い頭痛はコイツのせいなのか。

「？？」

「いや、可愛く小首を傾げてもらっても駄目だ」

「治りませんか？」

「むしろ悪化した。よく考えてみろって。魔族に聖剣向けるのって死刑宣告だ」

わたしは平気なんだけどな、と不思議そうに剣と俺を見る。

「それはお前が勇者だから……ってそうだ気になる事その2。いいか？」

「あ、はいどうぞ」

ようやく収めてくれた天敵にほっとしつつ水を飲む。つーかまだかよご注文の品は。

「あー、なんだ。さっきから当たり前のように話しているが」

「はい」

「キミってゆーしゃ？」

「はい♪」

いやいやいやいや。だって俺が見た勇者ってやつは男というかオッサンだし、パーティの中には確かに女がいたけれど、魔法使いっぽかった。そもそも女の子って勇者になれるの？　御伽噺にもそのパターンは無かったな。

「本当ですってば。……まだまだ未熟者ですけれど」

おもむろに服に手をかけ始める女の子。……突然何を始めるんだお前。

「なんだか目つきが怖いです……」

「気にするな。んで、何をしてるんだ」

「……んしょっと。ほら、ここに聖痕があるでしょう？　これ勇者の証なんですよ」

目の前で衣服を脱ぎ始めた時はどうなるかと思ったが、見せたかったのは体にあるアザの様なものらしい。胸と右肩の間のちょっと際どい場所にそれはあった。

「おー、確かに見たことあるぞそれ、親父に魔王としての帝王学とかを叩き込まれた時に見た記憶が。」

「ね？　これで信じてもらえました？」

頬を赤く染めて言われるとこっちまで恥ずかしいやんか。早く服着なさい。

こほん。

目の前のこの子が勇者だってのはまあ認めるとしよう。親父が死んじまった事は確認できないけれど、話を合わせてみても良いだろう。しかし、そうなると気になる事その3が当然出てくる。

「俺は魔王らしい」

「はい」

「キミは勇者だと」

「そのとおりです」

「一番最初にキミ何て言ったか覚えてるか？」

「『私と一緒に旅をして欲しいのです』ですけれど」

正解。一字一句完璧だ。

……これはあれか、１０００年後の世界で流行しているジョークなのか。

「？」

小首を傾げて説明を要求する不思議ちゃんはどうやら大真面目に言っているらしい。

「あのな、どこの世界に勇者と魔王が一緒に旅する世界があるんだよ？」

「え、そんなに変ですか？」

不思議そうな顔をする俺を見て、不思議そうな顔をする勇者。

こめかみを押さえながら一つの考えに辿り着く。

もしや、この娘は魔王が世界征服という悪行をする存在だってことを解かっていないのかもしれない。よく考えると親父は１００年前に逝っちまったらしく、この勇者は魔王というものを見た事が無い筈だ。どんな教育をされたのか知らないが、勘違いしている可能性はあるかもしれない。

ここは現実を突きつけてやろう。

勇者の使命は世界平和であり、魔王の目的は世界征服だ。一緒に居られる理由がない。大方こののほほんは魔王の目的を慈善事業とでも勘違いしているんだろう。現実を知ってショックを受けるかも知れないが、ここはハッキリ言っておくべきだな。

コップに残った半分ほどの水を一気に飲む。うし、作戦はこうだ。

勇者の使命は？　↓　世界平和　↓　魔王の目的は？　↓　おおかた慈善事業とでも思っている　↓　すかさず突っ込む　↓　お勉強タイム　↓　じゃあ私達敵だったのね　↓　ふはははは　↓　完璧。

一つ問題があるとすればツッコミをどのように遂行するかだが、そこは己の感性に委ねよう。ぶっつけでＧＯだ。

「あなたのお仕事はなんですか？」

「立派な勇者になることです」

にこやかに笑いながら自称勇者が返事をする。

「では、その立派な勇者のお仕事はなんですか？」

「世界を平和にすることです」

はいよくできました。では問題です！　ジャジャン！

「勇者の仕事とは世界を平和にすること、で・す・が。魔王の仕事

とは一体何!?　さあ答えを張り切ってどうぞ!」

「世界征服です」

「知ってんのかよお前!　なんだよそれ!」

俺馬鹿みたいじゃねえかよ。

二度目の絶叫に周りの目が再び集中する。ああいかんいかん周りの人に迷惑かけちゃ駄目だってよく言うよねゴメンナサイ。

「常識ですよねっ」

両手を軽く挙げて喜ぶヤツの目の前で頭を抱えて蹲る俺。

困った。知ってる上で俺と一緒に旅する企画を持ち込んで来やがりますか。目の前の生物はひょっとしてあんぽんたんなのかもしれない。そういうのはちょっと。

「失礼なこと言わないでくださいよっ」

「人の心を読むんじゃないっ」

ああもう、ここまで言わなきゃ解かんないかなぁ。

「魔王が生きてたらこの世界は魔族に征服されちゃうんだぞ?　そうなったら平和もなにも無いだろ?　ほら、これだと勇者が困っちまう。戦って倒さないと平和はやって来ないぞ?　俺達は言わばコインの表と裏みたいなモノなんだよ、絶対相容れない存在なんだ。そんなのが一緒にいるなんてまずいと思わない?」

「思いませんっ」

なんでだよっ。

ああもう何だか混乱してきた。ここまで自信満々に言われると、俺が間違ってるような気がしてきて困る。

「わたしの事、嫌いですか？」

勇者を好きになる魔王が居ると思っているこやつは、ひょっとして大物なのか。

いや、嫌いってワケじゃないけどさ。……そんな顔するなよ。ね、頼むから涙目にならないでよ俺思いっきり悪者じゃんか。魔王だけど。

「ぐすっ……はい、やっぱり魔王さんって優しいです」

どこをどう取ればそういう考えになるのでしょうか。それにしてもこの勇者魔王に対して敵対心ってものが皆無だよ。なんだか調子が狂う。

いかん、気を取り直そう。この問題は当面置いておいて質問その４へＧＯだ。

「ところでそれ、何て名前の剣？　見た所魔法がかかっているみたいなんだけど」

さっきからプレッシャーを掛けてくる剣を睨む。すると余計に頭

痛が酷くなった。

聖剣の類だろうとは思ったけど、よく考えたらこんな世間知らず勇者が持ってる剣だ。旅の序盤で手に入れたチャチなシロモノなのだろう。けれど、妙にプレッシャーがあるんだよなその剣。

「エクちゃんですか？」

「エクちゃん？　……正式には何て言うんだ？」

俺は未だに来ない注文のせいで飲み飽きつつある氷水を口に含む。

「エクスガリオンのエクちゃんです。以前洞窟で見つけたんです」

「ブふぉ！？」

「ひゃあっ！　魔王さんひどいですっ」

思い切り顔が水浸しになった勇者の非難も耳に入らない程ビックリした。

「もの凄いの見つけてるじゃんかよ！　まさかもう旅は終盤で、俺ここで死ぬのか！？」

「エクちゃんをご存知なんですか？　この子凄いんですか」

「お前知らんのか！？」

もうどこからツッコんでいいのか解らなくなっても、これだけは言わねばなるまい。

「あのな、エクスガリオンといえばかの有名な勇者アレキザイドが持っていたとされる最上級の剣で、勇者は魔王を打ち倒す為にこの剣を求めつつレベル上げするのが王道パターンなんだよ。それをもう見つけちゃってるじゃんかお前」

道理で嫌な汗が出るワケだ。

「……でも私は、そんなすごい剣を持っていたって何も出来ませんでしたから」

「な、なんだよ。急にしょげて」

突然の落ち込みっぷりに驚く。ちょっと強く言い過ぎたか？　と思ったが、どうやらそうではなかったようだ。

「世界を平和にする為に、色々なところへ旅に出ました。魔物も一杯倒しました。王様からも沢山感謝されてご褒美もたくさん貰いました。けれど、それだけじゃ世界は平和になりませんでした」

どういう事だろう。魔王である俺はいなかったわけだし、その剣があれば大抵のイザコザはすぐに一掃できそうなんだけど。……さっきから話が脱線し放題だな。

「魔物さんが原因じゃないんです。確かにその、魔王さんには申し訳ないんですけれど、沢山魔物さんを倒したおかげで、魔物さんから被害を受けるということは無くなりました」

それで良いんじゃないでしょうか。あと魔王に謝る勇者って見たこと無いんですけれど、ツッコミするだけ無駄みたいだからもう良

いや。

「でも、魔物の問題が解決したと思ったら、次は人間同士で争いを始めてしまったんです」

詳しくは言わなかったが、なんでも生まれ育った国が滅んでしまったらしい。結構あっさりと話しているけれど、かなりキツイ話だ。

「……。」

詳しい事情は分からないが、酷い事をする人間も居たもんだ。

「ひょっとして俺を閉じ込めやがったやつの末裔か？　そいつ」

「そ、それはわかりませんけれど、とにかく皆が言っていた魔王さんを倒せばそれで世界は平和になるっていうのは間違いの様な気がしたんです」

なるほどね。そう考えるのは何となく解かる気がする。

でも、だからといって俺がお前と一緒に旅立つという流れには結びつかない気がするんですけれど。魔王は居ないに越したことはないと思うなボク。質問3の答えが解からない。

「どうして俺を助けた？　いや助けてくれたこと自体はものすごく感謝してるんだけど」

俺を助けてどうしたいのだろう。ただ旅をご一緒すれば良いのだろうか。

「お前はこの世に平和を築きたいんだろ？　俺助けたら災い呼ぶとは思わなかったのか。魔王だし」

「一緒に世界征服しちゃいませんか？」

逆るシャワー攻撃再び。

「ふえええぇ……」

すまん。いやしかしこの無邪気さに騙されてはいけませんこの娘言いやがりました。

「おっ、おまっ。ちょっとそこ座りなさい！」

「さっきから座っていますけど……」

うるっさい！　そんな細かい話なんてどうでも良いんだよ！

「お前さ、自分がなに言ってるのか解かってる？　お前勇者様よ？」

「でもっ！わたし、世界を平和にしたいんです！」

「いやさ、だからお前がそんなことしたら」

あれ？　勇者だから良いのかひょっとして……でも世界征服に良いも悪いもあったっけ。

「私達がこの世を平定した暁には、絶対に世の中を平和にして見せます！」

こんな所で所信表明されても困る。

「そしてその為には、是非とも世界征服の先輩である貴方にご指導して頂きたいと思いまして」

「本気で言ってるのか？」

「おお真面目ですっ。道中征服の手解きをお願いします！」

「どうしても？」

「どうしてもですっ！」

……全くブレない瞳で見つめてくる。傍から見たらきっと奇妙なその光景が何分続いたのか知らないが、先に折れたのは俺の方だった。

「わかった。わかったから」

そんなに顔を近づけるなって。

「やった！　有り難うございますっ！」

良いのだろうか、本当に。

「私頑張りますね！」

平和な街の一角で世界征服を宣言する勇者。気分が高揚しているのか、ほんのりと上気した肌に染み一つ無い事まで良く見える程に、顔がすごく近い。

「分かったから落ち着いてくれよ」

「……あ、ごっ御免なさ」

真っ赤な顔でぺこぺこしていた勇者がテーブルに頭をぶつけた。

「ああほら泣くなよ、飴やるからさ。これ体にすごく良いらしいぞ」

「おいひいです」

そりゃよかった。

ところで俺の”ジャンボデラックススーパー”まだ？

2.「もう勘弁してください、ホントに」（前書き）

前話にくらべて随分短くなってしまいました。
各話なるべく同じくらいの分量にしたいのですが、難しいですね。
努力したいと思います。

2.「もう勘弁してください、ホントに」

店を出たご機嫌な勇者と退治された魔王が並んで歩く。

「凄かったですね～じゃんぼでらっくすすーぱー」

その言葉に反応して、また俺の腹が嫌な感じに悲鳴を上げた。

俺はいま勇者の策略にまんまと乗られて大ピンチです。

「わたしお財布忘れちゃった」との衝撃のカミングアウトをしてくれた勇者。呆然とした俺の目に飛び込んできた食事代がタダになるとの張り紙。その条件が目の前の山を制覇することだった。

……だってさ、勇者と魔王が二人で食い逃げなんてカッコ悪すぎるだろ？

「また食べましょうねあれ」

「二度と食うか！」

巨人族専用って書いとけ。

「椅子に座る俺の頭より高いアイスの山だぞ？　あんなもの誰が食うってんだよ」

「わたしまだまだいけますよ？」

半分以上食いやがった異次元胃袋の持ち主が、余裕の笑みを浮か

べている。

「甘いものは別腹ですっ」と言い切ったコイツの胃袋は、あの白い世界に通じていたに違いない。だって明らかに胃袋の体積と食べた量に矛盾がある。それくらいの量を平気で食べやがったのだ。

そしてまた悲鳴を上げる俺の体。

ぐっ、これ以上この話題を引っ張っるのは精神的にも拙い。強引だが話を変えよう。運良く休めそうな公園を見つけた俺は、ふらふらになりながらベンチを目指した。

＊　＊　＊

「ああ、いい天気ですねー」

「そうだなー」

「こんな陽気だと甘いものが食べたくなってきませんか？」

「もう勘弁してください、ホントに」

賑やかな街の中心から少し離れた公園で、ベンチに座って語らう勇者と魔王。

俺は未だに半信半疑だった。実はこうやってのほほんと駄弁っている事こそが、俺を陥れる罠だったりしないかと。いま斬りかかられたら確実にやられる自信あるもんな。そもそも勇者がこんな小娘

ってのが怪しい。裏で操ってる”真の勇者”とか出てこねーだろうな。

「わ、わたし本物ですってば」

「心を読むなっ」

ひょっとして、何か読心魔法でも使ってるのかもしれん。今からでもやっぱ一緒に行くの止める。えへ、とか誤魔化して逃げようかな。

「そんな。ひどいです」

「だから心を読むなってのー！」

「うぅ、ごめんなさい。こんなコト他の人とは一切無かったんですけれど、なぜか魔王さんの考えている事って解っちゃう気がするんですよね」

何となくにしては、嫌過ぎるほど正確なんですけど。

「きっと私と魔王さんが出会うのは運命だったと思うんです」

ああそうだろうさ、でも間違ってもこんな形ではない気がする。……って何故アナタはそんなに頬を染めて嬉しそうにしてるんだ。変なヤツだ。

それにしても、と街を見渡す。輝く緑が眩しい公園では、子供か

ら老人までがその光を浴びて皆一様に笑顔だ。なんというか、絵に描いたような平和な風景だ。

「なあ。こうやって見る限り、この世界はとっても平和っぽいんですけど」

爺ちゃんと孫が白い鳩に餌やってるよ。

「そうですね」

とても優しい顔で、相槌を打つ。誰かが嬉しそうにしている姿を見ることこそが、こいつは嬉しいのかもしれない。まだ殆ど何も知らない相手だが、そんな気がした。

「確かにこの街は平和です。でも遠くの国では、今でも人が死ぬ争いが繰り返されているんです」

命を奪い合うなんてとても悲しいことだから、どうしてもそんな悲劇をなくしたい。そう呟く顔は確かに勇者っぽかった。ちょっと感心する。

「なあ勇者。お前さ、」

「リアです」

「ん？」

「最初にすること決めました。私のことリアって呼んで下さい」

「いや、話に繋がりが全く無いですね。何でそんな怒っているんだ

お前」

「私にはリアっていう名前があるからですっ。私も魔王さんのこと名前で呼びますからっ」

「……まあ、いいけど。俺の名前は――」

言いかけたところでハッとした。

「呪いか？　呪いでも使う気なんだろ。名前書くだけで相手を殺せる魔導書とか」

サクッ

「さく？　ってぎゃあああああっ！！！」

流れるような動きで伸びてきた聖剣が、俺の額に浅く刺さった。

「酷いですっ。わたしそんなことしませんっ」

「酷いのはお前だばかちん勇者！　どこの世界に魔王刺す勇者が」

いるな。勇者なら皆やってるっぽい。

なんだ、そうか。そういえば当たり前だよな……と納得したら、何だか白い世界が見えてきた。

「っ大変っ！　どうして額から血を流して！？　今治しますから！」

「何でお前がビックリしてんだよ！　というかお前のその台詞が白

々しいのは気のせいだよな？　……って、痛いっ！？　いでででで！　やめろ、やめてくださいっ。魔族に聖なる波動は駄目だから止めて！」

「あ、元気になりましたね。よかったー」

目の前の笑顔が何故か怖い。……お前、やっぱり怒っているのか。

「さあ、教えてください。貴方のお名前は、何とおっしゃるのですか？」

考えてみれば、自分だけ名乗らないのも失礼な話だよな。何となく会話の流れが怒涛過ぎてタイミングを失っただけだし、言わない理由なんて無いんだけど、……何故か改めて聞かれると緊張するのは何故だろう。自分の事ながら解らない。

「ダメ、ですか？」

俺が黙ったのを拒否と捉えたリアの顔がしょんぼりと曇る。さっきから思っていたけどその顔は反則だ。

「レオンだ。よろしくな、リア」

「はい！　改めて宜しくお願いしますレオンさん」

ぱあっと晴れる表情は、まるで頭上に広がる気まぐれな空みたいだ。

これからどうなるかは分からない。でも一応、俺がここの世界にやってきた建前は”世界征服”だから渡りに船と言えなくもないし。

どうせ他にやることも無いんだ。暫く付き合ってみるもの悪くない……よな？

「ではっ、張り切って世界征服やってみましょ～、おー！」

「お、おお……」

このノリはどうかと思うけど。

2.「もう勘弁してください、ホントに」（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。
どこまで続けられるかわかりませんが、少しずつでも書いていきたいと思います。

3.「悪いのは俺か？　俺なのか？」

世界征服なんて物騒な会話をするには、人気がない場所がふさわしい。俺達は少し移動して、公園の奥にある林の中にまでやってきた。

少し林の中を進むと唐突に視界が開け、見上げるような大きな岩があった。周囲は木が倒れていて、ちょっとした広場のようになっている。都合よく座れそうな倒木があったので、そこに腰掛けてお話をする事になった。

「早速ですけれど、具体的にはどうしたらいいんでしょうか？　世界征服って」

「世界征服って事は、この世の全てのボスになるってことだろ？」

輝く瞳が俺を見つめる。実は頭の片隅で世界征服なんてただの冗談かもしれない、と思っていたのだが……そんなことは無いらしい。すごく期待されていた。

今更ながら、困ったかもしれない。

親父から習った方法は”軍事力で片っ端から制圧”という身も蓋も無い方法なのだ。そんな事を正直に言ったら、この勇者に成敗されるかもしれない。争いが嫌いなヤツに対して武力で解決するなんて手法を進言したら、逆鱗に触れかねない。

……いや、何故か俺に対して妙に素直な態度をとるコヤツならば、俺が言えば本当に武力で世界を制圧してしまうのかもしれない。本

人はこんなぽやぽやした雰囲気だが、手にしている聖剣は間違いなく本物。その威力は十分世界制圧可能なレベルのはずだ。

「世界を平和にするのですっ」とか言いながら聖剣振るって世界制覇。そして何時しか魔王と呼ばれるリア。そんな未来が想像できてしまう。

ニコニコしているリアの顔がちょっとだけ傾く。急に黙った俺を見て不思議がっているらしい。

言うべきか、言わざるべきか。果たして正解はどっちなんだ。

「突然頭抱えちゃってどうしたんですか？　レオンさん」

「もし変な事になったら悪いのは俺か？　俺なのか？」

勇者に世界征服の方法を告白しちゃって良いものか、今更ながら悩む俺。ここでリアを更生させる事こそ世の為なのかもしれん。

どうしようかと暫く悩んだ末、結局は正直に言ってみた。

結果、勇者が手にしていた聖剣が微かに光ったかと思うと、俺の髪が二本ほど斬られた。

「うおい！　無言のままで突き刺してくるんじゃない！　暴力反対！」

木から飛び降りて、泣きそうになりながら必死に訴える。そんな俺の目の前で、リアも「え、エクちゃん？　突然どうしたのっ」と必死に金属の塊に話しかけていた。

「……何をやってるんだお前」

「んっ、この子普段はとってもいい子なのに、急に暴れだして……エクちゃんいい加減にしなさいってば」

どうやらリアは俺を成敗しようとした訳ではなく、突如暴れだした剣を必死に宥めようとしているらしい。だがちっとも成果が上がっておらず、ガクガクと揺れながら切っ先が俺に向いていた。

「ああもう、エクちゃん。レオンさんに斬りかからないで」

その聖剣は職務を全うしようとしているだけだと思う。……それにしても流石は伝説の聖剣、勝手に動くのか。しかし、猛犬エク公も主に繋がれては手出し出来まいて。かっかっか。

「……え？」

聖剣が届かない安全圏に避難していた俺の視界が真っ白に染まる。直後にとんでもない轟音が響き渡り、気付いたら近くにあったはずの大岩が粉々になっていた。

「おいお前ふざけんな！　この辺り一帯を破壊する気か！？」

岩があった周囲の地面も、底が見えない程深く抉れている。聖剣のふざけた威力を目の当たりにして不覚にも背筋が寒くなった。

遠くではハトに餌をやっていたジイちゃんがひっくり返っていた。ひょっとしたら目の前のコイツこそが、世の平和を乱す元凶なのかもしれない。

「ご、ご免なさいっ。エクちゃん、こんな所で暴れちゃダメです！」

「何とかしろよ。お前持ち主だろ、どうすりゃ大人しくなるんだ」

「一度レオンさんを切らせてあげると落ち着くと思うんですけど」

「死んじまうよ！　そのお願い聞いたら間違いなくあの世行きだよ！」

他に手は無いのかと詰め寄った俺の顔に向けて、またも鋭い切っ先が襲ってきた。さすがに予想できていたので避けられたが、まともに斬られたら多分死んじゃうと思う。

「そうだお前、剣から手を離せよ。そうすれば止まるんじゃないのか？」

「確かにそうかも知れないですけど、手が固まっちゃって離れないんですっ」

持ち主から切り離せば大人しくなるかもしれない、と思ったのだが、どうやらアレは呪いの剣並みに性質が悪いらしい。仕方がないので少々手荒な方法を取ることになった。

＊　＊　＊

聖剣は持ち主の体勢などお構いなしに、無秩序な機動で暴れまわっている。持ち手と一体でない分だけ動きの鋭さはないが、全く意

味不明の機動を描く為動きが読めない。

とにかく、避けてばかりでは埒が明かない。道具に振り回されている未熟者に向かって手ごろな木の枝を投げてみた。

枝がリーチ内に侵入した途端、聖剣が反応する。ただ一閃しただけにしか見えなかったのに、木の枝は跡形も無いほどにバラバラになってしまった。

「うーわ……」

まともに斬られたらどうなるか分からない。一瞬逃げてしまおうかと思ったが、こんなことで逃げたらいい笑いものだ。

「大人しくしていろよ、リア」

狙うのは聖剣を握る手元。そこを強めに叩いて離させてやる。リアが頷くのを確認して、覚悟を決めて突っ込んだ。

「うおっ」

惜しいところまで近づけたのだが、慣性を無視したような動きで阻止されてしまう。斬られそうになりながら、何とか刀身の腹を両手で掴むのが精一杯だった。

そのまま強引に引き離そうとしたが、どれだけ力を入れても聖剣はビクともしない。冷や汗をかきながら力比べをしている間に、俺の腕が早々に悲鳴をあげだした。

「このっ。負けるかっ、折角この世界に復帰できたんだ」

俺はまだ何もやっていないんだ。復帰してからやった事といえば、変な勇者と話した事と、馬鹿みたいに大きなアイスを食った事だけ。こんな状態で死んだら情けなくて涙が出てくる。

……しかし、このままだとジリ貧だ。細心の注意を払って後ろに飛びのくと、俺は周囲に散らばる岩の破片に手を伸ばした。

「おーい、リア」

「はいっ、どうしました？」

「当たりそうになったら避けろよ」

はい？　と目を丸くした勇者を尻目に、さっきバラバラになった岩の破片を手に取る。思い切り振りかぶると、そのまま破片を投げつけた。

「きゃっ！　レ、レオンさん!?」

身を竦ませたリアとは違い、剣が正確な動きで破片を打ち落としていく。それを確認した俺はやや大きめの塊を手にした。リアの顔が少しだけ引きつる。

「あ、あの、ひょっとして」

「頑張れ」

異論は受け付けない。そもそも持ち主がちゃんと猛犬を繋いでおかないからこんな目に遭うんだ。リアの訴える目を無視して、先程と同じように岩を投げつける。しかしその後がちょっとだけ違う。リアの目の前に迫った岩が、迎撃される前に五つほどに割れた。

リアの四肢と頭を狙うように綺麗に分かれた岩だが、当然聖剣も黙っていない。僅かな速度の差を見切って両足、両手を狙う岩を打ち落とし、最後に頭を襲う岩を打ち落とした。

「ったく、手間掛けさせやがって」

カシャン、と澄んだ音を立てて聖剣が地面に落ちた。

……動かないな、よし。これで剣が勝手に動いたらどうしようかと思った。

「大丈夫か？」

「あ……え、どうなったんですか、今」

「岩に気を取られている隙を狙ったんだよ」

剣がどう動くか予め解ってさえいれば隙を狙う事も簡単だ。聖剣がリアの頭を守るように動くことが解っていたので、そこを狙って叩き落としてやったのだ。

ぱたり、と地面にへたり込むリア。

「どうした？　俯いて。ひょっとして腕、痛かったか？」

それともまさか、ホントに俺を撃破する算段が崩れてがっかりしてるとか。

「よかった、ほんとに良かったですっ」

「おいおい、どうしてお前が泣きそうになってるんだよ」

「嬉しいんですっ」

もう、と膨れた頬がすぐに笑顔に変わった。

＊　＊　＊

「それで、あの、先ほどレオンさんが言いかけた征服のやり方についてなんですけれど」

「あ、ああ、アレな」

今の乱闘騒ぎに乗じて有耶無耶にしてしまおうと思っていたのにやっぱり覚えていやがった。こうなったら仕方が無い、適当な事を言って誤魔化そう。でないとまたあの剣が暴れだして俺の命が危ない気がする。

「あー、実は、この世界には人間を裏から支配する悪いヤツがいるんだ。そいつのせいで今この世の中に争いが絶えない。そいつを探し出し、やっつけちまえば良いんだ。そうすれば世界はお前の思うままになる……気がする」

どうしよう、我ながらあまりにいい加減すぎる。こんな出鱈目いくらなんでも流石に信じないだろうし、他にそれっぽい出鱈目を考えないと……と焦っていたのだが、どうやら俺の与太話を信じちゃったらしい。

これからの旅の行方が、だんだん心配になってきた。

＊　＊　＊

「それにしても、先程は本当にごめんなさい。二度とあんな失礼なことしないように、エクちゃんにはきつーく言っておきますから」

俺がこれからの旅の行方を憂いている最中、リアはどこかへ唐突に消えたかと思ったら、すぐに座布団を抱えて戻ってきた。

何を始めるつもりだと不思議がる俺をよそに、リアは座布団の一つを地面に置く。そしてその上にエク公を垂直に立てた。

リアが手を離しても、バランス思いっきり無視して立っている。呆れている間にリアが同じように座布団を敷いて正座した。

「レオンさんもどうぞ」

リアはにっこり笑って俺の足元に座布団を敷いてくれた。何か抗い辛い雰囲気なので、おとなしく従う。何が始まるんだ？　と頭の中をクエスチョンマークで埋め尽くした俺の目の前で、リアは聖剣に声をかけはじめた。

「……というわけで、ね、エクちゃん。この人は魔王だけど私の大切な師匠なの」

「いつの間に師匠認定されてたんだ」

「もう、茶茶を入れないでくださいっ」

思わず口をついた呟きがリアの邪魔をしてしまったらしく、怒られてしまった。

でも剣に言い聞かせるって、俺は軽く封印するとかそういうのを想像してたんだけど。

『しかし……』

そう、しかしいくらなんでも、本当にこうやってお話するなんざお前は三歳児か。

……ところで、今「しかし……」って言ったやつは誰なんだろう。周囲を一応確認するが、やっぱり誰もいないので首を傾げる。

「もう、エクちゃん頭固いよ。この魔王さんは一緒に世界を平和にする手伝いをしてくれるんだから」

『魔王と行動を共にするなど、私には到底理解が出来かねます』

ですよねー。誰だか知らないが、その反応はごもっともだ。何だかこの世界に復帰してから初めてまともなヤツと喋った気がする。

「……だからさ、誰の？　今の声」

「エクちゃんの声です」

リアの答えに黙考すること暫し。俺にひとつの答えが浮かんだ。

「……あ。ひょっとして腹話術か？　お前上手いな。そうだあれ出来る？　時間差のやつ」

『こんなふざけた男と馴れ合うなど、できません』

まさかの罵倒にちょっとショックだが、本当に上手い。全くリアの唇が動いてないのだ。

「だから違いますってば」

せっかく褒めているのに、リアは唇を尖らせて否定する。隠さなくったっていいじゃないか。それならそれで考えがあるぞ、と背後に回る。不思議そうに背中越しに見上げてくるリアに後ろから抱きついた。

「えぅ！？」

そのままリアの口を手でそっと覆ってやる。これで腹話術はできないだろう。どうだ、さっさと認め――

『貴様ッ！　わが主に手を出すとは許せん！　その穢れた手を離せッ！！』

「……え？」

「むーむー」

苦しそうに顔を振っていたリアに謝る。思わず力が篭っていたらしい。

「ぷはっ、ど、どうしたんですか？　いやべつに嫌だったという訳じゃなくって、でもいきなりでちょっとびっくりしたというか、あのその」

「喋るの？　アレ」

主人を人質にされたと思っているのか、聖剣エクスガリオンは座布団の上でピョンピョン飛び跳ねて怒りを主張している。

「ああ、はい。エクちゃんとは時々こうやってお話しながらお茶を飲んだりします」

「飲むんだ。そうなんだ」

怒り狂うエク公に向かい降参の意をもって、俺は両手を上げた。

再び話し合いが始まって、ようやくエク公の方が折れた。

リアが「言うこと聞かないなら、ここでエクちゃんを捨てちゃいますからね！」と宣言したからだ。ものすごい問題発言だった気がするが、俺も自分の身は可愛い。黙っておこう。

『ふん。我が主に変なことをしたら、たたっ斬ってやるからな』

そんな素敵な捨て台詞を残して、ようやく大人しくなったのだった。

……どうしよう。こいつらとの旅が今後どうなるのか、非常に心配になってきた。

4.「レオンさんって方向音痴なんですか?」（前書き）

こんにちは。こんな拙作を読んでくださった方、ありがとうございます。

今回から場面がちょっと変わります。

4.「レオンさんって方向音痴なんですか？」

俺達は今、パレット・ハイロードという街道をのんびり歩いている。

さっきまで滞在していた如何にも平和な街はパレットという名らしい。あの街に長居しても何をやれば良いのか見えてこなかった俺達は、とりあえず別の場所に行くことにしたのだ。ここパレット・ハイロードを道なりに進むとハイグレイ王国っていう大きな国に通じるらしいので、今はそこを目指している。

外に出て思ったのだが、流石に１０００年も俗世から離れていると、地理が全く知らないものに変わっていて困る。が、意外なことに違いはそれくらいで、今のところ文明は１０００年前に比べさほど発達していないように思えるのだが……実際のところはどうなんだろうか。馬を引いて畑を耕す農夫の姿を見る限り、俺には違いが分からない。

ただ一つ気になるといえば、時折見かけないモノを手にしている人がいる。アレは何だろう。

「ああ、あれは方角を知ることが出来る”コンパス”です。」

物珍しそうな俺の視線に気付いたのか、横から解説してくれた。

でもコンパスって昔から有った気がするけれど、あんなに大きくなかったぞ？

「コンパスと言ってもただ方角がわかるだけではありません。地図

を投影することが出来ますし、あのコンパスを持つもの同士、お互いの位置がすぐに解かるという優れものなんです。」

へー。でもさっきから何人かが持ち歩いているけど、あいつらの位置情報がみんな判るのだろうか。

「それって困らないか？　知られたくないやつにまで、今の場所を知られるんじゃ。」

「その心配はないです。各コンパスは固有の番号を持っていて、番号を互いに登録した相手にのみ居場所がわかる様になっているんです。」

なるほど。このコンパスは最近になって発明されたマジックアイテムらしい。使用者が魔術を使えなくても相手の位置が判るなんて便利なモノが出来たもんだが、流石にそこそこ高価らしく使っているのは行商人や冒険者が多いのだとか。あまり普及はしていないのな。

「お前も持ってるのか？」

「はい、私の必需品ですから。」と得意そうに見せてくれた。大きさはリアの小さな手に少し余るくらいで、まんじゅうみたいな丸い形をしたコンパスの中心には何やら地図が表示されている。

「中心の三角が俺達？」

「その通りです。このコンパスの最も優れているところはナビゲーション機能なんです。これさえあれば、赤ちゃんだって目的地に辿り着けるんですよ」

すごいでしょ、と何故か胸を張る勇者さま。へー。ああこの灰色が山なのか。こっちの青色が川で、緑が平原。その中心を通る線がこの街道という具合に見るんだな。成る程コレなら迷いようがない。

俺が全くこの世界を知らない手前、自然と先導を勇者に任せる事になっているのだが正直に言って不安だった。この勇者は恐らく平気な顔して道に迷うタイプに違いない。でもいくらなんでもコレ持ってりゃ大丈夫だよな。

ところでさっきからキョロキョロしてるけど、どうした？

「……すみません、ここ、どこですか？」

「ふざけんなお前！」

ボケか？　ボケたんだろお前。ちっとも笑えないけどな！　さっき赤ちゃんだって大丈夫だと言ってから数秒しか経ってねえぞ。そもそもなんで一本道で迷えるんだよ、ナビいらねえじゃんか。

さっきまで絶好調で明るい場所を行進していたのに、気付いてみれば森の中。

いや、何で道を逸れたのかなー、とは思っていたけどさ。

「困りました。おかしいですね、どうしてこんなところに来てしまったのでしょう」

失敗の原因を真剣に考えてやがる。

「とにかく、来た道を戻ろう。さっきの街道に戻ればいいだけなんだろ？」

そうですね、と同意を得たところで踵を返した。やっぱり俺が先頭になろう。

＊　＊　＊

「おっかしいなー」

１０分経過。俺達はみごとに途方に暮れていた。

既に往路に費やした時間は軽く経過しており、もうこの森から飛び出しても良い頃はとっくに過ぎ去っていたのに、ちっとも森を抜けられそうにないのだ。

「レオンさんって方向音痴なんですか？」

「やかましいわ！　このおおボケ勇者！」

誰のせいでこんな所をさまよってると思ってんだお前。

「ひどいですー」と抗議するちんちくりんを放置して真剣に悩む。おかしい、いくらなんでも来た道真っ直ぐ帰るだけで迷うわけがない。いくら１０００年の間バカをやっていたからといって、方向感覚までバカになっていたとは思いたくない。多分、おかしいのはこ

の森だ。

さっきから気にはなっていた、妙に瘴に障る気配と何か関係があるのかもしれない。

誰かに視られている。

「敵意満点って感じだな。こいつらか？　森が変になってる原因は」

『そのようだな』

……、この声は。

嫌そうに顔を顰めて振り返ると、やっぱりエク公が座布団の上に鎮座していた。

座布団って必須アイテムだったのか？

「困った時、こうやってエクちゃんにどうしたらいいか聞くんです」

リアと一緒だと俺が信じていた勇者像をことごとく否定されていくように思えるのは気のせいだろうか……などと思考がふらついた俺をよそに、リアは「ね、エクちゃんどういうこと？」と話を進めていた。

『どうやらこの森に居る輩が、我々を敵とみなしてうろついているようです。』

そう。森に入った時から変だとは思っていた。野生の動物には無い、色のある殺気がちくちくと鬱陶しいのだ。

『恐らく彼らの仕業でしょう、森全体に惑いの結界が敷かれているようです。脱出する為には術者を探して解除させるしかありません』

「でも、探すってこの広い森の中をですか？」

不安そうに眉を寄せるリアの言うとおり、確かにそれは問題だった。海のように広がる森は、何処までも続いていそうな程に広い。こんな広さの森をあても無く捜索したら、それこそ空腹や疲労で力尽きそうだ。

「転移魔術とか使えないのか？」

俺の勝手なイメージだと、一度行った事がある場所にはすぐ飛んでいけるような魔術がありそうな気がするんだけど。少し面倒だけど一旦パレットに戻ったほうが楽じゃないか？

「うーん……あるにはあるんですけど、敵対する結界が張り巡らされているような不安定な状況で無理に飛ぶと、困ったことになるかもしれません。止めておいたほうが良いですよ」

えー、いいじゃん頑張れよ。飛んだほうが楽じゃないか。

「困った事って例えば何だよ」

「気が付いたら腕を置き忘れちゃった、とか。聞いた話ですけれど、過去にそんな例があったみたいで」

やめましょう。うん。それがいい。

「念の為に聞くけど、コンパスはどうなってる？」

外へ出るヒントが表示されていないかと聞いてみたのだが、リアから差し出されたコンパスには森を示す緑一色と中心の三角しか表示されていなかった。このコンパス最大望遠の表示半径はざっと１０キロって所だから、本当なら森以外の表示があってもよさそうだ。なのにそれが無いという事はコンパスすら影響下に置くのか、それとも森に入った瞬間に奥地に飛ばされたのかもしれない。

……だったら気付けよ俺。

なんだか急に自分が情けなくなる。俺は一応魔王だってのに、こんな罠に引っかかって気付かないとは。

困ったことに、自分は本格的に呆けているのかもしれない。思い出せば、エク公とちょっとバトルした時もイマイチ感覚がおかしいというか、慣れないというか……とにかく本調子じゃなかった気がする。うーん、全盛の頃の感覚が思い出せない。この１０００年一切戦いなんてしなかったし。

「これからどうしましょうか、レオンさん」

「ま、悲観的に考えてもしょうがないな。ほらほらそんな顔しない。お前、勇者として今までやってきたのならこれくらいの試練あっただろ？」

「えと、私はずっと仲間の皆に助けてもらっていましたから」

えへへ、と恥ずかしそうに照れ笑いするリア。

予想はしていたが、やはりこの勇者にもパーティメンバーは居たようだ。でも今は一人なんだよな。あ、魔物退治が終わってパーティ解散したのかな。もうちょっと面倒見ていてくれてたら良かったのに。

『おい』

無粋に割り込む声。

わかってる。探す手間が省けたよ。

＊　＊　＊

俺たちの代わりに丸焦げになった木の陰に隠れながら、周りを伺う。

「何人だ？」

複数なのは間違いない。相手は結構な力量を備えているようで、いきなり仕掛けられたこの炎術にしてもまともに当たれば痛そうな威力だった。周りの大木が燃え上がり炭と化してゆく様を横目に、襲撃者を探す。

「5、6人といったところでしょうか。どうしてこんな事を……」

リアも流石に戦闘となると顔つきが変わる。油断なく辺りを伺う表情は間違いなく戦士のそれだった。互いに背を向けて周りを伺う。ぶすぶすと木の焦げる音と匂いが漂うここからでは、襲撃者の姿を見つけられなかった。

「さあな、相手に聞けば早いんだけどさ。ところでリア」

「なんですか？」

「命を狙われる心当たりは？」

「無いですよっ、そんなの」

「それじゃ、やっぱ俺のせいか？」

「え、どうしてレオンさんが狙われるんですか？」

「こいつらはお前と違って常識的なんだろ、っと！」

今度は氷だ。1メートルは優に超える氷柱が片っ端から降り注ぐ。

どうやって対応しようか考える俺に先んじて、リアが進み出た。手にした剣を握り締めて1、2、３４５。最後は横薙ぎに一閃。５つの氷柱が使命を果たすことなく砕け散った。

「止めてください！　私たちに争うつもりはありませんから」

リアの呼びかけに対する返事は雷撃。威力は氷の一撃に劣るが、

雷は広範囲を薙ぎ払うので回避が難しい。今度は俺が前に出た。

足元に染み込ませておいた魔力を一気に中空へ解き放ち、巻き上げた大量の土を盾のように前に固定する。相手から見れば、突如地面が垂直に立ち上がったように映ったかもしれない。狙い通り雷撃を防ぎきった土が地面へと還るタイミングを見計らって、ぽい、と拳大の石を適当な場所へと放り投げた。

「リア。ちょっと耳を塞いでいろ」

「はい。……どうしてですか？」

すぐわかる。

石は地面に触れた途端に閃光を発し、大きな破裂音が周りの草木を振るわせた。俺の影になるよう隠してやったのに、それでもかなり驚いたリアの顔が面白い。バカにしてやりたいが、先に面倒ごとを済ませないとな。

意識を集中した俺の耳に、俺達とは別の微かな足音が聞こえた。俺の反撃に驚いたのだろうか、浮き足立っている様だ。数は3。恐らく2手に分かれた片方だろう。残りの連中が潜む場所はまだ確信が無いけれど、恐らく俺達を挟んで反対側。挟撃される前に見つけた端から叩いていこう。数が半減すれば攻撃も少しは大人しくなるだろう。

こんな長ったらしい思考をする間に目標を補足した。やはり3人いた連中は、立派だがどこか草臥れた灰色の魔術師ローブを纏っていた。さて、どうしてやろうか。

「とりあえず、気絶しててくれ」

ここで下手に殺しちゃうと後ろの勇者に俺が裁かれかねないし。

苦し紛れに放たれた火の玉を素手で捕まえる。若干暴れる火の玉にちょっと細工して投げ返してやった。ぽかんと口を開けた三人の直上で”元”火の玉が弾けると、連中がばたばたと倒れる。疲労も手伝ってかアッサリと眠りに落ちてくれたみたいだ。

振り返ると剣の音が止んでいた。向こうの連中はリアが片づけたらしい。よしよし、偉いぞ。

＊　＊　＊

「んー……」

自分の両手を見つめながら、俺は首を傾げた。やはり、自分の体に小さな違和感がある気がしたのだ。

今回程度の連中（恐らく、人間の一般的か少し上位クラスの魔術師だと思う）を相手にするには全く問題ないが、このままの状態でちょっと腕の立つ相手が現れたらと思うと、あまり笑えない。

今の自分が本調子じゃないという根拠はただの感覚であり、酷く曖昧なモノなのだが、親父らに鍛え（イジメ）られていた頃の自分はもっと力を持っていた気がする。なんだろう、何かされたか俺？

「レオンさーん、どーこでーすかー　逸れちゃだめですよー」

たかだか３０メートルも離れていないのに逸れる方向音痴の泣き声で、思考がぷっつり途切れた。嘆息して救出に向かう。

「あれ、どーこでーすかー！」

ひょっとして俺の調子がおかしいのはアイツのせいかもしれん。本当に調子狂う。

4.「レオンさんって方向音痴なんですか?」（後書き）

前書きに続きまして。

今後の展開は一応考えてあるのですが、その通りに進められるかどうか、結構怪しいです。本当に文章を作るのって難しいですね。

投稿する前に何度か見直すのですが、そのたびに文章を直しているので、辻褄が合わないような変な所があるかもしれません。というかきっと色々あります。ごめんなさい。

5．「こらこら、どこへ行くんだ」

「で、こいつらは結局何者なんだ？」

目の前には気絶した狼藉者６名が転がっている。狙われたのは俺が魔王だからかと思っていたが、よく考えたら誰も俺（魔王）が出てきた事を知らない筈なのに、いきなり襲い掛かられるのもおかしな話だ。ひょっとしてただの山賊だろうか。

『山賊にしては高等な魔術師が揃い過ぎている。恐らくは高位の主を守る近衛兵といったところだろうな』

「随分と具体的な推測だな？　あと唐突に喋るんじゃないよビックリするだろ」

『ふん、貴様は知らんだろうがローブにエンブレムが刺繍されている。これはラインハルト卿のものだ』

さっきの小競り合いのせいか、さらにボロくなったローブを指して言う。誰だそのなんとか卿ってやつは。

「ラインハルト卿といえば、長きに渡ってハイグレイ王国に仕えている名士です。でもエクちゃん、どうして卿の近衛兵さん達がこんな場所に居るの？」

誰もその問いに答えを持たない。

そもそも俺は関係無い面倒事に首を突っ込みたくないので、そん

なクエスチョンは後回しでもいいと思う。問題は、どうしたらこのふざけた森から脱出できるかって事だろう。

「ところで、肝心の結界は解けたのか？」

リアが首を振る。やはり俺と同じ意見だった。まだ森の雰囲気は変わっておらず、方向感覚が狂うような気持ち悪さはまだ続いている。

『こやつらを倒しても結界が解かれないところを見ると、術者は他に存在するという事だろう。この森を出るのなら、何れにせよその者に会わねばなるまい』

そうなるよな。まったく厄介な事だ。

「ところでその術者ってのは何処にいるんだ」

『……知らん』

肝心な時に役に立たないなお前。

＊　＊　＊

「ところでさ、近衛兵がここに居るって事は、こいつらが守っている主もこの森に居るって事だよな？」

「近衛兵が主の傍を離れることは考えにくいですから、そうだと思います。どうしてこの森に居るのかは解りませんけど……」

どんな理由か知らないが、近衛兵はラインハルトをこの森の何処かに匿っている……のだとしたら、俺達がこいつらに襲われたのは、主を襲う敵だと勘違いされたからなのかもしれない。ただの迷子なのに。

「……あれ？　この森に要人を匿っているのなら、どうして侵入者が森から出られないような結界敷いたんだろうな」

連中がラインハルトをこの森の何処かに匿っていたとしよう。

それを誰にも知られたくないというのなら、人避けの結界を使えば良いと思うのだが。そうすりゃ俺達も迷い込まずに済んだのに、この森にかけられているのは恐らく幻覚と封印の結界だ。

『ふん。この森は大きな街道の近くにある。近道にもならない森など、普通誰も近づかぬ。狩に適する獲物にも乏しいしな。』

この森に近づくのは敵である可能性が高いから、追い払うのではなく罠にかけて始末すると？　情報を持ち帰らせない為に？　何か物騒な話だなおい。

「うーん、結界の狙いがどうであれ、術者さんに会って誤解を解かない事にはここから出られそうにないですよね。どうやって探しましょうか。この人達は当分目を覚ましそうにないですし」

少々脱線した話を元に戻すが、衛兵達は未だに気を失ってだらしなく寝そべっていた。

叩き起こしたところで口を割るようなやつらじゃなさそうだ。手荒な真似は絶対にリアが許さないだろうし、そうなると他のモノに尋ねるしかない。

「それなんだけどさ、良い方法思いついた」

ごそごそと気絶連中のポケットを探る。こんな森の中でウロウロしている連中だ。持っていてもおかしくないと思う。……よし、あった。

「おいリア、これ見てくれないか」

思った通りに見つかったコンパスを、リアに向かってポイっと投げた。

ゴツっ

「痛いですっ」

お前、運動神経切れてんのか？

「……これ、どうするんですか？　人のもの取っちゃうのは駄目ですよ」

「借りるだけ。なあ、そのコンパス使えば主の居場所が解からないか？」

はっとするリアの顔。慌ててコンパスをいじり始めると、すぐに答えが返ってきた。

「ありました、ここから北西約5キロの地点に複数の人が固まっているようです」

ビンゴ。

「その位置をお前のコンパスに移せるか？　よし、それじゃ行くか」

＊　＊　＊

あちこちから飛び出る枝葉や青々と茂る草を適当に払いながら、俺が先頭になって森を歩いてゆく。さっきまで先頭をリアに任せていたのだが、良く見たら全然違う方向に進んでいやがったのだ。

「おのれはワザとやってんのか？」

「うーん、不思議です。確かにこっちだと……ひょっとして！！」

これはもしかしてコンパスすら結界に惑わされているのでは！と戦慄するリアの手からブツを奪い取ること２０分。目的地はもう目前だった。

ただ黙って歩くのに飽きた俺は「そういえばさ」、と話を振った。

「さっきの話だけどさ」

「なんですか？」

「敵を皆閉じ込めちまえば、確かに森の中の情報は出て行かないだろうけどさ。敵からすれば放った刺客が何人も同じ森で帰って来ないとなれば、この森にターゲットが居ることがバレちまうんじゃないのか」

「もう既にそうなっているのだと思います。あの人たちの格好を見ても、私達と遭うまでに相当の数と闘っていたみたいですから」

こいつ時々中身変わるんじゃ？　と思うくらいにまともな事言ってる。

それにしても居場所がもう分かっていて、でも追っ手を何度放っても返り討ちにされる。そんな相手に懲りずに追っ手を差し向け続けるなんて、随分ノンビリした追っ手だよな。

……？

「いたっ……もうレオンさん。急に止まらないで下さいよっ」

鼻を押さえて抗議するリアからもっと文句が出てくるかと思っていたが、その前に俺同じ事を感じたらしい。視線が俺と同じ方を向く。ほんの少し、砂粒よりも小さなパチパチという音が聞こえるのだ。恐らくは――俺は空を見て確信する。

上空がみるみるうちに煙で覆われていくのだ。

「わ。な、なんですかレオンさん。急に引っ張るなんて」

「決まってる。急ぐぞ、火の手が早すぎる。ったく、よりによってこんなタイミングで火遊びとか最悪だ」

さっきの近衛兵との小競り合いで発生したような小火とは訳が違う。明らかに森を焼失させる目的が見えるような燃え広がり方だった。

信じられないと呟くリアの瞳。気持ちは解からないでも無いが間違いない。微かに流れてくる魔力の残滓をコイツも感じたのだろう、悲しそうに眉根を寄せた。

ひょっとしたら放火犯はラインハルトってヤツを狙っている人物かもしれない。探したい相手が森に潜み出てこないのならば、森自体を消してしまえば良いのだから。

……まあ、放火犯がどんなヤツかなんて、今考えることじゃない。どんどん昇ってゆく煙が青空を灰色へと塗り替えてゆく様を見る限り、ここも遠くない内に火が回ってくるだろう。その前に目的人物に会ってさっさと結界解かせてこんな森脱出すれば良いんだ。ほら行くぞ。

しかし、勇者の決断は違った。くるりと踵を返すと真っ直ぐに煙の立ち昇る方へと進んでゆく。

俺の手を握ったまま。

「こらこら、どこへ行くんだ」

「火を消しに、に決まっているじゃないですか。急げばまだ間に合います！」

そうですかご苦労様です流石は勇者偉いぞ勇者。でも何故俺の手を握っている？

「レオンさんが居ないと迷っちゃうじゃないですか」

「知らねえよ！　自信満々に何を言っているんだお前」

ったく、こいつの頭がどういう構造しているのか本気で調べてみたい気分だ。

結局リアが引っ張るままに引きずられて行く俺。放っておいたら後味悪いっつーか、森の中で迷子になられたら探すのが面倒だしさ。

こらこら、そっちじゃないこっちだ。

……。

生木の燃える臭いが強くなり、熱源が近づく。深紅の炎が近づく者を威圧する。地獄と化した範囲は既に視界に収まりきらないほどに膨れ上がっていた。

「うーわ……」

見ただけでゲンナリするほどの光景だった。コレを消すの？　本

当に？

やっぱり止めないか、とリアに訴えようとしたんだけど、やる気がハンパない勇者は既に水の魔術を唱えたのか大量の水をぶちまけて消火活動を開始していた。

「レオンさんはそっちからお願いします！」

……と言われても。俺水魔法はあんまり得意じゃないんだよな。

どうしたものか。かといってボケッと立っているだけってのは情けない。　あ、そうだ。

俺はたまたま手にしていたコンパスを見る。都合の良いことに、近くに青い表示があったのだ。あまり大きそうな川じゃないけど、コレを使おう。

ところで、世界征服するっていう当初の目的を忘れていないかお前。

＊　＊　＊

大体３０分も経過しただろうか。

ぶつくさ言いながらも消火作業は順調に進んだ。既に燃え残る面

積は三分の一以下にまで進み、俺達が進んだ後には水浸しになった木が焦げた体を並べている。随分と見晴らしが良くなった視界の先にはおお、紛れも無くさっきまで居たパレット・ハイロードと、何やら物騒な連中。

「げ、何か変なものまで見つけちまった」

灰色のローブを纏ったのが3人、これまた灰色の甲冑をつけたのが5人。向こうも俺達を見つけたのか真っ直ぐこっちに向かって走ってきた。

「がっはっは、とうとう見つけたぜ」

この妙に偉そうな男がリーダーなんだろうか。スキンヘッドがトレードマークらしいその男は、ニヤニヤ笑いがこんなに似合うヤツも珍しいってくらいにヤラシイ笑みを向けてきた。その髪型すごく似合ってるね。

「おら観念しろ、ここにラインハルト卿が居るコトは割れてんだ。」

何がそんなに嬉しいのか知らないが、男のニヤニヤ笑いにますます磨きが掛かる。

「いや、俺達も探してたんだけど」

俺の言い分を聞いておいて間髪いれずに大笑いしやがるタコ親父。

「バッカかお前、お前ら森の中に居ただろ？　ならアイツを守る兵士だろうが」

その２つをイコールで強引に結ぶお前こそがきっとバカだ。

「いや、ホントだって。パレットって街からハイグレイ王国に行こうとして道に迷っちまってさ」

「ウソつくんじゃねえよ！　あんな一本道で迷う馬鹿がどこに居るってんだよ」

いまそこで消火作業しています。

今度は取り巻き連中まで加わって爆笑しやがった。あくまで紳士的対応に努める俺だが、堪忍袋の緒が音を立てて軋みだした。

消しちゃおっかな。こいつらなら全員相手にしても多分１０秒も要らない。……でもそんな事したらきっと怒るよなアイツ。一応平和を愛する勇者だし。

俺がどうすべきか迷っている間に、消火作業を終えた防火隊長が駆けつけてきた。

「どうしたんですかレオンさん。この方達はお友達ですか？」

これから消そうかと。

「おーおーちっこいガキだな。こんなのに守られてんのかラインハルト卿ってのは」

再び起こる爆笑。その光景を見て、リアの顔が理解の色になった。

「やっちゃいましょう」

「マジッスか！？」

こいつに堪忍袋は無いらしい。

いやでもさ、仮にも勇者が一般人に暴行事件は拙いんじゃ。

「懲らしめてやるだけです。いいんです。おっけーです。ノープロです」

最後のはノープロブレムの略らしい。業界用語（？）に詳しい勇者が手ごろな枝を拾った。ぶぶんと軽く具合を確かめるリアに、

「おいおいおい。おチビちゃん本気かよ、俺そんな趣味無いんだけどな」

さらに油が注がれる。うわ、リアの顔がものすっごい笑顔だ。

「なあおチビちゃん、悪いことは言わ」

キレた。

俺でも一瞬見失いかける程の動作は、相手からすれば消えたリアが突然目の前に出現したように見えただろう。鼻先１ミリに突きつけられた枝がタコ男を全身金縛りにかけた。

「あなた失礼ですっ、私おチビちゃんじゃありませんっ」

あの言葉が地雷だったらしい、以後絶対に気をつけよう。

寸止めなしでアレやられたらマジで洒落にならないと思う。

――――――ん？

呆然の取り巻きが見守る中、自分の背後に生じた気配に気付けたのは偶然だった。

避けられたのは、ただの幸運だった。

6.「知らない人です」

空気すら振動しない。不自然な程に静かすぎる一筋が俺のすぐ傍を通り抜けて、焦げた木の枝を音も無く両断した。

ジャリッ、と乱入者の脚が立てた音が妙に響いて聞こえた。尾のように結んで流している長い髪の色は混じりの無い紅。俺の胸程の高さから睨んでくる瞳も透き通るような赤色だった。リアよりも僅かに小柄な外見をした女の白い手が持つ得物は、剣の類だがリアのものとは形が違う。確かあれは”カタナ”とかいう武器――

「っ！」

語る言葉も持たずにそれが揺らめく。空気を切り裂く音すらしない一撃を咄嗟に腕で防ごうとした。

「げ――」

魔力で硬化してある筈の服が紙のように散る。紙一重で回避できた腕が自分にくっついていることを確認して、不覚にも流れた冷や汗を拭った。

マズい、アレに触れたらただじゃ済まないだろう。斬ることに関してはエク公以上だ。何なんだこいつは……ひょっとして放火魔のボスはあのスキンヘッドじゃなくこいつなのか。

動きの鋭さはリア（エク公のみ）とほぼ同等。だが触れたら腕が落ちかねないモノを腕で受け止める訳にもいかない。木の棒を魔力

で目いっぱい硬化したら、何とか受け止められる……か？

「あぶねっ」

胴を狙う一撃を避けた俺は、地面に転がっている手頃な枝を掴んでありったけの魔力を込めて強化した。棒切れを振り回すなんて滅多にしないので自信ないけど、素手よりはマシだ。

ぽろっ。

え。

赤髪に向けて構えた棒切れが、真ん中から切断されてぽろりと落ちた。

「……無理だ。」

限界まで強化してこの有様かよ。

棒を投げ捨てて次の手を考えるしかない。

迂闊に背を見せて撤退するのはダメだと思う。目を離した僅かな隙に目の前まで間合いを詰めてくるような相手だ。背後からバッサリやられる可能性が非常に高い。

だったら立ち向かうしかないんだけど、相手に触れられない以上魔法を使うしかない。しかし魔法を使うとなるとどうしても無防備な一瞬が出来てしまう。そんな隙を見逃してくれる程甘い相手には見えないのだ。何か使えそうな物も落ちていないし。

どーしよう。

気付けばさっきまで居たはずの連中が消えている。何処に行ったか知らないが俺も一緒に連れて行って欲しかった。

「勘弁してくれよ……」

俺はただの不幸な迷子ちゃんですってば。

生まれた沈黙の時を狙い主張する俺の言葉にも、目の前の赤髪は耳を持たないかのように返事をくれなかった。

頭、足、胴、肩、腕。凶悪な刃が振るわれる度に冷たい汗が流れる。どうしようもなく心臓に悪い時間を過ごしている俺は、そんな中で一つの光明を見た……気がした。相手は頭を狙ってカタナを振り下ろした後、決まって足を狙ってくるのだ。

これが相手の無意識的な行動ならば、それを見越して攻撃を叩き込む事ができる。

ただ万が一、それが相手の意識的な行動だったとしたら、非常にマズイ結果になりそうだ。俺がこのクセを見抜いて反撃に出る瞬間を、相手が待ち構えているのだとしたら。

「……。」

あまりウダウダ考えている時間は無かった。このまま相手が諦めるまで避け続けるなんて選択はむしろ危険だと思う。俺が避けるご

とに動きに慣れてきたのか、相手の動きはむしろ鋭さを増している。

やるしかないよな。

胸を狙う突きを避けた先へ追尾するように、肩、腕、脚へとカタナが伸びてくる。ぐっと力を込めるように踏み込んだ相手が上段に構えを取った。来る。

頭を狙い振り下ろされたカタナを、まずは右へ回り込むように避ける。

相手はそのまま俺の脚を狙うように動くはず。それを避けて一気に反撃する為に、カタナを飛び越えるようにジャンプして一気に間合いを詰める。

何かを考える時間も惜しい。無防備に伸びきった相手の腕に狙いを定め、俺の右手に用意した雷撃を叩き付けた。

「ッ――」

相手の驚いたような息遣いが聞こえた。いける。目論見が成功したことを確信した俺は、予想外の動きをした相手にまた驚かされた。

体に雷撃が届く前に、赤髪は飛び込んだ俺の下をくぐるように体を投げ出したのだ。行き場を見失った雷撃が地面に吸い込まれて消滅する。慌てて振り返った俺から離れるように、赤髪は猫のような身のこなしで大きく距離を取った。まるで俺がこんな風に反撃することを予め知っていたような、鮮やかな反応だった。

「……これでもダメか。ったく、面倒な相手だ」

＊　＊　＊

そして俺は、また胃が痛くなるような睨み合いへと戻されてしまう。

しかしさっきまでとは少し状況が違った。相手との間合いが１０m近く開いているのだ。さっきまでとは違う、剣士に不利な位置関係だ。

この位置なら接近される前に魔法が使える。もう遠慮なんかしてやらない。小さな女だと思って油断していたらごらんの有様だ。

――――――あれ？

ふと気付くと、赤髪が構えを変えていた。

「……何だこのイヤな感じは。」

殺気が膨らむのが嫌でも解かった。エク公の時とは違う純粋な敵意が俺に突き刺さる。相手が武器を納めたというのに殺気が膨らむ一方の構えからは、悪い予感しかしない。

昔どこかで聞いたことがある。抜刀術と名付けられた剣技は防ぐ

ことの叶わない一撃必殺。相手の間合いに踏み込んだら最後、俺の体は2つになっちまうだろう。

しかしこの距離ならば魔法が使えるし、相手の武器は絶対に届かない。射程比べではこっちが圧倒的に有利なんだから、迂闊に前に出なければ大丈夫だ。そう自分に言い聞かせる。

「……。」

それなのに、俺は少しも安心できないでいた。まるで相手の射程距離内に突っ立っているような、皮膚がピリピリするような感覚が消えないのだ。

「。」

赤髪が、短く何かを呟いた気がした。カタナを納めていたヤツの脚が焦土に線を引く。鞘から引き抜かれる刀身が見えない。速過ぎて扇形としか認識できない赤銀が俺の遥か手前で空を切り、

冷たい何かが俺の右の頬に触れた。

「――――」

頭に沸き起こる疑問を全てキャンセルした。退け、と考えていたらその時はもう駄目だっただろう。情けなく仰け反りながらも、俺はまだ生きていた。恐る恐る頬に触れても、手に血は付かなかった。

心の中で舌を打つ。

とんでもないヤツだ。１０００年後の世界ってのはこんなのがゴロゴロしてるのか？

何故届いた。錯覚じゃない、間違いなくあれは命を刈り取る一閃だった。ぐるぐる巡る思考と共に改めて無言の襲撃者を見る。そいつは仕留め損なった事にか忌々しげに眉を顰めて、

「ちっ、なの」

変な語尾をつけた。

なの？

ふと殺気が消えたかと思ったら、そいつは刀を肩に乗せて笑った。笑いやがった。

「ジャイノスの手下にこんな骨の有る輩が居るとは思えないなの。あんた、なに？　なの」

今絶対に無理やり語尾付けただろ。

「……道に迷った旅人ってやつ？」

言ってから大笑いした連中を思い出す。しまった、もう少し本当っぽく聞こえる言い訳を探しとくんだった。こんなの誰も信じないよな……と後悔したのだが。

「それは大変だった、なの」

……どうも俺の周りにはちょくちょく稀少（変）なのが出現するらしい。ま、話が早くて助かった。

「俺達は此処から出たいだけなんだ。何とかしてくれないか」

「主様に頼まないと駄目なの。これから会いに行く、なの」

＊　＊　＊

「問答無用で切りかかられた時はどうなるかと思った」

「過ぎたことをクヨクヨしてもしょうがない、なの」

お前が言うとすごく腹立たしいんですけど。

口の先まで出掛かった文句を飲み込んで、目の前の赤髪に続いて森を進む。自信にあふれたその足取りは安心して先頭を任せられた。行く手に邪魔な枝を音もなく切り落として一言。

「あんたさっきの攻撃よく避けた、なの」

「あまり良く覚えていないんだけどな」

ふつうはその前に意識が切れてるの、などと物騒なことを言う。

「サキはあんたのこと気に入った、なの」

「そりゃどうも」

こいつサキって言うのか、聞く手間が省けた。まあ褒められたら悪い気はしないので適当に相槌を打つ。サキは上機嫌らしく、ふんふんと鼻歌なんぞ歌っていた。

「なあ、どうして俺に襲い掛かったりしたんだ?」

「主様を狙う不届き者の手下だと思った、なの」

聞けば今までにも襲撃されたことがあるらしい。相手はずいぶんとしつこいヤツらしく、もう何度目の事かは覚えていない、とつまらなそうに教えてくれた。

「お前、その間ずっと戦ってきたのか」

「当然なの。主様を守ることが私の生きる意味、なの」

生きる意味、ねえ。良く解らないけど、コイツがいれば何回襲撃されたところで負けないだろう。小さい体を精一杯反らしてふんぞり返るその姿はやっぱり小さい。リア以下かもしれない。良かったな、お前よかちっこいのが……。

!?

「? そんなに汗水垂らしまくってどうした、なの」

忘れてた。かんっぜんに頭から抜け落ちてた。あの馬鹿は何処へ。

いない。どこを見渡してもあの方向音痴の姿が見つからない。

「なあ、さっき会った場所に、お前よりすこし大きいくらいの女の子居ただろ？」

あんなのでも放置すると後味が悪い。リアのやつ間違いなく森の中で迷っているだろう。サキと会うまでは確かに居たんだけど。

「私を見てすぐ逃げたアレならの森の中に行っちゃた、なの。知り合いなの？」

「知らない人です」

見捨てよう。暫く反省でもしていろ。

＊　＊　＊

案内されて辿り着いたレンガ造りの館は、思った以上に立派なものだった。木々に紛れる為か1階のみの造りかと思ったら、どうやら地下に伸びているらしい。それを考えると少なくとも数十人は暮らせるほどの部屋数がありそうだ。扉を抜けると目に入った内装は、派手ではないが落ち着いた色合いでデザインされていて、居心地の良さそうな雰囲気だった。ここで休めるのなら悪くない。

「あー、何だかとんでもなく疲れた。」

ここで一通りくつろいでゆっくり休んでから、今頃泣いて反省しているリアを回収してやろう――と思っていたのだが。

「もう、遅かったですねレオンさん」

案内されたティールームに、茶菓子を幸せそうに頬張る未知の生物がいた。何故だ。何故貴様がここに居る！？

『ふん、随分と苦戦したようだな』

隣には同じように茶を啜るエク公が居た。ホントにお茶飲んでやがる。リアの茶飲み友達だという告白は嘘じゃなかったようだ。大ピンチだった俺が捨て置かれたのはひょっとしなくてもお前の差し金か。

「ほっほ、ようこそ。お仲間の方も到着したみたいじゃな」

エク公に文句の一つや二つを叩きつけていると、笑みの形に皺を刻んだ男がやってきた。

一目で直感する。きっとこの男がラインハルトだ。

「主様、ただいまなの」

俺を席に案内したサキが男の傍へ向かう。

短く何かを報告したサキは頭をぽんぽんと撫でられて、嬉しそうに目を細めていた。その様子はとても俺を怖い目に遭わせた人物とは思えない。まるで飼い主に甘える子犬みたいだ。外見はどちらかと言えばネコっぽいんだけど。

「サキも座りなさい。……さて、改めて自己紹介をさせてもらおうかの」

予想通りの名を告げた男に続いて、俺達も簡単に名乗る。

一通り挨拶が済んだところで、どうしてリアがこんな所に居たのかを聞いてみた。

「気絶した私達の部下をここまで運んでくださったんじゃよ。」

リアは俺と離れてそんな事をしていたらしい。近衛兵を気絶させたのは俺達なのだがそこは黙っておこう。リアに対し「ありがとう」と人懐っこい笑みを浮かべる男の見た目は初老に入ったくらいだが、その雰囲気には同年代と話す気安さがあった。

隣に視線を向ける。静かに茶を啜るサキは”ヨーカン”という甘菓子を幸せそうにつついていた。女の子って皆甘いものに目が無いんだろうか。糸の先に括りつけたら釣れるかもしれん。

「それにしても、あやつらまさか森を燃やしにかかって来るとは。ちとゆっくり構えすぎたようじゃはっはっは」

かんらかんらという表現がとても似合う笑い声とその表情からは、追われている者の恐怖が全く読み取れなかった。リアが綺麗にした皿の上にフォークをそっと置く。紅茶の香りを楽しむようにゆっく

りと一口。

「おじ……ラインハルト卿はもう随分とここに居らっしゃるのですか」

「ふふ、無理にそう呼ばなくとも良い。おじいさんなり、好きに呼んでくれて結構じゃ」

顔を赤くしたリアが恐縮するのを見て何故かこっちまで恥ずかしくなる。それにしてもずいぶん出来た人のようだ。

「この森に来てから今日でもう一月近くになるかの。あんな国でもワシの愛する国でな。簡単には見捨てられんのじゃよ」

「どうしてこんな事をなさっているのですか？　ラインハルトといえばこの辺りでは知らぬ者は居ない程の名士であり、代々王に仕えていると聞いていますが……」

「一言で言えば退屈しのぎの相手かの」

意味をうまく読み取れない。リアも同様らしく困惑の顔で一口紅茶を含んだ。いつしか空になった俺のカップを見てじいさんがおかわりを勧める。目を離していた隙に侍女のような格好になっていたサキがテキパキとお代わりの準備を進める中で聞いた話は、数分程で話し終える簡単なものだった。

＊　＊　＊

その王は、平和でつまらない世の中が退屈だったらしい。嘗ては魔王を相手に戦った勇敢な国だったが、魔王が消えて久しい現世では自分達が戦う相手が居ない。強力な手駒を持て余す事に耐えられなかったというのだ。

「なんか子供っぽいなそいつ」

思ったことを素直に言うと、じいさんは怒るどころか苦々しい顔で笑った。

「その通り、私も言ってやったよ。もっとも穏便になるよう言い方には気をつけたがね。返ってきた言葉は『無礼者』じゃったよ」

ますます子供だ。良くそんな王の居る国が繁栄を続けられたな、と思う。

「最近即位したてのほやほやじゃからの。王様であることにはしゃいでおるのかもしれん。なんせ12歳じゃから」

ホントに子供じゃないか、そんなのがトップなのかあの国は。どうりであの兵士も品が無いと思った。

じいさんが言うには、ジャイノスという男が王に近づきだした辺りから、王の考えが変わっていったらしい。

「好戦的な意見ばかりを取り入れだした王に、厳しいお灸をすえた

かったのじゃが……何度意見を申しても無視されるばかりか、とうとうわしを含めた明確な反対派は反逆者扱いになってしもうたのじゃよ。はっはっは。」

これっぽっちも気落ちしていない風に笑っているその様を見ていると、何となくこっちの方が王様っぽい気がする。風格ってやつだろうか？　視線をサキに向けると、彼女はそんな主を見て誇らしげに微笑んでいた。

「それで、この森に？」

彼らは逃げられないのではなく、逃げなかったらしい。そもそもこの森に結界を張った理由は追っ手を呼び寄せることにあったのだという。捕らえた追っ手は殺してしまうのではなく、わざと情報を与えて逃がしていた。そんなことを意図的にしていると思わせないように軽い記憶操作をしているらしいが。

「どうしてそんなことを？」

「退屈しのぎに付き合うためじゃよ」

暇になったからと兵を動かすような王だ。周りに進言されて隣国へ攻め込むといった一大事を引き起こしかねない。その目をこちらに引き付けておく為にこうして篭城めいたことをしていたらしい。アピールの為に、進入してきた相手に宣戦布告めいた書簡を渡した事もあったのだとか。思い切ったことをするじいさんだ。

「じゃが、やはりたかだか数十人では限界というものがある」

もともとこの森には５０人の私兵がいたのだという。それが今は

たった6人＋サキだけになってしまった。選りすぐりの兵といえど限界などとっくに来ていたのだ。そこにきて今回のように森を燃やされてしまえば、隠れるところそのものが無くなってしまう。地の利を生かして戦力差を埋めてきたこれまでのように行かなくなれば、あっというまに勝負は決着するだろう。

ほんの少しだけ、初老の男の顔が悲しそうに歪む。しかし一瞬のこと、すぐに彼は笑った。それが義務であるかのように笑顔を最後まで崩さなかった。

「わかりました！」

短絡思考が大真面目に手を上げる。

根拠は無い。しかし、何故か厄介なことになる予感がした。『私がその困った王様にお灸をすえちゃいますから！　大丈夫です。ノープロですっ』なんて言い出すかも、とかそんな予感。

やめてほしい。

そういえば何故こんな立ち入った話をしているんだ俺達。

「おいリア、発言は良く考えてから」

「わたしたちがその困った王様にお灸をすえちゃいますから！　大丈夫です。ノープロですっ」

「って俺もかよ！　何でだよ！」

そんな俺の心の叫びは当然のように無視された。

6.「知らない人です」（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。

あらすじにも追記したのですが、物語の進行上どうしてもシリアスっぽくなる話が出てきます。もう少し先の話なのですが、そういった話が苦手な方はご注意ください。

※お気に入り登録をしていただいた方がいるみたいでびっくりしました。ありがとうございます。この先面白くなるのかちょっと自信ないですが、話の区切りが付くまでは今のペースで投稿したいと思います。

7.「こんな所で何やってんだよお前ら……」

全くもって不本意なのだが、俺は結局「一度王様を見てみましょう」と主張して止まない勇者を止められずにハイグレイ王国に連行されていた。俺とリア、そしてサキが加わって3人となった俺達は、美味しそうな匂いを漂わせている出店でちょっと買い物をしている所だ。

「んまい」

いま俺が食べている、トロトロになるまで煮込まれた肉や野菜を穀物の生地で包んだ食べ物は”ピロタン”という。この国の名物らしいのだが結構おいしい。他にも色々魅惑的な匂いをさせている屋台が多いので、いつか全部制覇してやろうと思っている。

王様見学に来ている俺達だがこんな楽しみでもないとやってられない。どうして俺まで実行犯に選ばれたのか未だに納得出来ないし。というかおかしいだろ。

「リアっち。アイスクリームお待たせ、なの」

「わっ、すごく長いです」

クリームだけで３０センチはあるアイスを片手にうっとりする勇者は、いつの間にか随分サキと仲良くなっている。別にいいんだけどさ。

「おいしいですっ」

「なの」

お前らどんだけ甘いもの好きなんだよ。

「レオンさんも良かったらどうですか？　とっても美味しいですよ」

「子供じゃあるまいし、大人はそんなもの喜んで食わねーよ」

「レオンも私達とそんなに年齢違わないと思うの」

１０００年単位で俺のほうが年上だっての。人間換算なら近いかもしれないけど。

＊　＊　＊

これじゃまるで子守じゃねーか。

きゃいきゃい騒ぐ黒っぽいのと赤っぽいのを他人行儀に眺めながら、俺は改めて街をぐるっと見渡した。この国も一見すると平和だ。人通りが多く市場は活気付いているし、とてもこれから争いの火種になろうとする国には思えなかった。

サキから聞いた話だとこの国の人口は1万人ほど。かつては魔物討伐の拠点として多くの冒険者、傭兵が集まる大きなギルド（組合）も存在していたらしいが、魔物の脅威がほぼ去った今は既に解散した後だという。少し興味があったのでギルド跡地に行ってみたのだ

が、今は武器・防具を扱う店に変わっていた。他よりも一際大きなレンガ造りの建物の内部は、この国の工匠が持ち寄った作品で溢れていた。

「……持ち運ぶのが面倒なんだよな。」

いつまでも武器のひとつも持たないでいると、この間みたいな情けない目に遭うかもしれないのだが……どうも惹かれる品物が見当たらない。俺は両親の良くわからない教育方針によって武器防具の類を持つことを禁じられたまま育ったので、下手に武器に頼ると余計に弱くなるかもしれないし。

何の付加効果もない装飾品を楽しそうに見て回っている2人を放置して店の外に出た俺は、他の面白そうなものを求めて回る事にした。

「……お？」

何気なく覗き込んだ路地の先にも、レンガ造りの建物が林のように立ち並んでいる。だがどこか感じる気配が違っていた。一本道を逸れただけの空間には、同じ街とは思えない湿った空気が流れていた。

どうせリア達は暫く店を見て回ると言っていたし、サキがいれば迷子にもならないだろう。どこか懐かしい雰囲気に惹かれた俺は、そちらの方へと足を向けてみた。

＊　＊　＊

染みが奇妙な模様を描く木の戸を押す。油の切れた甲高い、しかし懐かしい響きが俺を迎えてくれた。その場にいる４割が燻らせている煙草と７割が遠慮なく出す罵声に似た大声、そして全員が手にする様々な酒の香りが力の限り大人の遊び場を主張している。１００年経とうがこういう場所は変わらない。お子様なあいつ等と違う、大人な闇の帝王には相応しい世界だ。

まずは酒でも飲もうかな。酒は良いよね、嫌なことを忘れさせてくれる。

カウンターに座り指を立てる。言葉無く俺の手に収まったのは黄金色をしたキツイやつだった。無言の勧めに応じて一気にあおる。

喉を通るなんともいえない熱さ。呼吸するだけで噎せ返るような、

「げほっ。」

これ、が俺、の悩みを、ゴホッ　忘れ、させて　ゴホッ　くれる。

「お客さん、無理すんなよ」

何コレ強すぎだよ。

どんな代物かと思ってボトルを見たら骸骨マークが付いていた。殺す気か。

「じゃあタバコでも喫(の)むかい？　お客さん」

「……ああ、それじゃ貰おうかな」

タバコは良い。肺に溜めた煙をゆっくりと吐けば胸の内につかえたモノまで吐き出させてくれる。そう、いらぬことに悩ませられている俺にはタバコこそ必要だ。マスターに合図すると差し出した指に葉巻を挿してくれた。渋い音をさせてマスターの手が石を擦る。果物の香りがする洒落たその煙を肺一杯に吸い込んでケホッ、ケホケホゲホッ。

「お客さん、コレ飲みな」

「げほっ、ああ、ありがとう。」

強面からは全く想像できないマスターの細やかな心配りにちょっと感動する。やっぱり俺にお似合いなのは手の中のホットミルク――

「じゃねえよ！　誰がミルクの似合うお子様だよ！」

「はっはっは、そう怒るなよ。イイ男が台無しじゃないか」

そんな平べったい声で言われてもちっとも嬉しくない。やや乱暴に飲み干した俺が次はどこへ行こうかと考えていたら、マスターがまた俺に話しかけてきた。

「お客さん、オトナなら向こうでひと勝負してきたらどうだい？」

「勝負？」

「良い暇つぶしになると思うぜ。帰りにどうなってるかは保障できないけどな」

マスターに礼を告げて奥のテーブルに向かうと、刺す様な緊張感がまた一段と強くなった。無言でカードを切るディーラーと時折巻き起こる歓声と悲鳴。一瞬にして一月の稼ぎが消えたかと思えば一年分の稼ぎが舞い込んでくるここは、時の流れすら歪んでいるようだった。

「ちょっと遊んでやるか」

不敵な笑みを浮かべて席に付いた俺の目の前で、ディーラーが恭しく頭を下げた。

ブラックジャックは1から11まであるカードの数を足して21に近い方が勝ちというシンプルなゲームだ。ディーラーと一対一で勝負し、勝てば掛け金に応じてチップが支払われる。

最も強いのは21なのだが、22以上になってしまうと”バースト”となって無条件で負けになってしまう。また、同じ21でもエースと10を組み合わせた”ブラックジャック”が成立した場合はそちらが優先される。単純だけど結構奥深いゲームだ。

手持ちのチップは500。どんと10倍、いや100倍にしてやろう。愚民どもよ、魔王の実力に恐れ平伏すが良いわ。わはははは。

「残念、バーストですねお客様」

えっ。

けしからんディーラーを睨むが涼しい顔で受け流された。……まあいい、初戦はツイてなかったが慌てる必要は無いさ。たった１００枚チップを巻き上げたからってイイ気になってんじゃねーぞちくしょう。

「１８だ！」

「１９です」

「どうだ、２０だ！」

「残念、わたくしは２１です」

「なん、だと……」

無常な宣告と共に没収されてゆくチップの山。くそ、流れが悪いのかちっとも勝てない。これではただのカモだ。残り２００枚のチップを見ながら続行するか暫し迷う。

だがこんな事で逃げ出したらそれこそ笑いものだ。絶対に勝ってやる、ぎゃふんと言わせてやるっ。

「掛け金は２００だ」

ディーラーの眉が小さく動く。完全なポーカーフェイスの相手が初めて見せた小さな表情だった。

「どうぞ。」

伏せて配られたカードはハートの６とスペードの８。合計１４しかないので俺は迷わず３枚目を要求した。

「……む」

新たなカードはクラブの３だったのでこれで計１７だ。２１を超えたらバーストになり無条件で負けになってしまうこのゲームでは、とにかくバーストこそ警戒しなくてはならない。ディーラーと１対１の勝負なのだ。相手がバーストしていれば例え１７でも勝てる。

しかしディーラーのアップカードはキング。そしてそのままスタンドしているということは、最低でも１７ということ。自信ありげに俺を見下ろす目からして、きっとそれ以上の手が入っている。

もう一枚引くしかない。このムッツリは間違いなく余裕の面だ。ディーラーに指を掻き込むような動作を見せて、次のカードを要求した。

ちょっとどきどきする。さて、勝負――

引いたのは、ハートのエース。

「……また微妙なの引いたよ」

エースは１か１１として扱える。１１だとバーストなのでこの場合無条件で１となり合計１８だ。どうしよう、後一枚引くとなれば候補は１～３までしか無いのでバースト率はかなり高い。でも、

「もう一枚だ」

俺の勘が叫んでいる。ディーラーは絶対に18以上の手で待っている、行け！　と。

勝負だ。手の内に滑り込んできたカードに手を置き目を瞑った。

深呼吸。

もう一回深呼吸。緊張感に滲む汗すら心地良い。神よ、俺に祝福を！

音を立ててめくった最後のカードは。

ダイヤの3。

震えた。21だ。今俺は大人の階段を一歩昇った気さえする。勝ち誇った顔で残る4枚を叩きつけてやった。さあチップを寄越すがいい！

「21だ！」

「ブラックジャックです」

うん、あれだ。良く考えたら祈る相手を間違えた。

＊　＊　＊

がっくりと肩を落とす俺の背後でにわかに歓声が巻き起こった。どうやら大勝ちしているヤツがいるらしく、青くなったディーラーがダラダラ流れる汗を拭っている。それを見つめる背中は二つ。小柄ながら自身に満ち溢れた指裁きでチップを積み上げてゆく様は、まさしく勝負師の姿だった。

あれだよ。あんなふうにカッコよくこの世界を渡り歩きたかったんだ。

「見学しようっと」

軽めのドリンクを頼んでから近づいてみると、やっぱりかなり小柄な二人組みだった。肩までの艶のある黒髪と赤く長い髪を尻尾のように縛って流した女二人。傍らには不釣合いなほどの剣が主を見守っていた。

ゲームはポーカーだった。二人の対面に座る客との勝負らしい。

対戦相手はかなり負けが込んでいる様子。その表情は険しく、スキンヘッドに走る青筋がぴくぴく動いてこれでもかと威嚇する。しかし手前の二人組は全然気にしていない。二人で仲良く

「これいらない、なの」

「そうですね、じゃあこれ切っちゃいましょう」

とかのたまって手札を切った。

……。

……落ち着こう。冷静になれ。Ｂｅ　ｃｏｏｌだ。

そんなワケない。アイツらはまだまだこんな世界とは無縁なお子様なのだ。そもそも、やつらは幸せそうに馬鹿でかいアイスクリームを頬張っていたではないか。そんなあいつ等がこんなところに出没するハズが無いっていうか絶対に門前払い食らうだろ。年齢制限とかそれ以前に見た目で。

そうか、世の中には同じ様なヤツが3人は居るという。そうに違いない、きっと名前は全然違

「リアっちまた勝った、なの」

「サキちゃんのおかげですっ」

……。どうやら間違いないらしい。

「あ、レオンさん！」

「やっほー、なの」

「こんな所で何やってんだよお前ら……」

俺の姿を見てぱっと嬉しそうな顔をしたリアは、何故かサキと二人で座っていた長椅子の真ん中に座るようお願いしてきた。そして何やらこそこそと耳打ちされる。

「実は私たち、レオンさんの妹だと説明してここに入れてもらったんです。ですから、少しの間だけ話を合わせてもらえませんか？」

「お願いおにいちゃん、なの」

全然似てないだろ俺達。

呆気に取られた俺を見て了承したと勘違いしたのか、二人はじゃれ付くように腕を絡めてきた。途端に射抜くような視線があらゆる方向から突き刺さる。……え、なんで？

「ニイチャン、両手に花なんて羨ましいねえ？　ハッハッハッ」

ちっとも笑っていない声で睨んでくる野次馬の男。良く見ると周りのギャラリーのうち殆どの男が似たような視線を送ってくれていた。

「きゃっ、お兄ちゃん怖いですっ」

「なのっ」

お前らそんなキャラじゃなかっただろ！？

ぎゅっと腕を抱きしめられて、小さな膨らみが両側から押し付けられる。周りからの視線がさらに倍ほど厳しくなったせいで非常に居心地が悪い。

テーブルを見ると、二人が飲んだと思われる果実酒のコップが半分ほど残っていた。ひょっとして二人とも酔っ払っているのかもしれない。たったコップ半分なのに。

「オイオイお前ら！　いつまで対戦相手を放置してイチャイチャしてやがるんだ！！！」

「きゃー」

「きゃー、なのっ」

もう止めてくれ。そのうち呪い殺されそうな視線になってきた。

＊　＊　＊

ようやく勝負が再開し、俺達の前にカードが5枚配られる。……信じられないが、二人の前には大量のチップがうず高く積まれていた。それに引き換え相手側には申し訳程度の小山。大勢は明らかだった。

「ツーペアだ」

「スリーカードですっ」

勝った。

「スリーカードだ！」

「フラッシュなの」

勝った。

「どうだ！フルハウスだ！」

「フォーカードですっ」

また勝った。

なんなんだこの鬼のようなツキは。

「ぐ、ぬぬぬぬぬぬぬうう」

もはや相手は真っ赤を通り越して浅黒い。気のせいかどこかで見たことのある強面と相俟ってかなりの迫力、どうりでディーラーまで青くなる訳だ。

しかしそんな威嚇もこの二人には全く通用していない。なんせ相手を見てもいない。二人で仲良く談笑しながらデタラメにカードを捨てている。どれくらいデタラメかというと、まず”５５７７７”と配られたカードから5を一枚だけ捨ててしまう。そして7をもう1枚引いてくるのだ。

これはさっきフォーカードでフルハウスに勝った時の手札だ。相手の手札は”ＡＡＫＫＫ”のフルハウスだったので確かにあのまま”５５７７７”で勝負すれば負けていた。だが相手の手札が見えて

いない状況で、フルハウスを崩す気になど誰がなるか。こいつらどんな思考回路しているんだよ。

普通じゃないってのは薄々気がついていたけどさ。

「クソッタレ！　次だ次だ！」

強面の怒鳴り声のせいで更に青くなってゆくディーラーから新たに配られたカードは、スペードの１２とハートの３４５。強運は未だ継続中らしく、最初からストレートが成立していた。

「どれを交換しましょうか」

おいおいおい。

「この３ついらない、なの」

しれっとノータイムで捨てられるハートの３４５。

おいおいおいおいおいこら。

シュッ

……ん？

微かな気配を感じて対戦相手へ目をやると、なにやらくねくねと

不穏な動きをしている。非常に気味が悪い姿だ。

「……。」

男はくっくっく、と悪い笑みを浮かべてカードを凝視している。ついでに言えば、その直前にディーラーから何かが渡った所もばっちり目撃してしまった。平たく言えばイカサマだ。よほど良い手札を仕込んだのか男は歯をむき出して笑いを浮かべながら有り金全部を積み上げていく。

「……おにいちゃん？　どうした、なの？」

まだそれ続いてるのな。

怪訝な顔の俺を見てサキが首を傾げていた。……こんな勝負で負けるのも馬鹿らしいし、教えておいてやろう。

「あいつがイカサマを仕込んだのを見たんだよ。悪いことは言わないからここは降りておけ」

「ヤなの」

即答だった。

「勝負で逃げるのは私の一番嫌いなこと、なの」

サキの赤い瞳が好戦的に光る。ちょっと待て、と止めようとしたけど遅かった。

「勝負なの」

「バカが、食らいやがれ！　キングのフォーカードだ！」

おおお、と沸くギャラリーと勝利を確信して大笑いするスキンヘッド。面白くない光景だがさすがにこれに勝つのは無理だろう。引き際を知らぬとは所詮お子様はこの程度だったか、と思ってたのに。

「ふっ、なの」

ぱたりと倒したその手札は、スペードの１２３４５。

勝っちゃったよ。

泡を吹いてひっくり返ったディーラーと赤を通り越して白くなったスキンヘッド。もう終わりと見たのか颯爽と席を立つ２人組み。

すっかり氷が溶けて不味くなったカクテルを飲んで思う。

これは多分悪い夢だ。

7.「こんな所で何やってんだよお前ら……」（後書き）

今回も読んでくださってありがとうございます。

※お酒とタバコは二十歳を過ぎてから、でお願いします。（念のため）

8.「もうバレてる、なの」

あのバーに随分長居をしていたらしく、空気の篭った部屋から外に出るとすっかり陽が落ちていた。

「また甘いもの食べましょうね、サキちゃん」

「なの」

俺の後ろでは不良勇者とその仲間が稼ぎの山分けに興じている。元手に幾ら使ったか知らないが、アイスクリームなら気絶するくらい食べてもまだまだ余りそうだ。

「そろそろ飯にしないか？」

時刻は夕食の時間に差し掛かっている。辺りの食事処からは競い合うように魅惑的な匂いが撒き散らされていて、肉や魚が焼ける良い匂いや音はどれも旨そうだ。どこの店に入るか迷ったが、結局はサキお気に入りの店に突撃する事になった。

「ここの店は色々な食べ物が揃ってる、なの」

案内されたのは明々とした松明が外観を照らす華やかな雰囲気の店だった。流石に地元住民は良い店を知っているらしく既に結構な数の客が並んでいる。数分ほど待たされた俺達は店員の案内で奥のテーブル席へと案内された。

「美味いな」

「おいしいですっ」

「口に合って良かった、なの」

俺は米と色々な具材を豪快に炒めた鉄鍋料理を頼んでみたのだが、食べてみると色んな味が混ざって面白い。明日もここに来ようかな。

……ああ、忘れてた。そういえば明日の予定について話し合うんだっけ。

「明日王様に会う予定だったよな」

「そうなの。明日は謁見の日、なの」

こくりと頷いたサキは”サシミ”という生魚を美味そうに食べている。余計な心配だろうけど腹を壊さないのだろうか。

「でもそう簡単に会えるのかな。謁見は飛び入りの申請が通りにくいですし」

幸せそうにパスタを口に運んでいたリアが額にソースをつけながら割り込んできた。見た目はふざけているが言っていることは正しい。珍しく。

「最近は誰も会いたがらないから、すぐ会えそうなの」

どうやら相当人気が無いらしい。

それも当然かもしれない。さっきのバーのマスターにもちょこっと話を聞かせてもらっていたのだが、兵隊にずいぶん甘く好き勝手を許しているらしい。実際乱暴な兵士による厄介事があのバーでもよく有るそうだ。反面国民には厳しいらしく、突然税を重くして全て軍備に回すなんて暴挙も有ったらしい。

「やっぱり大分嫌われているみたいだな」

「みんなジャイノスのせい、なの」

黒幕、ねえ。そいつには会えるのか？

「あいつ王に四六時中くっついているの。金魚のフン、なの」

顔でも思い出したのかサキの箸運びが乱暴になっている。主を脅かす敵だからか、ジャイノスってヤツが相当嫌いなようだ。

「まあ落ち着け。ところでその謁見にお前が出席しても大丈夫なのか？」

ほら、お前じいさんの側近だし顔割れてるだろう。城に入った途端襲われそうじゃん俺達まで、と主に自分を心配して言ってみる。

「そうなると、俺達だけで行ってくるってのが妥当だよな。気が乗らないけど」

「その心配は無いの」

なんで？　と首を傾げる俺が食べていたチャーハンに変な影が映った。何この丸い影。

「もうバレてる、なの」

「よぉう。ガキ共」

「あ」

俺の後ろでスキンヘッドが笑っていた。もうあれっきりの人だと思ったのに結構しつこい。さっきポーカーでコテンパンにされたのにまだ懲りないみたいだ、というか相当怒っている模様。

「これはひょっとしなくても面倒事になるのでは」

「いまさら、なの」

「すみませ～ん、食後のデザートお願いしますっ」

一人だけ無関係ぶっているヤツがいるぞ、こら。

＊　＊　＊

結論から言うと、サキがあいつを蹴散らした。

大体相手も悪い。チビだのガキだのさんざん叫びまわった挙句こっちに問答無用で殴りかかってきたのだ。かなり酔っ払っていたが、そんな事は沙汰に手心を加える理由には少しもならなかったようだ。

スイッチは、じいさんを侮辱するような言葉を大声で叫んだ事だろう。

『もういちど言ってみろ、なの』

凶悪な視線が男を射抜き店内が音を無くした。それでも意地だけでサキに突っかかったのは賞賛に値するかもしれない。俺なら逃げる。

連中自慢の鎧もサキの刀の前には紙同然だった。しつこく絡む男に何気なく振り下ろされた一閃は、あろうことか鎧だけを両断して見せたのだ。いや、殺(や)っちゃったと思ったのは俺だけではない筈だ。何度思い出しても男が二つに分かれていないのが不思議だった。

何より恐怖したのは体験した本人だろう。真っ青だった顔を憤怒の形相に変えて

『貴様ら絶対に覚えてろよ！』

という教科書どおりの捨て台詞と共に退散したあいつは、また登場する気だろうか。出来るだけ面倒なことにはしたくないんだけど……あまり深く悩んでも仕方がないか。

「ごちそうさまです。美味しかったですっ」

手を合わせて行儀よく食後の挨拶をするコレは、ちっとも気にしていないようだし。

＊　＊　＊

ほぼ同時刻。ここはハイグレイ王城、王の間。

「ふん」

おもしろくないという心境を全身で表すように、少年がただっ広い王の間でふんぞり返っていた。この国では誰よりも上に立つ人物である彼は、小さな頭に大きすぎる王冠を載せて大層ご立腹の様子だった。

またラインハルト卿の始末に失敗したのだ。

宣戦布告の書を寄越された時、王はこれを自分に対する挑戦だと受け取った。指揮を一手に引き受け、自分の優秀さを知らしめる良い機会だとこの一月の間追っ手を差し向け続けた。

しかし一向に成果が得られない。今日も役に立たない兵士長から言い訳ばかりの報告を聞かされるのだろう。

「も、申し訳ありませんっ！」

ごちん、と王剣の鞘で叩かれた男が鼻を押さえてうずくまる。最近王は会話開始後の数言で結果が判るようになってきているらしい。

もうすぐ聞く前に結果が解かるようになるかもしれない。

「こんの役立たず！　ばか！　お前なんてどっかいっちゃえっ！」

「しっ、失礼します！」

兵士長に格上げされたばかりだったこの男は、今回の失敗で雑用まで一気に降格することが決定している。背後から同情の視線を送っていた文官を押しのけるようにして転がり出て行った。

「どいつもこいつも、ボクの作戦をちっとも成功させない！」

誰も声を掛けられない程怒りを顕にするその様はただの駄々っ子にしか見えない。下手に機嫌を損ねれば待つのは暗い未来しかなく、家臣達は一様にこの王を恐れていた。ただ一人の男を除いて。

「ゲッゲッ、お静まりください、グレイス王」

両生類が声を持てばこんな感じになるのだろうか。まるで蛙がゲコゲコ鳴いているような人間離れした音が、王を振り向かせた。

「ジャイノスか。うん、少し取り乱してしまったな」

誰も手に負えない王を一言で鎮めてみせた男の名はジャイノス。現在の王の右腕を勤めており、執政全ての事実上の支配者だ。彼のことを、周囲の人間は揶揄と畏怖の念を込めて”ドールマスター”と呼ぶ。

というのも、何故か王はこの男に対してだけ耳を傾けるからだ。

他の者は首を捻るしかない。ガラスを金属片で引っかく音くらいに酷い声が王には心地よく聞こえるらしいのだが、周りの家臣達には全く理解出来ない。

そんな声を笑顔で受け止めた幼い王は、ジャイノスに先を促した。

「ゲ。実は王が懸念されている問題について報告がありました。ラインハルトを守護しているサキが、現在この王国内に潜入しているらしい、と」

「それは本当か！」

サキの名に王が色めき立ち、周りの人間も互いに顔を合わせる。

彼女を知らぬ者はこの場に居ない。かつての王の右腕ラインハルトの下に舞い降りた、”紅き守護天使”と称えられる少女剣士だ。失脚したラインハルトに今なお忠誠を誓う彼女は、彼を守る最大の壁として立ち塞がっている。煮え湯を飲まされた回数はもう小さな両手でも追いつかないほどだった。

「それで、サキは今何処に？」

興奮気味にまくし立てる王を片手で制す。腰を下ろすのを待って、ジャイノスは玉座の間全体に響くように迷惑な声を張り上げた。

「ゲッゲッ、申し訳ございません。それは現在調査中でして、具体的な場所は申し上げられません。が、この状況を見逃す手はありません。守護の居ない今こそ絶好のタイミングと存じます。ここで一気にラインハルトに引導を渡すことを、強く進言いたします」

王側近の一人が隣と目配せした。相手も困惑の顔だった。

ここに居る誰もがラインハルトという男の重要さを知っている。

彼を殺してしまう事は、国の首を絞めることになりかねない。

不幸な事故で両親を亡くして半年余り。落ち込む幼き王に対し厳しくも真摯に仕えてきたラインハルト卿が反逆者として追放された時は、誰もが驚いた。王にどんな心変わりがあったのか、誰もその真相を知らない。ラインハルトの後釜となったジャイノスが怪しいと呟く者も居る。

だが誰も何も言わない。言えないのだ。ジャイノスの発言中に口を挟む事は、暗黙のうちにタブーになっていた。禁を破った数人が既に処刑されている今、とても迂闊なことは言えない。

皆が同じ事を考えていたのだろう、誰も声を発しない。

「そうか、わかった」

本当に内容を理解しているのかと疑いたくなる程王はあっさりと了解する。満足そうに礼をしたジャイノスは「ゲッゲッ」と低く笑った。

夜の闇が深くなってゆく。耳障りな哄笑だけが、我が物顔で飛び回っていた。

9.「言ってる場合か！」

「なあ」

「どうしましたか？　レオンさん」

「お前はこういう事態を予測しなかったか？」

「あ、はは。ちょっとだけ思いました」

視線を泳がせるリアに同調するように、諦めの吐息をひとつ。

「リアっちに同じ、なの」

しれっとそんな答えを返すサキの額には、ベシッと裁きの拳をぶつけた。

「お前、とんでもない有名人らしいな」

”紅き守護天使”とかいう大層な二つ名持ちのそいつが、惚けた顔で反論する。

「向こうが勝手にそう呼んでいるだけなの。私はそんなこと知らない、なの」

お前が知らなくたって向こうにはお前のファンが沢山居るんだよ。タダでさえ目立つ赤い髪を堂々と晒しているのに、お前自身がそんな有名人じゃ敵に発見してくれって言ってる様な物だろうが。

昨日は堂々と街中を歩いていたのに騒ぎが起きなかったので大丈夫だと思っていたんだが、サキのファンは兵士に限って圧倒的に多く存在していたらしい。今朝になって王に会うためノコノコと城に出向いた俺達は、次の瞬間には一斉に追われる身になっていた。

薄い壁を挟んだすぐ向こう側でまた罵声が通り過ぎていく。午前中に宿を出た俺達の頭上には既に太陽が昇りつめていた。

数に頼ったしらみつぶしの捜索は確実にその範囲を広げ、このままチンタラしていたら見つかるのは時間の問題だった。ただの様子見のつもりが見事に騒動の中心に巻き込まれた格好になっている。

まあそもそも計画がいい加減すぎるんだけど。

「大体、何なんだそのふざけた変装は！？」

今に至る要因の１０割を占めるそれを詰問するが、本人にはちっとも反省の色が見えない。

「変装だなんてコソコソした作戦は性に会わない、なの」

髪の縛りを少し変えて帽子を深く被っただけの変装に飽きが来たのか、サキは帽子すらポイと投げ捨ててしまった。

「そもそも、もうバレてるって昨日言った筈なの」

「今朝ノープロノープロ言っていたヤツは誰だ！」

「はいっ」

……そうか、お前だったな。

「一応聞くが、その根拠は？」

「皆私たちを探していて、今のお城にはもう殆ど兵士さんは居ないはずです。今が王様とよく話し合えるチャンスだと思います。」

「……なるほど？」

ホントにこいつは頭が良いのか悪いのか良く解からないが、確かに言われてみればその通り。

「でもどうやってそこまで行くんだよ？　一歩でも外に出たら即見つかるぞ？」

「私に任せてくださいっ」

リアが自信ありげに俺達の腕を取ると、何やら詠唱を始めた。俺とは書式が異なる印を結んだ途端に光が溢れ思わず目を窄ませる。

こいつこんな事もできたんだっけ、と思う間に転移術が発動。気付けば俺達は王城の屋上に立っていた。

＊　＊　＊

代々受け継がれた武人の魂のような無骨な造りは、城というより砦を思い起こさせる。余計な装飾がなく機能だけを求めた造りは王の志向なのだろうか。１２歳にしては渋すぎるから先代の趣味かも

しれない。

騒がしさから一転した音の無い世界。静寂が支配するここハイグレイ王城は、確かにリアの言う通り兵士達の気配が希薄だった。

「ふっ、作戦通りなの」

しれっと嘘つくんじゃないよ。どう考えたってお前何も考えていなかっただろ。

「バカなこと言うヒマがあるならさっさと用件を済ませようぜ」

今回の目的は王様と一度話をするって事だよな？　さっきの騒ぎで俺とリアまでサキの仲間だって知られた以上、今更簡単に事が運ぶとは思えないんだけど。

「あはは、なんとかなりますよ。」

「なの。レオっちは心配しすぎ、なの」

その根拠をぜひ聞かせてもらいたい。こら二人とも、目を逸らすんじゃない。

「あの王様って、お前から見てどんなヤツなんだ？　確かグレイス四世って名前だよな」

昨日聞いた話ではまだ１２歳の子供で、ジャイノスってヤツに唆されて色々問題起こしそうなんだっけ。これだけ聞くと、その子供はとても素直にお喋りに応じてくれそうにないんだけど。

「半年前に前王様が亡くなる前までは、主様が教育係みたいになっていた、なの。」

じいさんの護衛として常に傍に控えていたサキも、グレイスを良く知っている。我侭を言うことも確かにあったけれど、グレイスが最も信頼していたのはじいさんだったという。

「ジャイノスが来てから王は変わっちゃった、なの。」

やっぱりジャイノスか。昨日も言っていたけどサキはジャイノスを何とかすれば解決すると思っているらしい。俺達の中で唯一事情を知るサキの意見だから、多分正しいのだろうけれど。

「王様とちゃんとお話をする為には、その人をどうにかして王様から離す必要がありそうですね」

そうだよな。ってコトは、それなりに面倒なコトになりそうだよな、やっぱり。

＊　＊　＊

屋上での会議に区切りが付いたところで、俺達はいよいよ本格的に探索を開始した。城の内部構造を知るサキが先頭に立ち、俺とリアはその小さな背中についてゆく。

「やっぱり、レオンさんが言った通りになりそうですね」

気配を殺して進む最中、何故か上機嫌なリアが俺にキラキラとし

た目を向けてきた。

「何が？」

「ほら、レオンさんが仰っていたじゃないですか。争いの影にはきっと、悪いことを企んでいる誰かが存在するって」

あー、ちょっと前にそんな戯言を言ったような気がする。

「？　何の話、なの？」

ひそひそ話す俺のそばにサキが寄ってきた。どんな説明をすれば良いのか考えるのが面倒なので、適当に誤魔化すことにしよう。

「えっとですね、レオンさんは魔お」

しれっと妙なことを口走りそうになったリアの口を問答無用で塞いだ。

「むぐ？」

ちょっとこっちにおいで。とリアの首根っこを掴んでサキから距離をとる。

「今何を説明しようとしましたか貴女」

「あ、あの。レオンさんそんな、恥ずかしいですっ」

何を言っているんだリア。お前が今何を想像したか知らないけど絶対それ違うよ。

「別に俺達が何者なのかなんて情報、今説明する必要ないよな？」

勇者であることを隠す必要は無いかもしれないが、俺は違う。この世界で魔王だとバレて得したことなんぞ一つも無かった。というか俺はそのせいで約１０００年程酷い目に遭ったんだよ。

「サキちゃんならきっと大丈夫だと思いますけど」

まだそんなことを言うわからずやの頬をつまむ。

「にゃ、にゃにふんのれふか、」

「い・い・な？」

思い切り顔を近くして懇願する。祈りが通じたのかそれでようやく頷いてくれた。

「……あぅ」

「なんだか二人だけで楽しそう、なの」

サキが何の話か知りたそうな顔をしていたが、これちっとも面白い話じゃないからな？

＊　＊　＊

「ここにも居ないぞ」

第一候補の玉座の間、第二候補の王の寝室、第三候補の大広間（ここで食事が行われるらしい）すべて探したが、俺達は王らしき人物をまだ見つけられないでいた。兵は出払っているとはいえ最低限の人間は配置してある。見つかれば厄介な展開になるのは間違いなく、かといってここで逃げ帰ってはわざわざこの国に来た意味が無い。

「あとはどこが怪しいと思う？」

残る可能性は、城の関係者ならば誰でも入れるような場所しか残っていない。護衛の兵以外にも人が居る可能性が高いので危険度が上がるが、目的を達成するまではサキもリアも絶対に帰りたがらないだろう。さっさと見つけて早く終わらせたいし、少しくらいのリスクは覚悟しよう。

いいか、お前ら絶対に騒ぎを起こすんじゃないぞ。いいな？

「それでは少々危険ですけど、それらしい部屋を一個一個探しましょうか」

３桁に達しそうな部屋数を誇る城だ、一体どれだけ時間が掛かるやら。

……。

「ここにも居ない」

ってな具合に地道に丁度１０部屋目を探し終えた時だった。

「うにゃーっ！！　なのっ」

早くもサキが音を上げた。その気持ちはすごく良く解る。もう帰りたい。

「これ以上こんな事してても埒が明かない、なのっ」

何を思ったかサキは躊躇無く物陰から飛び出した。抜刀してから言う。

「そこの男とっ捕まえて聞いてくる、なの」

何故かグッと親指を地に向けて爽やかに出て行った。

止めろなんて無理な相談だった。神速で忍び寄られて鋼鉄すら両断するであろう刃を目の前に突きつけられた男は、サキの出現に驚愕しつつもひと言ふた言喋ったかと思うとアッサリ首を切断された。

「最初っからこうすればよかった、なの」

「ちょっと待てよおいっ！？」

何だ、何故そんなに冷静なんだお前は！　死んだ？　死んでるだろアレ！？　刀が間違いなく首を抜けたようにしか見えなかったんですけど！

騒ぎを起こすなってどれだけ口を酸っぱくして繰り返したと思ってんだお前は！

「王様朝から出かけてるらしいの」

そうか。そうなのか。ならいくら探しても見つかるわけ無いよな残念無駄足かー、って

「言ってる場合か！」

渾身のノリツッコミにも、ぶんっと刀の錆を落とす仕草をするこいつはちっとも意に介していない。

「つんつん。……あ、だいじょぶです。ちゃんと息していますから」

「当たり前だ、生きて……何で生きているんだよ？」

ハッキリと斬っちゃった現場を目撃した者としては、俄かには信じがたい。しかし改めて見てみると確かにそいつは死んでもいないし首をちょん切られてもない。見る限り全くの無傷だった。

「わかりやすく言うとこの剣のおかげ、なの」

俺が訳わかんない、という顔をしていたからだろう。すらりとした刀身の背を手に乗せて、犯人が凶器を自慢げに見せてくれた。

サキの刀を間近で見るのはこれが初めてだった。朧姫（おぼろひめ）と名付けられた細身の刀は、曇り一つ見当たらない赤銀の輝きを静かにたたえている。良く見たら刀身には微かな意匠が掘り込まれていた。……なんだろうこれ。羽根、のように見えるけど違うかもしれない。

俺はそんなに武器には詳しくないが、見れば見るほどこれに斬られて無事である理由がわからない、それくらいにこの得物には迫力があった。

「斬ったと見せかけて斬っていなかったのか？」

そうじゃないと説明がつかない。目で追えないほどの一閃だったから、見間違いの可能性なら否定はできないけれど。

「ん？　思いっきり殺（や）ったなの」

頼むから不穏当な言い方をしないでほしい。

「詳しく説明すると長くなるし私も良く知らない、なの」

そこは威張るところじゃねえよとツッコむ前に、サキが朧姫を壁に突き立てた。

普通はどんなに良い刀であってもそんな事をすれば刃毀れの一つもあって当然だ。なのにサキの刀は、まるで水の中に差し入れたような気楽さで音も無く壁を裂いてしまったのだ。とんでもない切れ味――いや、これは。

「この子の刀身には実体が無いの。マボロシ、なの」

神刀朧姫。製作年は不明、製作者も不明。ただ、これを創った者は人間ではないらしい。代々ラインハルト一族を守る刃の筆頭に貸し与えられていた業物だそうだ。

間近で観察しても実体があるようにしか見えないのだが、実体ある物が突然消える筈が無い。おもしろい武器だが相手からすれば厄介だろうな。俺もかなり戦りづらかったし。

ところで、刀身が幻だといっても確かにその刀にはモノを斬る力がある筈だ。まだ出会って間もない頃こいつは音も無く木を切断して見せたことがあるし、何より今目の前で壁を切り裂くというアホな事までやって見せたのだ。その切れ味なら人間が斬れない筈が無いのに、どうしてそこで倒れている人間は無事だったんだろう。

その答えはごくごく簡潔なものだった。

「この子はヘンなヤツなの。人間には当たらない様になっている、なの」

そう言われて昨日の酒場での出来事を思い出した。鎧だけ斬られて驚愕に目を剥いた男は確かに無傷だったのだ。一体どんな理屈なのか興味があったが、サキは詳しい原理なんて知ろうともしていないらしい。変なヤツで片付けられてしまった朧姫にちょっとだけ同情した。

サキが言うには、この刀は神が授けた守るための力なのだそうだ。かつて魔王と呼ばれた存在が人間に恐怖を振りまいていた時代、迫り来る魔物の脅威から身を守る為に朧姫は生まれたらしい。その力

が人同士の争いに使われない様、人間を斬れないという一種の封印を施したのだとか。

不思議なもので、そうすることによって対魔の力がより増幅されたらしい。エク公とは違うけど、これも伝説レベルの武器なのかもしれない。

「まさかとは思うけど、それ喋ったりしないよな？」

「？」

うん、違うならいいんだ。忘れてくれ。

「〝人間〟には効かないのか」

「斬られても体には一切傷がつかないの。その代わり、その人間に流れている〝気〟を一時的に断ち切ることによって無力化できるの。それがこの子の攻撃、なの」

腕を切り落とすように切れば腕が動かなくなり、首を切り落とすように切れば意識が落ちる。

「お前が普段遠慮なしに刀を振り回すのは、どうせ切れないって思っているからなんだな？」

「そなの。だからレオンとこないだ遊んだ時も本気だった、なの」

強そうなのを見るとウズウズするの、などとマニアックな発言を

するサキに対し、今更ながら嫌な汗が流れた。

”人間には”。その言葉を聞いて、若干の不安が鎌首をもたげてニタッと笑う。

「……人間以外は？」

「ふつーに斬れる、なの」

「例えば魔族なんかは」

「効果バツグン地獄行確定、なの」

ですよねー。

改めて目の前が暗くなった。あの時サキの刃を避けられなかったら、俺は今頃死後の世界だったのか。

……いやいや落ち着け。目の前のこいつはこれでも仲間みたいなものだ。今更俺に向かって振り回すようなクレイジーな行動はしないよなそうだよな信じるぞ？　……でも念のために言っておこう。

「あのな、サキさん。それもう二度と俺に向かって振るんじゃないぞ」

「こんな風に？　なの」

「振るなって言っただろーが！！」

何気ないように見えて少しも手加減のない一閃をギリギリでかわ

した結果、万歳の格好でそのまま倒れる俺。

「大丈夫、痛くないの。最初は誰でも怖がるの」

コイツは一体何を言っているのか。どうやら今まで誰にも剣を避けられた事が無かったらしいサキは、怪しげな微笑を振りまきながら俺に歩み寄る。

「やめっ、止めろおいバカこのっ、うわっ！！」

＊　＊　＊

……。

１０分後。俺には１０時間くらいに感じられた洒落にならない運動が終了した。

「まあ過ぎたことを気にしてもしょうがない、なの」

前にも言ったが、それはきっと加害者が言ってはいけない言葉だと思うんだ。

「いやいや、まさかレオンが魔族でしかも王さまだったなんて、な

の」

結局正直に事情を話して事なきを得た（？）んだけど、棒読みでそんな事を言われると余計に腹が立つのは俺の度量が狭いからなのだろうか。

ふぅっ、と一つ大きな息を吐く。

激しい運動と恐怖で暴れていた心臓がようやく落ち着いてきた。

結局サキは、俺が魔王だからといって即座に切りかかって来るような真似はしなかった。それどころか、

「ん、ごめんなさい、なの」

しおらしく謝るこの姿を見ていると毒気も抜かれるわけで。

「もう解かったよ、だからもう俺に向かって振り回さないでくれよ」

「うん。……それにリアッちも、なの。まさか勇者様だったなんて、なの」

それはきっと誰にも解らなかったと思うから気にしなくていい。

「わ、様なんて付けないでよサキちゃん。お願いですから」

普段のリアを見ていると勇者という肩書きに若干の疑問の余地があるのだが、そこは黙っておいた。まるでついでとばかりにカミン

グアウトしたけどいいのか？　一応秘密だったんじゃ。

「……ま、とにかく」

周囲をぐるりと見回して一言。

「これからどうするかだよな」

当たり前といえば当たり前なのだが、あれだけ騒いで兵士に見つからないというのは幾らなんでも虫が良すぎる。そこまで気の抜けた警備である訳もなく、俺達三人は大量の兵士に囲まれていた。

「結局こうなるんだよな……」

おおよそ前から数百人、後ろからも同程度。じわり、と円を形成しながら迫ってくる。逃げるどころか出口すらみえない混雑具合だった。

「どうする？」

「どうしましょうか」

「取り合えずレオンを生贄にしてみる、なの」

「却下だッ！」

「か弱い女の子達に戦えっていえない筈、なの」

そのか弱いお前に殺されそうになった経験を持つ俺は、一体何て形容されればいいのだ。

「あーもう、とりあえず包囲を突破するぞ。いいな？」

異論は無いようなので「せーの」で息を合わせて一気に突破しようとした俺達。

しかし、予想外の人物がそれを遮った。

「そこまでだ！　愚か者共め」

この場に似遣わないソプラノ声。全ての視線を集めるそこには、これ以上ないってくらいに得意げな子供、もとい王の姿。

そして、背後には何故か拘束されたじいさんがいた。

「……もしかして私達、ぴんちですか？」

返事をする気にもならなかった。

9．「言ってる場合か！」（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

私用のため、２日に１度更新というペースからずれてしまいますが本日投稿します。

次回投稿は２７日の予定です。

10.「まあ、そうなんだけどさ」

「捕まっちゃいましたねー」

「捕まっちゃったのー」

「捕まっちゃった、なの」

「……」

「困りましたねー」

「困ったのー」

「困った、なの」

「……」

何だよこのゆるゆるな空気は。

こんな薄暗くてじめじめした不快指数満点な地下牢で、こんな能天気な会話とか。普段能天気な人間のシリアスな一面が見れるかなー、なんて少しでも思った俺がバカだった。

当然のように奪われた武器はここにあるはずも無く、リアもサキも丸腰状態だ。魔法が使えるリアはまだしも、サキはただのお子様に格下げである。こんな状況でもてんで動じないとか何を考えているんだろう。

多分何も考えていないんだろうな。

「今なんか凄く失礼なこと言われた気がする、なの」

「気のせいだ」

あの後、俺達3人はじいさんを盾に抵抗するなと脅された。じいさんを守ることが何よりも大切だとするサキの強い願いに押されて、結局俺達は抵抗することなくこの牢屋に押し込められる道を選んだ。

「まさかあの状況でアンタが出てくるとは思わなかったよ」

「ほっほ、すまんのぅ」

こんな状況になっても相変わらず飄々としたじいさんだ。

「どちらにせよもう潮時じゃったからの、この機会に賭けてみようと思ったんじゃ。まさか君らにこんな迷惑をかけるとは思わなかったものでの。」

じいさんはそう言うと、若干沈んだ顔で今に至るまでを語り始めた。

＊　＊　＊

一月以上も続いた暇潰しの付き合いも限界だった。味方は傷つき、もう戦う力が残っていない。これからどうするべきか判断に迷って

いたじいさんの潜む森に俺達が迷い込んだのは、丁度そんな時期だった。

「渡りに船とはまさにこのことじゃ、と神に感謝したよ」

サキを俺達に同行させるという決断には、殆ど迷いが無かったという。サキが王と会う事で事態が好転する切欠が掴めないかと期待していたらしい。

「どうして俺達を信用したんだ？　ふつう少しは疑うと思うんだけど」

俺達がどんなヤツかも良く知らないのに。自分で言うのも変だが、リアはまだしも俺は無害そうな顔をしていると思わないんだけどな。一応魔族だし。

「サキが手放しで誰かを気に入るなど、サキに出会ってから初めての事じゃったからの」

「気に入るって、俺を？」

「リアっちも、なの」

どうして？　と尋ねるリアと俺二つの視線を感じたのか、サキが人差し指を顎に当てる。どうやら考えるポーズらしい。

「なんか、二人とも面白そうだったの」

何だその理由は。

「あ、私もそれわかります。お二人と一緒に居ると何故か、わくわくしますから」

リアも直感だけで生きているらしい。お前実はただの直感で魔王を連れ回そうとか思ったんじゃないだろうな。

「ふたりって、わし仲間はずれ？」

じいさんはちょっと黙っててくれ。

「面白そうって、それだけで仲間にしようって？」

「勿論、実力も凄そうって思ったの。私一人じゃいくらなんでも国にケンカ売れないの。でも二人が助けてくれるなら何とかなりそうって思った、なの」

「ケンカって、お前話し合いをするために此処に来たって言っていなかったか？」

「備えあれば、なの」

……まあ敵地に乗り込む以上そういう事態はありえるって考えるよな。見たところサキは対多には向かない能力だと思うし、わらわらと寄ってくる敵を一度に相手は出来ないのだろう。

「で、ろくに話も聞かないまま流されるように俺達はハイグレイに来た訳だが」

片隅でイジケていたじいさんに話の続きを促した。

「サキから離れるのはせいぜい1日か2日の予定じゃから大丈夫と思ったのじゃがの」

こういう期待は往々にして嫌な方へと転がるもので、唯一恐れていたことが起こってしまった。今まで最低3日は空いていた襲撃が今回に限り翌日に来たのだ。

「予想外の出来事じゃったが、大軍を目の前にして覚悟が決まってしまったよ」

派手に燃えてしまった森では結界もロクに作動せず、進軍の妨げになどならない。さほど時間も掛からずに見つかってしまい、結局投降する道を選んだのだという。

「どの道、今までの状態が長く続くとは思っていなかったしの。最後の会話に賭けてみようと思ったんじゃよ。ジャイノスを盲信する王を上手く説得できるかどうかは判らんのじゃが……」

大罪を犯した者に対する刑の執行は、王の御前で行われるしきたりなんだそうだ。そこでもう一度だけ、王と話す機会が与えられる。

命を賭けたラストチャンス。それに全てを賭けようと言うのだ。

「そんな、危険すぎます。……こんな事考えたくないですが、もしも駄目だったら」

「うむ。その時は、別行動をとっていたサキに助けてもらおうかと思っておったんじゃがのぅ」

前言撤回、命賭ける気ゼロじゃねえか。

ここで会話は振り出しに戻る。

「困ったのー」

「困りましたねー」

「困った、なの」

「何か他人事のように心配しているけど、俺たち全員死刑っぽいよな」

……なんだこの沈黙は。

「やっぱりそう思います？」

「何の為にこんな所に入れられてると思ってるんだ。立派な罪人として認められたからこんな歓迎を受けてるんだろ？　大反逆者ラインハルト卿に与した不届き者として」

「照れるのー」

ホメてねえよ。

「でもでも、悪い方にばかり考えても仕方が無いですよ」

良いこと言うね。流石は前向きで純真な勇者様だ。

微妙に視線が合っていないのがどーいう意味か知らないけどさ。

「ひゃっ！？」

何気なく肩に手を置いたことがそんなに意外だったのか、リアの体がそんな悲鳴と共にぴくんと震えた。大袈裟な反応に不可解なものを感じながらも、一応謝っておく。

「悪い、脅かすつもりは無かったんだ」

「あれ？　……あ、そっか……」

一人で驚いて一人で何やら納得していた。

「セクハラ大魔王、なの」

そういうことをぼそっと言うんじゃない。誰かに誤解されたらどうすんだ。

「あ、え、と違うんですっ。ごめんなさい変な声出しちゃって」

なんでもないんです、と笑うその表情はいつものリアだった。しかしあの驚き方はちょっとヘンだなと思う。俺が肩に手を置いたのがそんなに意外だったのだろうか。

「大丈夫か？　色々面倒ごとが重なって疲れているんじゃないか」

「大丈夫ですっ。牢屋なんて日常茶飯事ですから」

何処の世界に牢獄が日常にある勇者が居るのだというツッコミはもう面倒だからしない。結局押し切られたような形でうやむやになったリアの話は、そのまま忘れられていった。

＊　＊　＊

頭を切り替え、これからの事を考えようとした頃。

随分と真面目な顔をしたじいさんが、俺とリアに笑いながら言った。

「こうなったのもわしの責任じゃからの。君らだけでも何とか助かるように、サキに付いてもらうつもりじゃ」

ワシという荷物さえなければ、脱出も不可能ではないじゃろ？とじいさんが言う。

「まあ、そうなんだけどさ」

それだとじいさんを守る役が誰もいなくなる。

俺の隣にいる勇者を見ても、同じことが言えるか？　じいさん。

「わたしは残ります。このまま見ぬふりなんて出来ませんから。ぜひお手伝いさせてください」

時折見せるガンコな声でそう言われて、流石のじいさんも言葉に詰まる。再び俺の方を向いたじいさんには肩を竦めて見せるしかない。

「心配してくれるのは有難いけど、俺もリアも自分の身くらいは守れるつもりだ。説得が上手くいくか判らないけど、じいさんの思うようにやってみればいい。駄目だった時の逃げる手伝いくらいはしてやるよ」

ここまで首を突っ込んだんだ。今更結末だけ知らないというのも気分的にスッキリしないしさ。

「……ほっほ。サキ、本当にワシらは幸運じゃの」

「はい、なの」

じいさんは、サキと一緒に「ありがとう」と頭を下げた。

改めてそんなことをされると妙に照れくさいけど、そんなに悪い気もしない。

散々リアのことを勇者っぽくないと言っている自分も、相当変なヤツだと思う。自分の事ながら。

＊　＊　＊

「そろそろ、明日に備えて休みませんか？」

ちょっと周りがうるさいですけど、とリアが不満そうに牢の外を見ながら言う。

俺達が捕まったとの知らせは既に全軍に届いており、城の警備体制は未曾有の人口密度に膨れ上がっていた。ちょっと耳を澄ませば暑苦しい鎧同士の擦れる音が聞こえてくるような状態だ。そこまでしなくても逃げないってのにご苦労な事だ。

「おうおう、いい様だなてめえら」

「……。またお前か。」

定時の見回りなのか、例のスキンヘッドが勝ち誇った笑みで近づいてきた。昨日サキが蹴散らして以来忘れていたが、ひょっとしたらサキの情報を知らせたのはこいつかもしれない。

ちょっとムカついた。

「ここでただ座ってるのも飽きてきた、なの」

癇に障るそれを目の端に留めたサキが言う。

「んなこと言ったってお前、何か策あるのかよ」

ぽん、と俺の肩をたたく紅きなんとか。

「おねがい、なの」

１００％丸投げだった。

仕方ない、わざわざご登場頂いたコレに手伝ってもらうことにしよう。

11．執行の日・1

死刑執行の日は、少し汗ばむくらいの快晴だった。

見事に晴れ渡った空は何処までも青く、さわやかな風が吹き抜けてゆく。こんな格好じゃなければきっと良い気分だったろう、と目の前で鈍い光を放っている手枷を見ながら思う。

幸い手枷に大した仕掛けは無さそうなので、すぐに抜け出せる筈だ。この手枷を壊して何時でも飛び出せるように軽く手首を捻って具合を確かめる。俺の背中には、スキンヘッドを操ってまんまと奪還したエク公と朧姫が出番を待っていた。

「貴方はお父上の何を見てきたのですか。ハイグレイの力は抑止力ですぞ、加害になど使って良いものでは無いのです！」

罪人として連行された俺達４人は、処刑の場である闘技場で仲良く身柄を拘束されている。そんな俺達の代表として発言を許されたかつての家臣が、王に最後の説得を試みていた。

しかし事態はのっけから不穏な空気に包まれている。王がじいさんの説得を途中で切り捨てたばかりか、この場で他国を征服すると宣言したのだ。

「これだけの力、眠らせておく父上が馬鹿だったんだ。僕はそんな無駄な事はしない。この武力があれば我が国は更なる発展を遂げられるのだ！」

「そのような暴挙で富を手に入れても人の心は集まりませぬ。いずれ更なる大きな暴力によって飲み込まれてしまいますぞ！」

「ばーか、ボクが負けるとでも思っているのか。ボクにかかれば世界征服だって簡単さ」

「ホントですか？」

「黙っていような、リア」

話がややこしくなるから。

「何と滑稽な。わたくしごときを捕らえるのに一月も要した貴方が、そうた易く世界をおさめられるとお思いか？」

「何だって――」

切り返された言葉に今までの余裕顔が一気に沸騰した。本当のこと言われて怒っている姿は滑稽で面白いが、この駄々っ子は一応俺達の生殺与奪権を握っている人物でもある。あまり刺激するのはマズイのでは。

「ゲ。口が過ぎるようですな、ご老人」

ほら保護者が出てきた。

思えば声を聞くのは初めてだった。こんなふざけたカエルみたいな声一度聞いたら絶対に忘れないだろう。今まで王の後ろで影のように佇んでいたジャイノスは何かを囁いた後、大人しく下がった王の前に進み出た。

「お主に用はない！　王に――」

「ゲッゲッ、口を慎め。辞世の句を詠ませてやるとの王の心遣いを嘲笑いおって」

手を掲げたカエル男に従って周りの兵が一斉に弓を構え、矢の先をじいさんに向けて静止した。これ以上の発言は許さない、という無言の圧力。

それでもじいさんはそんな脅しに屈しない。あくまで王との対話を続けようとジャイノスを無視して語り掛ける。例え幾つもの矢が襲い掛かろうとも、じいさんの隣には守護天使（サキ）が控えているのだから。

「ふん、そんなもので主様は殺させない、なの」

たった一本の剣をどんな風に使えば全方向からの矢を殺せるのか。俺が手を貸すまでもなく、機械的に放たれた全ての矢が地面に叩き落された。

「ここまでだ。じいさん、下がっててくれ」

サキに続いて俺が一歩進み出る。手枷など既にぶっ壊した。説得がすんなり行く訳が無いと覚悟していた通りの展開になっちまったが、そうなれば俺達も予定通りにコトを済ませてさっさとこの場を脱出しよう。

「待ってくれ」

しかし、そんな俺達をじいさんは片手を挙げて制止した。

「頼む、待ってくれ。ここを逃したらもうチャンスは無いかもしれぬのじゃ」

「ゲッゲッ。幾らほざこうとも無駄だ。偉大なる王の考えは変わらぬわ。……たった三人の護衛で何が出来る？」

拘束を破った俺達を見てもジャイノスにまるで驚いた様子は無く、それどころかますます高慢に笑う。呆れるくらい耳障りな音を撒き散らす男を、じいさんは正面から睨みつけた。

「もう一度言う。お主に用は無い、そこをどけ」

「……ゲッゲッ。殺せ。」

号令に従い、狙いを定める兵士の手が機械的に矢を放つ。シュルシュルシュルっと空気の中を泳ぐ音が幾重にもなって一点に向かう。当然、サキがそんなものを見逃す筈も無く、地面に新たなゴミが増えただけだが。

「じいさん、俺にちょっと任せてくれないか？」

再び進み出た俺が確認を取ると、憎憎しげにカエルを睨みつけていた顔が悔しげに下を向いた。諦め切れないのかもしれないが、これ以上この場での説得は無駄だ。あの子供王は恐らく意識を上から塗り替えられている状態――平たく言えば操り人形になっているのだから。

注意深く観察しても微かにしか感じられないからよっぽど上手く隠したんだろうが、俺の目は誤魔化せない。犯人は勿論あの変な声

のカエルなんだろう。巧みに王の意識をコントロールして、自分は最も王に近い立場に収まっている。カエルの狙いが国の乗っ取りなのかどうかは知らんが、どうであれコントロール下にある相手を説得しても徒労に終わるだけだ。

「……と思うんだけど、お前はどう思う？　リア」

「わたしは意識操作の術を使えないのでハッキリとは解りませんけれど……でも、確かにあの王様の呼吸が不自然に見えます。息を吸うのも吐くのも、タイミングがあまりにも一定すぎて逆に違和感がありますね」

言われてみれば確かにその通りだった。傀儡師の見習いがよくやる初歩的な失敗だ。やっぱり思った通りで間違いないと思う。

「そんな事が……すまんな、こんなことに巻き込んでしもうて」

俺達の話に愕然としつつも得心したのだろう。結果的に自らの行為が無駄になってしまったと思ったのか、申し訳なさそうに丸めた背中。それを俺がぺしっと小突いた。

「そんなもうすぐ死ぬみたいな顔するなっての。リア、サキ」

兵士共の輪が出来上がりつつあるのを横目に、背中を預けている2人に問う。

「結局これからどうする？　なの」

「喜べ、解かりやすいぞ」

と、カエルを指す。

「要するに、後はあいつをぶっ倒すだけだ」

そうすればきっとあの子供も目を覚ます。その後じいさんにたっぷり説教でもしてもらえばこの騒動も解決するだろう。

「その前に、この兵士さん達を何とかしないといけないですけどね」

リアがエク公を構えながら周りを見渡す。俺達はじいさんを囲むように背中を合わせた。

「俺は魔術師の連中を相手する。そっちの鎧着た暑苦しいのは任せていいな？」

「任された、なの」

「私はサキちゃんのサポートに回りますね」

頷きを返して言う。

「よし……行くぞ」

＊　＊　＊

数多の呪詛が一斉に吐き出され、数多の剣が殺到した。

俺の向いた先からは幾多の炎が燃え盛る。しかし慌てる必要は無い。生まれた炎同士が融合して巨大な炎になろうとも、所詮は烏合の衆が生み出すモノ。全て受け止めたって痒くも無い。

「かっかっか。温いわ、こんなチンケな火で俺を焼こうなんぞ片腹痛い」

俺が今までどれだけの炎を浴びせられてたと思ってるんだ。俺の鬼畜両親が繰り出す灼熱地獄に比べたら、こんなの焚き火にあたっている様なもの。

勝ち誇ったような顔をしていた魔術師どもの表情が凍る。もう遅いけどな。

「ひいいいいっ！？」

魔術というのは要するに自分の体内に持つエネルギー、俺は魔力と呼んでいるが、それを体外に放出することで色々な現象を巻き起こすモノだ。その手順は千差万別で、例えばリアと俺が全く同じことをやろうと思ってもその過程は異なる。

一般に良く使われている方法は、自分が何か道具を使っているイメージをそのまま投影してしまうやり方だ。

例えば小さな火を起こしたいなら、火打ち石を打つようなイメージをしながら指を鳴らすと初心者は結構出来るようになるらしい。生まれた火が指先から垂れ流れていた魔力に引火してしまい小火を起こして怒られる、なんて失敗はちょっと魔術師に話を聞けばいくらでも出てくるだろう。

精度や発動速度は練習と経験を積み重ねる程に上がってゆく。複雑なもの、特殊なもの程難しいが、成功すれば様々な現象を巻き起こすことが可能だ。例えば今俺がイメージする物は、鏡だ。

そっくりそのままお返しして差し上げるのだ。

「ぎゃあああああっ！？」

俺の目の前で頑張って燃え盛っていた火を全て弾き返す。連中に当たる直前で地面に触れた炎の塊が火柱を巻き起こし、悲鳴もろとも吹き飛んでいった。

「余所見なんて随分ナメてる、なの」

火柱に目を奪われていた最前列の兵士は自分が斬られた事に気付く前に昏倒していた。目の前で仲間が倒れた2列目の兵士がサキを追おうとした直後に膝を屈する。

届いていない筈の刃が斬られていない筈の鎧を切断する。そうして次々と意識を刈り取る様は何度見ても不思議だ。大層な二つ名に恥じない力をありありと見せ付けるサキへ、さらに待ち構えていた兵士が一斉に剣を振り下ろしても結果は変わらない。

「１００まんねん早い、なの」

別空間を跳躍するかのように淀みなく大群の間を駆け抜けるサキにたった一太刀すら浴びせられない。兵士が姿を認めて身構えた時

には、もう終わっているのだ。

「――え？」

そう漏らした兵士が最後に見た光景は、既に最後列の兵士すらも同じ道を辿る姿だった。

「あの、私することないです」

戦場のど真ん中で、仕事の無かった勇者が一人で拗ねていたのは放っておこう。

１２．執行の日・２（前書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。
今回残酷表現に当たる（と思われる）部分が少しありますので、苦手な方はご注意ください。

12．執行の日・2

「どうしたカエル野郎。お前の手下はこんなモンか？」

周りに這う兵士の畏怖の視線を感じながらカエル魔導師に言い放つ。子供王すら驚きに目を見張るその様はなかなかに愉快だ。思い知ったらさっさと降参でもしなさいふはははは。

「ゲッゲッ！」

だというのに、ジャイノスだけはまるで堪えた様子が無かった。ざっくりと突きたてた己の杖を両手に持ちながら、あの気味の悪い声で詠唱を始めたのだ。

《――炎よ、万物を無に還す力の源よ。我に従いて目の前の仇にその力を示せ》

魔術師の周囲を覆うようにオレンジの炎が顕現し、一気にその場の気温が数度跳ね上がった。聞き慣れない呪文だが炎の攻撃魔術でも上位に位置する威力を持っているようだ。人間にこれだけの力を持っている魔術師はそうそう居ない筈だから、威張るだけの事はあるかもしれない。

「リア、出番だ」

「私ですか？　わかりました！」

今の所一番ヒマそうな勇者の背中を押すと、久しく出番の無かっ

た手元のエク公が嬉しそうに光を反射した。座布団があれば『ようやく出番か』とか憎まれ口を叩いているかもしれない。俺の言うままに進み出たリアは珍しくちょっと眉を吊り上げた。

「ジャイノスさん、こんな暑い日にそんな熱い魔法使っちゃダメですよ」

……その通りだけどさ。もうちょっと他に言うこと無いのかお前。

「ゲッゲッ、やかましいわオマケが。貴様からこんがりと刑を執行してやるわ」

「……おまけ？」

あ。

外見はニコニコしているリアの周りだけ温度が数度下がった気がした。

勇者として色々規格外な存在であるコイツは堪忍袋の短さも規格外な所がある。どうも正義の血が騒ぐのか、気に入らないヤツが相手だとその長さは特に短いみたいで。

「いやですねレオンさん。わたしぜんぜんちっともおこっていませんよ？」

怖いよその笑顔。

「ゲッゲッゲ！　消し炭になるがよい！」

一気に膨れ上がったオレンジの光が壁となって前へ進む。大量の熱が周りの兵士を巻き込む事など構いもせず、リアを一気に飲み込む勢いで迫ってきた。

対するリアは「いくよ、エクちゃん」と小さく呼びかけて上段の構えへと動く。掲げた刀身には既に輝く水が宿り、大上段から振り下ろされた聖剣が水のカーテンを描き出した。

オレンジ色の炎と淡く輝く水が正面から激突する。

リアの笑みを見た時点で予感していたけど、決着は想像以上にあっけなかった。

水と炎のぶつかり合いの結末は、水が蒸発してしまうか炎が消えるか。……だと思っていたのだけど、微かにじゅっと音をさせた水波動が炎の壁を真っ二つに引き裂いてしまったのだ。

「ゲゲッ！？」

核を打ち抜かれた炎の壁が霧散すると同時に、固まったカエルの杖の先端がポロリと落ちる。やるな、そこまで狙っていたらしい。

「ひどいです！　私オマケじゃありませんっ」

ところでやっぱりそこに怒っていた。こいつの地雷は何処にあるのかいまいち解かり辛いのでうっかり踏んだらどうしようとか本気で思う。

「……げぅ」

自らの杖を呆然と眺めるカエルの顔が不健康な色に変わる。元々不健康そうな色をしていた顔は面白いように蒼褪めていた。

＊　＊　＊

「……小癪なマネを。貴様ら、何をしておる！　早く賊共を殺さんか！」

暫し呆けていたジャイノスが、先端の無くなった杖を振り上げながら無様に声を張り上げる。

「どうした、殺せ、殺さんか！」

しかし誰もジャイノスの言葉に何の反応もしない。それどころか兵士たちの様子が明らかにおかしい。冷水をぶっ掛けられた後みたいに眼を見開いて近くの仲間を呼び、そして何事かを口にする。皆一様に驚いている様子なのだ。

「うぅっ！……？　うあぁ……ッ」

突然の変化は奥の天覧席に鎮座していた子供にまで及んでいた。頭を抱えて苦しそうに蹲るその姿に、世話係らしきメイドが血相を変えてすっ飛んでくるのが見えた。

変化はそれだけじゃない。よくよく見れば、先程までどこか虚ろだった兵士たちの視線が随分ハッキリして、この人数に相応しい音

（例えば小さな囁きや、鎧の擦れる音）が聞こえる。それでようやく気付いたのだが、今までこの空間は不自然な程に静かだったのだ。あの杖が壊れた途端にこんな反応があるってコトは、この場の兵士全員がカエルの影響下にあったのかもしれない。

「やっぱりあのカエルさんが色々と悪さをしていたみたいです。でもこれできっと元通りになるはずです」

つまり、今リアが切り落とした杖が催眠魔術のキーだったってコトか。

確かに少し前までジャイノスから感じた力強さをもう殆ど感じない。これ以上何をする力も残っていないだろう。

「ゲ、静まれいっ！　王の御前であるぞ！」

やがてハッキリ声を出す者も現れ、場の混乱は加速度的に大きくなってゆく。勢いは留まる事を知らず、このまま行けば皆が正気に戻るのも時間の問題だった。

このまま何事もなかったら、の話だったんだけど。

「おやおや、大失態じゃないの？」

――地鳴りを巻き起こしそうだった程の勢いが嘘のように止まる。

新たに登場した人物は心底愉快そうに唇を歪めて、くすくすと笑っていた。

＊　＊　＊

その人物がジャイノスよりも格上だということは、本人のみっともない動揺振りからも十分理解できた。リアより少し大きいくらいの背格好をした男が頭3つ分は大きいジャイノスを圧倒しているのだ。

鮮やかな金色の頭髪がクスクスと笑う度にゆらゆらと揺れる。それにすら怯えるようにジャイノスは一歩後退し、喘ぐように相手を凝視した。

「いやー、ラッキーだったよね。冷やかしのつもりでちょっと寄ってみただけなのに、こんなに面白いものが見られるなんて」

ふふふ、とまるで気の置けない友達との会話のように男は楽しそうに喋る。

「ねー、どうするの？　このままじゃお前、間違いなく殺されちゃうよ？」

殺される？　内容を理解できない俺達の事は全く視界に入れずに、闖入者は金の髪を無造作にかきあげて深い闇色の瞳を窄ませた。

「まだ失敗などしておらぬ！」

「冗談言わないでよ、完全に力負けしていたじゃない。アレでしょ？　”宝玉”を開放する為の鍵を処理するって仕事だったよね？　まだ終わっていなかったんだ？　もうかれこれ何ヶ月経ってるか知ってる？　お前が非力なカエルだって事は知っているけど、流石にもう終わっているだろうと思っていたんだよ。けれど想像以上にお前は愚図だったんだねぇ。ボクなら一日要らないような仕事をコレだけ時間掛けて失敗でした、じゃあもう言い訳できないよ。あーあ」

男は相手が口を挟もうとする所に被せて言葉を連発する。ジャイノスは反論すら出来ないまま脂汗をポタポタと垂らす事しかできないでいた。

「ぐ、うぬぅ」

「……おっとそんなに睨まないでよ。何のために出てきたと思っているのさ？」

今までジャイノスに注がれていた珍品を見るような目が今度はじいさんを捕える。まるで値踏みするようにその瞳が動いて、「ハッ」と馬鹿にするように口元を吊り上げた。

「こんなヨボ爺を始末するのにどれだけ手間掛けているんだか。仕方が無いから手伝ってあげたよ。感謝しなよ？」

手伝って、あげた？

何を言っているんだコイツ。突然出てきてべらべら喋りやがって、あまつさえ訳のわからない事まで。不可解な言い回しをした男はもうじいさんに興味を無くしたのか再び視線がジャイノスへ向く。

「そうそう、鍵ってコレだけ？　他には？」

ドサっという音と共に、じいさんの体が地面に崩れ落ちた。

「な――」

「あ、主様！？　どうしたなのっ！？」

血相を変えたサキとリアが駆け寄る、その様を眼の端に捕えて金髪は言う。

「なんだ、先代のグレイスを既に始末したのなら次で最後じゃん。だったら折角だから、ボクがお宝を運んで行ってあげるよ」

「ゲ！？　それでは困る！　それはワシが――」

運ぶんだ、とでも言うつもりだったのだろうか。抗議の意を持って背中に触れた瞬間、その腕が奇妙な方向に捻じ曲がった。

「ギャゥ！？」

「汚い手で触るな」

金髪は一切手を触れていない。ただジャイノスの腕がさらに捻じ曲がりミシミシと音を立てて――

「ゲっ……ぎゃぁぁあああああ！？」

ボキン、という乾いた音をさせた腕は、まだその動きを止めない。既に折れた腕をさらに捻り上げ、そして。

「やめろ、止め――」

「ばいばーい」

なにか、形容のし辛い音がした。鮮血が放射状に散らばって周囲を赤く染めた。

「ゲ……グ……」

「おー綺麗綺麗、どんな愚図でも血の色は紅いんだね。ボクこれ大好きな色なんだよね」

出血かショックか、腕を千切られたジャイノスはもう息を止めていた。壊れた人形のようにヒクッヒクッと痙攣する姿を呆然と見守る周りの誰かが「ひぃっ」と引きつった悲鳴のようなものを漏らし、それを皮切りに恐怖が波のように広がってゆく。その様をくっく、と楽しそうに眺める金髪は友達に語りかけるように明るく和やかに言う。

「さて、ちょっとだけ時間を無駄にしちゃった。――そうそう、君達も死んでくれる？　これって一応部外秘なんだよね」

地面に染み込むようにして消えていった金髪の言葉が引き金だったのだろうか。気付けば音が再び静止していた。俺達は狂気に染まった兵士に囲まれていた。

＊　＊　＊

「っ、主様っ！　目を開けてなのっ！　あるじさま！！」

「リア！　じいさんを連れてここから退くぞ、何処へでも良いから跳べ！」

振り下ろされた大剣を弾き返しながら叫ぶ。水の奔流を出現させて兵士たちを食い止めていたリアが、一際でかい波を打ち出して一気に押し流した。しかし間髪なく、際限なく凶刃は殺到する。

「っ、でも！　この人たちは……っく！」

襲い来る剣の嵐は先程までと威力も速度も段違いで、しかも完全に囲まれているのだ。一度に相手をする剣の数は十を超え、さらにそれごと潰す勢いで火炎が降り注ぐ。じいさんを庇いながらの状況で相手をするのはいくら何でも苦しかった。

「俺達が居なくなれば止まる！　このままの方が危険なんだよ！」

それに、と後ろを確認する。俺の背後で必死に呼びかけるサキの声色は焦燥を通り越して悲痛な響きすら混じっていた。

「……解かりました、掴まってください！」

大きく剣を薙ぎ払った後に出来た一瞬の安息の間に、リアが素早く術を完成させる。

まだ意識の戻らないじいさんを抱え俺達は光となって空を駆けた。

13．日天玉（にちてんぎょく）

辿りついたのはまるでボールを真ん中から切ったような、見慣れない様式の建物だった。リアが以前旅の拠点として使っていた物らしい。先頭に立つリアが手を触れた途端、何もなかった外壁に扉が出現した。

「こちらです。ついてきてください」

じいさんを抱えた俺は、余計な衝撃を加えないように気を遣いながらも早足でリアに従った。指されたベッドらしきスペースにそっと横たえる。相変わらず回復の兆しすら見せない主に、サキがそっと毛布を掛けた。

ただの回復魔術ならもう試したのだがそれでも全く効果が無く、しかし命を失ったわけではない。ただ目を覚まさないだけにしか見えないこの不可解な状態を、リアは理解しているらしい。

《――水よ　命の源たる母よ　その御心で伏したる彼を救いたまえ》

リアの体が淡く光を発し、徐々にじいさんに移ってゆく。薄い青色の幕が傷ついた身体を優しく包み込むと、若干じいさんの顔が柔らかくなった気がした。

……それでも、目を覚まさない。

「リアっち、主様はどうして目を覚まさない、なの？」

主を守る事が自分の生きる意味とまで言い切ったサキには、何よ

りもそれが気掛かりなのだろう。生きているという喜びから一転、その表情が翳ってゆく。

「えと、どうやって言ったらいいのかな」

一仕事終えたリアの表情も同様に暗かった。どうしたんだろう、あとは回復するまで時間に任せるしかないと思うのだけど。そう俺が口を挟むと、リアは申し訳なさそうに否定した。

「それが、少し違うんです。あのねサキちゃん、落ち着いて聞いてね」

リア曰く、今じいさんを蝕んでいるものはある種の呪いらしい。先程の治療ではその進行を止めるのが精一杯であり、このままでは永遠に眠り続けるしかないのだという。

「元通りに回復させるにはどうしたらいい、なの」

「それは……」

リアの言葉が詰まる。サキからの視線を受け止めていた瞳が迷いの色に変わった。それは多分、解決法を知らないんじゃなく言うかどうかを迷っている表情。

「言えよリア。どうして黙っているんだ?」

「お願いなの。主様を助けたい、なの」

サキの真摯な瞳を受けて何故かリアが視線を逸らした。らしくない様子についつい口を挟んでしまう。ずっと何かを考えている様子

だったリアがようやく口を開いたのは、それから大分後の事だった。

＊　＊　＊

「”日天玉（にちてんぎょく）”という宝玉を耳にしたことがありますか？」

「それがあれば主様を救える、なの？」

「結論から言えばそうなんです。」

「何処にあるのか教えて欲しい、なの」

迷い無く答えを求める。方法があれば例え世界の果てにでも今すぐ向かうつもりなのだろう。真剣そのものの表情で提げた愛刀を握り締めたサキに、リアは首を振った。

「在る場所はわかります。でもその宝玉は使えないんです」

「壊れてるのか？」

「そうじゃないんですけど、それがなくなると多くの皆さんが困ってしまうんです」

リアは感情を抑えるように、少しずつ説明を始めた。

リア曰く、この世界は各国に点在する日天玉によって支えられているらしい。普段当たり前に生活している全ての生物は知らない内にこの宝玉に守られていると言うのだ。

「宝玉は常に膨大なエネルギーを国内中に発しています。無限と云われるその力は例外なく国を栄えさせると伝えられていますし、事実その通りになっています」

日天玉と名付けられた宝玉から溢れ出るエネルギーは、その通称を”命の息吹”という。無限にしかも膨大に溢れ出るその力は何にも染まっていない”魔力の原型”と言えるものらしい。

個体差はあるものの生物は体内に魔力を持っている。魔術を全く扱えない子供も、海を自由に泳ぐ魚も、空を自由に飛ぶ鳥も例外なくそれは変わらない。魔術師でもない限り意識することは無いが、実は魔力は宿主の体を支えている重要な要素の一つだ。

仮に体内における魔力が枯渇、または過剰に蓄積するなどして極端に変化すると、身体に悪影響を及ぼす。軽い症状だとめまいや吐き気、発熱程度だが、重度となると命に関わる程の体内機能不全に陥る。

そして生物はただ生きているだけで魔力を徐々に消費していく。早くて1週間、遅くとも1月以内には体内の魔力が枯渇してしまう。その為どうしても魔力の補給が必要になってくる。

大多数の人間は魔力というものを良く知らない。当然、コントロールする方法も知らないので魔力を補給したくとも出来るわけがない。そんなあらゆる生物に魔力を補給し続けているのが、日天玉だ

というのだ。

「日天玉はあらゆる生物の体内に魔力を送り続けています。ですから普通に生活していれば魔力が枯渇する事がありません。ですが、もしも日天玉からの魔力供給が止まれば当然大変なことになってしまうのです」

黙って聞いていたが、ここまでの説明ではリアの言いたい事がまだよく解からない。

「じいさんを叩き起こすにはその宝玉の力が必要だって話だったよな？　日天玉がどんなモノかって事は解ったけど、どうしてそれがじいさんの為に使えないんだ？　膨大な力を発散し続けているのなら、少しくらい借りたって問題無さそうだけど」

「ラインハルト卿を治療する為に必要なモノは命の息吹ではなく、宝玉の内に眠っている”何か”なんです。私も実物を見た事は無いのですけれど、それを使えばどんな奇跡も実現すると言い伝えられています」

その奇跡にかかれば、最高の名医が匙を投げた人の命でさえ救う事が可能なのだという。言い換えると、じいさんの現状はそこまで厄介な状態らしい。

そして、宝玉を自在に扱えるのは”語り部”と呼ばれるごく一部の人間だけだそうだ。それは宝玉の内側にある“何か”を操る能力を持った人を指すらしい。

「その語り部ってのは、どこにいる？」

「……ごめんなさい、知らないんです。昔お世話になった方の中に一人だけ居たんですけれど、もう亡くなってしまいましたし……」

非常に珍しい能力で、大陸に一人居るかどうか位の割合らしい。

そういう人間はやはり特別視されるらしく、何らかの形で世に影響力を持つ。その為に争いに巻き込まれることも少なくないらしい。詳しくは話さなかったけれど、リアの知り合いもその口らしかった。

「もし、その語り部が居ない場合はどうしたらいいの、なの」

当然の質問に対する答えは、まだ「どうしようもない」と言われた方が良かったかもしれない。

語り部の力を持たない者が同じ奇跡を願おうとするなら、宝玉を壊して中身をむりやり引き出す手段しかないとリアは言ったのだ。

そうすれば願いは現実になるらしい。

サキの主は助かるのだ。

「……。」

ようやくリアが説明を逡巡した理由が掴めてきた。サキが今どうしても欲しいそれは、現状この国に住む何万という人の命を壊さないと手に入れられないモノなのだ。平和を守りたいリアと、主を救

いたいサキ。このままだと確実にどちらかが折れるしかなくなってしまう。

「その宝玉はサキの国にある1つだけじゃなく、他の国にもあるんだろ？　探せば1つくらい誰も使っていないヤツが在るんじゃないのか」

「……ごめんなさい、私が知る宝玉は全てその国を守っている大切なものなんです」

「だったら宝玉なんて使わないで、アイツ締め上げればそれで解決しないのか？　呪いってアイツの仕業だろ？　あの妙な金髪」

「普通の術には確かにそういう解決法もあるんですけれど、呪いというものは効果が無い場合が殆どなんです」

忌々しい事に、呪いの類というのは完成した時点で術者の手を離れる。つまりサキの主をこんな目に合わせた張本人をここに強制連行して、『さあ元に戻しやがれ』と迫っても意味が無い場合が殆どだ。しかも呪いは術者が死んでも効果が持続するという特性まで持っている。

半ば予想できた返事だったが、そうなるといよいよ手詰まりだ。

かといってじいさんをこのままにするのも後味が悪いけれど……。

「……ごめんなの、リアっち」

それは覚悟を感じさせる声だった。サキは愛刀を鳴らして立ち上がり、不安定だった瞳には強い光が戻っていた。

「サキ？」

「思い出したの」

サキが言う。まだ主が座に就いていた頃、宝玉の間に一度だけ立ち入ったことがあると。

「王国の丁度中心に誰もが無断で入れない地下神殿があるの。きっとそこにあるモノが宝玉、なの」

「待ってサキちゃん、気持ちは解かります。だけどそれは……それはハイグレイ王国みんなが困る事になっちゃうんだよ。王国のことを誰よりも考えているラインハルト卿ならきっと、」

「だって！　……だって、私には主様を守ることしかない、なの」

激しく髪を揺らしたサキがまるで叫ぶようにして遮った。しかしすぐに、まるで空気が抜けた人形のようにその語尾は弱々しく、震える。

「私は、主様を助けたい、なの」

自分を確認するように、奮い立たせるように。サキは少し掠れた声でそう言った。

13．日天玉（にちてんぎょく）（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。

なんか説明ばかりの回になってしまいました。文章は一応見直してはいるのですが変なところが（いつも以上に）あるかもしれません。。。もし発見されたら指摘してもらえると嬉しいです。

１４．サキ（前書き）

こんにちは。読んでくださってありがとうございます。

今回は、最後のシーン以外はサキ視点になっています。
この話は番外編にするべきか悩んだのですが、結局はそのまま掲載する事にしました。

14. サキ

私は、自分の言葉が嫌いだった。発言の最後に付けるそれは私にとって一種のまじないであり、護身術だった。

もうハッキリと顔も思い出せないが、両親は私が6歳になった頃に他界してしまった。私の生まれはハイグレイ領の端にある寂れた山村で、一人で厳しい世の中に放り出された子供が生きる為には他人の庇護がどうしても必要だった。

意外な事に、私の引き取り手はすぐに見つかった。余分な人口は排除される事も珍しくない村なので、それは幸運だったかもしれない。しかし私にとってそんな事は気休めにもならないほど現実は厳しかった。

引き取り手に名乗りを上げたのは村唯一の商人だった。まだ大人の腰程の上背しかなかった私は、使用人として雨の日も風の日も雪の日も数キロはなれた小川までの水汲みを一日の労働として課せられていた。

水汲みの量は一家一日の消費量だから、自分の小さな手に持てる桶で水瓶を満たすには数十回も往復する必要があった。運ぶ水の量は幼く非力な私にとってあまりにも多すぎた。それこそ死ぬ気で運んでいたものの、ただでさえ栄養不足で発育が悪かった私に大人でも悲鳴を上げる重労働が勤まる筈が無かった。

夜が明ける前から始めた水汲みが日が落ちても終わらない。不甲

斐ないその様に怒った商人は様々な罰を私に与えた。

一番辛かった罰は、その日の食事を取り上げられたことだった。最後の一滴まで搾り出した体はボロ雑巾のようにくたくたなのに、それを癒す栄養が与えられないのだ。一家が寝静まった後、寒さに身体を震わせながら桶を手にして小川まで行き、飢えを凌ごうと浴びるようにして水を飲んだ。辺りに生えている草にも手を伸ばし、考える前に口に運んだ。

やっとのことで戻ってきた後は、少しでも体力を回復する為に眠ろうとした。でも私に貸し与えられた衣服は囚人が着るようなボロキレで、外気の冷たさがそのまま肌に突き刺さる。栄養がまるで足りない体は震えが止まらず、そんな日は碌に眠ることすら出来なかった。

次に辛かったのは商人一家から受けた悪意だった。少しずつ身体が成長し、次第に課せられた量をこなせるようになってきた私を面白くないと思った子供が、何かにつけて暴力を振るうようになったのだ。いつの間にか私はストレスのはけ口としての役割も兼任させられていたらしい。

「あ、の。桶を返して……ください」

少しでも機嫌を損ねたら執拗な罰が繰り返された。ただの悪戯で取り上げられた桶を返してもらうだけでも神経を削りに削る。どんなに頑張っても結局は暴力を振るわれるが、気分次第で回数が減ることはあった。ただただ謝り続け、ただただ耐え忍ぶことが一番効果的だと知ってからは、亀のように身を硬くして無言で頭を下げるようになった。

それで暫くは何とかやり過ごせていたが、ある日唐突に商人の息子が

「お前、たまに“の”とか“なの”って最後につけるよな」

と、そんなことを言ってきた。自分では気付かなかったが、それは私の両親の故郷特有の言葉で、この村では私しか言わないことをそいつが指摘したのだ。

「そ、そんなこと、ない……」

直感的に新たな暴力の口実にされると悟って思わず否定する。それが狂った耳には強い口答えに聞こえたらしい。私の体がくの字になって吹っ飛んだ。

「口の利き方には気を付けろって言っただろうが！　……まあいい、卑しい生まれのお前にその訛りはお似合いだよ。いいな、これからはその卑しい喋り方をしろ」

「ゲホっ、っハ……は、はい」

左の頬を思い切り叩かれる。すっかり色褪せた私の髪がぱっと乱れて血のように舞った。

「もう一度」

「っ……。はい……なの」

「はい」の後に「なの」をつけるかどうかなんて判らないけれど、そんな事を知らない子供には言い訳など通用しない。無理矢理でも何でも、言われた通りにするしかなかった。

それから暫くはそのことで何度も口実を与えてしまった。無言を貫けばよかった今までとは違って受け答えを強要されるので、どうしても隙が多くなってしまう。赤黒く変色するまで肌を叩かれ、その度に自分の迂闊さを呪うしか無かった。憂さを晴らしてスッキリした顔の商人達が離れていくまで、地獄のような時間はずっと続いた。

＊　＊　＊

そんな生活が数年続いたが、不思議と死にはしなかった。水場に写る私の姿は今思えば酷いものだったし、どうしても栄養が不足がちだった為に背は大して伸びなかったけれど、それでも私は生き続けていた。

それなりに成長した私が12歳になった（これは適当に数えたものなのだが）ある日。いつものように水汲みに向かおうとした私に商人から声が掛かった。

「おい」

「はい、なの」

「今日は隣の町まで商売に出て行く。お前も連れて行くから用意をしろ」

「え……？　私がですか」

はっと身を硬くする。あまりに突然な話に気をとられて言付けに疑問を返してしまったのだ。私はこれから来るであろう衝撃に目を瞑った。しかし、驚く事に不問にされた。

「その薄汚れた顔を良く洗っておくように。半刻後に出る」

ぐるぐる巡る疑問の答えを得ないままに街に連れてこられた私は、首に犬のような拘束輪を付けられた。その輪から太い鎖が伸びて自由が利かない格好で繋がれる。周りには似たような格好をさせられた年の近い子供が虚ろな目を泳がせていた。私はようやく自分の運命を悟った。

これから自分は売られるのだと理解しても、私は全く動揺しなかった。自分が見てきた世界以上の地獄が想像できなかったから、なのかもしれない。

どんな所に売られようとなるようにしかならない。そう考えていた私は、自分の運命が変わる重大な局面だというのに他人事のように奴隷が売られてゆく様を眺めていた。

真っ赤な髪と瞳が珍しい色だったことから、私は商人の思惑以上に高く売れたらしい。

最初で最後に見せた商人の笑みも、私に何の感動も与えなかった。

ぐいと引かれた鎖に引っ張られて首が痛い。私を買った男は舐めるように体を眺め回してきた。

「これからお前にはオレの店で働いてもらう……が、その前に俺がキッチリと仕込んでやる。きひひひっ、今夜から覚悟しておけよ」

耳障りな声が何を言っているのか半分も理解できていないが、言う事は決まっていた。

「これから、よろしくお願いします、なの」

「あ？　ヘンな言葉遣いしやがるなお前、まあいいや。それも個性ってやつだろ……う？」

不意に鎖から掛かる圧力が消えうせる。

視線を上げると、私の髪よりも濃く黒ずんだ飛沫が男の腕から噴出していた。

「がぁっぁぁぁあああ！！？？　な……なん、うがッ！？」

悲鳴を上げる口に力強い拳がめり込んで、男は無理矢理に沈黙させられる。

「……貴様ら、覚悟は出来ておるんじゃろうなっ！？」

白髪交じりの男が発した辺りを揺るがす声が合図だった。人身売買を取り締まる銀灰色の鎧を纏った兵が一斉になだれ込む。

ここから本当の、私にとっての運命の変革が始まった。

＊　＊　＊

「サキ、昨日は良く眠れたかの」

「サキ、今日の昼飯は美味かったの」

「サキ、よく出来たな。よしよし」

どれもが初めての言葉だった。

髪は櫛で梳かして手入れをするものだと知った。

服は重ねて着るものだと知った。

食事は日に三度もあることが普通なのだと知った。

眠る時は暖かいベッドを使うことを知った。

私の間違った常識を知る度に初老の男は悲しそうな顔をして、それから優しく本当のことを教えてくれた。

ラインハルトと名乗ったこの人は忙しい身でいつも仕事の道具を片手に歩き回っている程なのだが、館で私に会う度に立ち止まって声を掛けてきた。

「サキ、元気かの？」

「……はい、なの」

今思えば過去の自分を叱りつけたくなるが、当時の自分はまだラインハルト卿という人間を信用できないでいた。私が発した言葉は恐れに満ちてたどたどしく、擦れていた。何が原因でこの夢が醒めてしまうか解からないと考えていた。未だに残る体中の痣が呪いの様に私に囁いてきて、いつか酷いことをされるという確信に似た予感がどうしても消えなかったのだ。

そんな思いを抱いていた私がとうとうそれに耐えられなくなったある日、私は竜の洞窟に飛び込むような覚悟で仕事が欲しいと嘆願した。自分に出来ることならどんな事だってするからと必死だった。何か主の役に立つ事をしなければいつか酷い目に遭わされるという強迫観念を植え付けられていた私は、近くの森で薪を拾ってくるという役目を仰せつかって心底ホッとした。

「危険は無いはずじゃが、気をつけるんじゃぞ」

また初めての言葉をかけられてどう反応していいか困ってしまう。そんな私の心情を知ってか知らずか、私の頭を優しく撫でて主は外出していった。

＊　＊　＊

森の入り口には館から歩いて３０分程で到着した。そこには手頃な枝が一帯に転がっていたので作業はとても楽だった。私の腕はあっという間に薪で一杯になり、結局一時間ほどで頼まれた量を終えてしまった。

「あれ……もういいの、かな」

あまりに楽すぎて、これでは満足してもらえないのではないか、という不安が湧き上がってきた私は、もっと立派な成果を得ようと森の奥へと踏み込んでしまう。去り際に主から「決して森の奥に踏み込んではいけない」と注意されていたのに、成果を得ることに必死だった私はその禁を破ってしまったのだ。

果たして森の奥には薪の代わりに瑞々しい果物が沢山生っていた。これを持って帰れば許してもらえる、などと考えていた。冷静に考えれば許すも何もないのだけれど、私は染み付いた恐怖に突き動かされて夢中で果物を集めていた。そうして帰ろうとしたときに愕然とする。歩いてきたはずの道が何処にもなくなっていたのだ。

必死で帰り道を思い出そうとしても一向に解からない。ついには陽も落ちて途方にくれた私は、とうとうしゃがみ込んで顔を膝に埋めた。自分に残された選択肢は、夜が明けるのを待つ事しかなくなってしまったのだ。

「あ……あ……」

とんでもない事をしてしまったと蒼褪めた。自分の事などどうでもいいが、主が必要とした薪を届けることが出来なかったのだ。もう駄目だ、と思った。今までの分を取り戻すかのように恐ろしい罰を与えられるだろう。とうとう夢から醒める時が来たのだと、真剣

にそう思った。重厚な音で唸る鞭の音が、下種な笑いを浮かべながら拳を振るわれる感触が、打ち捨てられボロボロになった身体を自分で抱きしめながら必死に生きていた時の事が、私の頭の中に鮮やかすぎるほどくっきりと甦った。

「あ……うぁあああっ……」

どんな罰を与えられるのだろう。夢にも思い描けなかった今の生活の中で少しずつ小さくなってきていた火種の燻りだったものが、一気に燃え上がるように私の思考を全て多い尽くして――

「おお、ここにおったか。心配したぞ」

――だから、このとき聞いた言葉を、私はとても現実とは思えなかった。

「大丈夫かの？　おお、こんなに体が冷えて……寒かったじゃろう？」

私の小さな体をすっぽりと覆うように抱き寄せて暖めてくれたその温度が、どれだけ私を変えたのか。それはとても言い表す事なんて出来ないだろう。

「おお、おお。もう大丈夫じゃよ。大丈夫じゃからな」

目が痛い。頬が熱い。喉が震える。不意にぽろっと飛び出た涙がまるで今まで感情に蓋をしていた物だったかのように、言い表せな

い気持ちが後から後から溢れて止まらなくなってしまった。

ぽろぽろぽろぽろ。

「よしよし。大丈夫じゃ。大丈夫じゃからな。」

ひくっ、と喉が引きつる。止まらない。止められない。

「――っく。ぁっ。ぅぁあ――」

もう一度ぎゅっと強く抱きしめてくれた主様の腕の中で、私は生まれて初めて声の出るままに泣いていた。私という人間はこの時に生まれたのだと、今でもそう思っている。

＊　＊　＊

主様は、本当に優しい。

「サキの髪も目も鮮やかな紅色じゃな。紅は命の色じゃ。確かに珍しいが決して不吉な色ではないぞ、わしの好きな色でもあるしの」

「背の低さを気にしておるのか？　わしは可愛らしくて好きじゃがの」

「生まれが卑しい？　誰じゃいそんな事を言いおった間抜けは。わしが成敗してくれる」

こんな風に私の嫌いなモノ一つ一つを、上から力強く塗り替えて

くれた。中でも私の心に響いたのはこんな言葉だった。

「サキは東方の生まれかの？　その言葉遣いは遥か東に住む刀使いの特徴によく似ていての。誇り高く目の覚めるような剣技の使い手が数多く生まれておる有名な国なんじゃよ」

未だに抜けきらなかった“なの”という癖。私にとって悪夢への引き金だったそれを主は誇れと教えてくれた。自分が言葉を口にするたびに嫌でも思い出してしまう悪夢を、私の主が塗りつぶしてくれたのだ。

「刀使い、……なの？」

そして、主様の何気ない言葉が切っ掛けで私は剣を習うことを決めた。主様は最初良い顔をしなかったが、私の気持ちは変わらなかった。修行を続けて剣技を修め、目の前のこの人を命ある限り守ろう。それは唐突に浮んだ考えだったが、私はその為に生きてきたのだとすら思える程、思いは強くなる一方だった。

苛烈を極めると脅されて入門した道場の修業だけれど、私には何が大変なのかよく解からなかった。同門の皆が悲鳴を上げる荒行の数々も真剣を用いた手合わせも、自分の過去と比べれば遊びに等しいとすら感じた。

とても幸運だった事に、私には剣の才能が備わっていたらしい。師範に「動体視力と反応速度は誰よりも優れている」と評された私は、剣を始めて一年余りで道場の誰よりも強くなっていた。

その頃から少しずつ主様の仕事を手伝わせてもらえるようになった。がむしゃらに務めを果たし続けた私は、気がつけば主様の護衛

として筆頭に立っていた。朧姫を貸し与えられたのはその頃で、それを使いこなす為に私はまた修行に明け暮れた。

主様は私が剣を持つことに不安を感じていたらしいが、それでも私が務めを果たす度に褒めてくれた。それが嬉しかった。

私が傷を負うと主様はとても悲しい顔をした。それが悲しかった。

だから、私は何処までも強くなろうとした。主様を守りたいという思いは絶対に消えない。でも悲しい思いもさせたくない。全てを満たす為には、私は強くなるしかなかった。

がむしゃらに強さを求めた私は、やがて人々から賞賛されるような成果を何度もあげた。そんな私が王の目に留まり、ある日王直属の護衛兵にならないかと誘われた。誰から見ても破格の待遇で、十人が十人とも選ぶだろうその道を、私は断った。

当たり前の事だ。

私にとっての第一は主様を守ることであり、全てにおいて優先されるべき大切な決意だ。私の力は、私に生を与えてくれた主様に捧げよう。何があっても、例え命に代えてでも守りぬこうと、そう決めたから。それはずっと続く、私の存在意義をかけた誓いなのだから。

＊　＊　＊

サキが行く手に立つリアを正面から見据える。じっと何かを語るような目で対峙したまま、どれくらいの時間が経ったのだろう。

「国の人たち皆を困らせる様な事をして、許されるとは思わないの。ううん、主様もきっとそんなこと許してくれないと思う、なの」

「だったら、ね、サキちゃん。私も――」

「でも、このまま治せなかったら、主様はどうなる、なの」

もしもこのままじいさんの眼を覚ます事が出来なかったら？　ずっとこのまま現状維持なのか、いつかは目を覚ますのか、それとも。

答えは、リアの表情（かお）で解かってしまった。

部屋を飛び出したサキが、慌てて駆け寄ったリアの腕をすり抜けて外に出る。追って外へ出た俺達の視界が辛うじて捕えたサキの姿は、来た時と同じく光を纏って空の彼方にあった。

これからどうするべきなのだろう。今にも泣きだしてしまいそうだったあいつの顔を見て、俺は判らなくなってしまった。

15．宝玉の間・1

ハイグレイ王城の後方に広がる森は、神聖な森だと教えられる。この国を守る神様がそこに居るからみだりに入ってはいけないと、子供の頃から口煩く教えられる。

ひっそりと広がるそこには何もない。美しい花も、甘い実をつける木も、日々の糧になる動物も何もない。虫すら禄に見かけない。

誰からも見向きされない只あるだけの森だが、その周囲は国に厳重に監視されている。深く立ち入るほど凶悪になる罠が至るところに張り巡らされ、森の周囲は常に交代で見回りが立つ。ただ、見回りの兵士ですら何故その森を守る必要があるのかを知らない。そして何故か誰もその事に疑問を持ったりしない。

サキはラインハルトの腹心として一度だけ案内されたことがある。万一の時は何を差し置いても、例え王を見殺しにしてでもこの神殿を死守せよと教えられた。

この場所の存在はごくごく一部の人間しか知らないので決して口外してはならない、とも教えられた。そう教えたラインハルトが見たことが無いほど厳しい表情をしていたのを、サキは良く覚えている。

入り口は小さい。知らなければ只の岩の集まりにしか見えないその隙間に体を潜り込ませると、中には驚くほど広い空間が待っている。長く伸びた天然の通路には仄かな明かりがポツポツと並んで辺りを薄暗く照らしていた。

「……。」

サキの目が訝しげに動く。入り口から近いこの通路には蜘蛛の糸のような細さの封がされているはずだった。それを切れば仕掛けが発動し、侵入者を更なる地下奥深くに叩き落し、そのまま朽ち果てるまで封印してしまう筈だ。しかし床に罠が発動した形跡は無く、ただ糸が切れている。

（誰かが先に侵入している？　罠を解除して？）

サキはそう考えたところで、あの忌々しい金髪の男が何やら楽しげに吐いていた言葉を思い出した。

サキの思考が一気にして沸騰する。駆け出したくなる衝動そのままに足を動かそうとしたが、グッと歯を噛み締めてそれを耐えた。

（……ダメだ。落ち着け）

背中に感じる壁にぴたりと身を寄せ、息を吸う。一瞬止める。ゆっくりと時間をかけてそれを吐き出す。

もう一度。

息を吸う。サキは落ち着けと自らに言い聞かせながら、細心の注意を払って息を吐いた。

まるで存在を消してしまうかのように息を潜める。目蓋の瞬きすら聞こえてしまいそうなこの無音の空間は、王ですら勝手に立ち入る事が許されない場所なのだ。サキがここに存在する理由なんてど

れだけ探しても見つからない。

ゆえに、バレたらそこまで。

サキの過ちは、すなわちラインハルトその人の過失となる。いくら「自分が勝手にやったこと」だと主張した所で、主が責任を問われる事は避けられない。絶対に、絶対に失敗など許されない。

一瞬ごとに血を巡らせる鼓動の音がうるさい。じわりと滲んだ汗を拭った。愛刀を握る手が肝心な時に滑らないように、そっと握りなおす。ただの兵士の見張りならばここまでの緊張などしない。ここの守護者は、人間ではないのだ。

サキの耳と肌が相手の気配を捉えた。圧倒的な威圧感を受けて勝手に震えだそうとする体を押さえ込み、気配を殺す。

（大丈夫、まだバレていない）

強すぎる気配ゆえに感じ取ることは容易だった。歪な十字に伸びる薄暗い通路の奥で、そいつが周囲に目を光らせているのが手に取るように解かる。きょろきょろと首を左右に振った守護者が後ろを向いたところで、サキはそっと壁の隙間から姿を確認した。

深紅の翼を持つ偉大なる竜族――レッドドラゴンだ。

その口から放たれる業火を受けて、形を留めていられるモノなど存在しないだろう。

宝玉が守護者に護られているという噂は聞いたことがある。しかしそれは御伽噺であり、今時子供ですら話半分にしか聞いていない

ような他愛も無い作り話でしかないと、サキは今の今まで思っていた。

それが本当のことで、しかもその守護者が竜族だったなんて。

ドラゴン種は極めて希少な存在だ。冒険者と呼ばれる人々が一生に一度その姿を目に出来るかどうかというレベルであり、それが叶ったならばとてつもない幸運だという。

（私は今とんでもなく不幸だけれど）

目指す宝玉はすぐ近くにある筈なのに、幸運のそれが邪魔をする。とんだ幸運のシンボルだ、と愚痴った後でやっぱりそれは間違っていないのだろうな、と情けなくサキは笑った。私欲の為に宝玉を壊そうとする行為は誰が考えても悪なのだから。

今ならまだ引き返せるかもしれない。ここを諦め、血眼になって他の方法を見出す方が良いのかもしれない。仮にこの宝玉を首尾よく手に入れたとして、その後に待つものは主との永遠の別離に他ならない。取り返しのつかない大罪を犯した人間が傍にいられる理由など無いのだから。

でも、他の方法を探していたのでは間に合わないとサキ自身が反論する。主の容態を考えると残りの時間は恐らく数日もない。そしてその間に代替案が浮ぶとはとても思えない。

主を守る事こそが全て。それはあの日からずっと変わらぬ誓いだ。例え世界中から非難されようと構わない。絶対に主様を救ってみせる――サキは握りすぎて白くなった手をさすり、感覚を確かめた。

グルルルル……

――底冷えするような低いひと鳴きを残して、重苦しい足音を残しながら気配が遠ざかってゆく。もう一度手の感触を確かめながらその姿を見送った。

（……アレを倒すのはまず無理と考えたほうがいい）

なんとかやり過ごし、隙を突いて目的を達成するしかない。サキはここを諦め他のルートを探そうと一歩を慎重に踏み出した。

うわあああああああ！！

耳に痛いほど響いた叫び声に身を竦ませたのは、丁度そのときだった。

＊　＊　＊

（ん……う……？）

唐突に目を覚まして辺りをぼんやりと見回していたグレイスが「何かおかしい」と考えたのは、妙に視界が暗いからだった。今はまだ日中の筈なのにどうしてこんなに薄暗いのだろう。そう考えた王は近くに控えているはずの侍女に声を掛ける。しかし返事は一向に返ってこない。

「マリン？　何処に――」

「わっ！！」

「うわあああああああ！！」

突然背後から声がして、こんなに動くのかと驚くほど心臓が跳ねて絶叫が木霊する。反射的に背後を振り向いた視線の先で、金髪の男がケタケタと腹を抱えて笑っていた。

「な、な……」

「やあ、やっと目が覚めたかい？」

「ふざけるな！　私を誰だと知ってのことか！？」

「知ってるよ。最近即位したばかりの、蛙に操られていたお飾りだってコトもね」

闇目の少年が唇を歪めて笑っている。たったそれだけの仕草に何故か心臓を掴まれる様な悪寒を感じて、グレイスは一歩後退した。

「まあまあ、そんなに怖がらないでよ。言うことさえ聞いてくれたら命なんて取らないからさ。ね？　ほら笑ってよ？」

男の不可解な言葉に不快感が一層強くなる。少しも笑う気になどなれず、笑うのは恐怖に震える膝だけだ。グレイスはそれでも恐れを意地だけで押さえ込んで、状況を確認しようと周りを見渡した。

そして、ここが何処なのかを理解して愕然とする。

「ここは……ここは宝玉の間ではないか！　貴様、何故こんな所に！？」

「うん、その宝玉をいただきに参りました」

――あまりに平然とした口調で返されて、グレイスはぽかんと口を開けてしまった。

（どうして僕もコイツもこんな所にいる？　今まで僕は何をしていたんだ？　闘技場で何かをやろうとしていた気がするけれど……闘技場？　僕はどうしてそんな場所に……）

グレイスの思考は混乱するばかりで一つの仮説にすら辿り着けない。何故か苦しくなるほどの胸騒ぎが収まらず、白い顔を青くしてごくりとツバを飲み込んだ。

「混乱している所悪いんだけどさ、そろそろコレ開放してくれない？」

少しも焦っていない口ぶりで急かしてくる相手の目は、絶対的な優位に立つ者そのものだ。だけど、だからといってハイそうですかと頷いて良いワケがない。

「馬鹿な事を！　これを失った国は遠からず滅びの地になる。誰にも渡す訳にいかないのは当然だ！」

「知ってるよ。でも君の国がどうなろうとも、そんなコトはどうでも良いじゃないか」

「ふざけるな！　話にならない、即刻ここから立ち去れ！！」

「そっか、うーん残念だなぁ」

少しも残念がっているように見えない気配で「仕方がないなあ」と男はグレイスに歩み寄ろうとする。反射的に後ずさった姿が可笑しいのか、くっく、と金の髪を揺らした。

「平和的に話し合いで解決するように言われているんだ。もう一度だけチャンスをあげるからさ。――早くしなよ？」

（気圧されている事を相手に悟られてはダメだ。例えハッタリを使おうとも、弱みを見せたらお終いだ）

そう口煩く自分に教えた教育係を思い出す。ラインハルト――彼ならこの局面を如何にして切り抜けるだろう、と。

（――そうだ、宝玉の守護竜は何処にいる？）

誰彼構わず襲い掛かる凶悪な赤竜だがこの状況なら贅沢も言っていられない。上手くけしかけられたらどんな相手だって――

「無駄だと言っているのに、どうして解らないの？」

必死に頭を動かしていたグレイスが闇色の目を見た途端、動きが止まる。

彼の記憶が続いているのはここまでだった。

＊　＊　＊

「あーあ、やっちゃった。だって仕方無いよね、この子強情なんだもん」

光を失った瞳を覗き込みながら男はつまらなそうに鼻を鳴らした。

「ま、いいか。意識を奪っただけで変な痕跡は残らないし。許容範囲内だよね。……ったく、サクッとヤっちゃえば簡単なのにさ」

サキがようやくその場に辿り付いたのは、あの男が宝玉を台座から取り上げようとしていた時だった。厳重に封印されているはずのそれを難なく拾い上げた男は、白く輝く球状の宝物を満足そうに眺めて「さて」と呟いた。

「――そこのキミ。何か用かな？」

反射的にサキの体に緊張が走る。

（気配は消えているはず、なのに）

「そんな熱い視線を無視できるほどボクは鈍感じゃないんでね。隠れていないで出ておいでよ？」

「……ふん」

もとよりコイツから逃げるつもりは毛ほども無い。サキは一瞬だ

け目を瞑り、意識を戦闘用に塗り替えた。

「じょーとー、なの」

キッチリ決着をつけてやる。

そんな決意を胸に鍔を親指で弾いて、サキは舞台へと降り立った。

16．宝玉の間・2

初撃はナイフのような武器に防がれた。それがただのナイフでない事は、愛刀が貫通しなかった事からも明白だ。少なくとも何らかの祝福を受けたマジックアイテムの類でなければ、そのナイフごと相手を刈り取るはずだった。

数個の蜀台のみが闇を照らすこの薄暗い空間で、相手をはっきりと見定める事は困難だ。受けに回るよりも攻めきった方が有利に傾くと判断したサキは、受け止められた反動をものともせずに二撃目を放つ。

キィ……ン、と澄み切った音を残しながら双方の刃が影を残して踊る。リーチで勝るサキと手数で上回る相手の攻防は互角の状況が続いた。

「驚いたよ」

ひとつ大きな金属音を残して男が後退る。サキとの打ち合いで傷んだナイフをくるりと回したかと思うと、まるで手品のように無傷のナイフが現れた。

「こんな使い手がまだ居たんだね、ここのセキュリティも満更穴だらけじゃ無いらしい」

どうやらサキのことを警護の人間だと勘違いしているようだが、正してやる義理などない。早くケリをつけないと、本当の守護者に見つかってしまうのはまずい。非常にまずい。

「――うん？」

攻防の最中、２人よりも背の高い蜀台越しに対面した。普通はそれを避けて剣筋を走らせる。しかし、サキが持つ神刀にとってそれは障害にならない。眼の錯覚かと思わせるほどの一瞬刀身が掻き消え、蜀台をすり抜けた刃が相手の死角を突く。男の笑みが初めて驚きに変わった。

（よし、利き腕を奪った！）

ポタッ……ポタッ。

「……え」

驚きに眼を見張ったのは、サキも同じ。

虚を突いた筈だったが浅かった。驚嘆すべき反応速度だが、問題はそこじゃない。刃が微かに捕えた腕から鮮血が流れている。人間には当たらないはずの朧姫が腕を裂いたのだ。

（つまり、こいつは。）

「……ク、ククク」

モンスター、にしてはあまりにも人間に酷似している。

相手の正体について思い巡らせていたサキに冷たい汗が浮かぶ。金の頭髪と闇のように暗い瞳、人に比べやや小さい耳を持つ姿は、太古に絶滅した筈の伝説の存在と余りにも似ていたのだ。

「鬼……鬼族、なの」

返事をしない相手はぺろりと自らの鮮血を舐め取り、ニィッと笑った。

「――？　……っ！？」

不気味な笑みに眉を寄せるよりも早く、サキの体に異変が生じる。

「……な、どうなっている、の」

何が起きたのか理解できなかった。何もされていない筈なのに体が重い。見えない何かに急速に自由を奪われている。

（こんなの、まるで呪い――呪い？）

「ま、さか」

まるで水中に放り込まれたようだった。サキにとって周りのスピードが倍に感じる程に動きを封じられた今、相手の動きは絶望的なまでに速かった。防ぐよりも速く鬼の手がサキの首を鷲掴む。

「っぐ！　……！！」

コイツは本当に、ただ相手を睨むだけで術を完成させるのか。

それ以外の可能性が、幾ら考えても思いつかない。普通は大なり小なり何かアクションをしなければ魔術だろうと呪いだろうと成立しないはずなのに――

グッ……

掴まれたサキの体が徐々に上へと吊られてゆく。伸びきった脚が苦しげにもがく様を鬼がせせら笑い、鋭く伸びた牙が口から覗いた。

「……っ……ぐぅっ！」

「苦しいかい？　苦しいだろう？　今楽にしてあげるからね？」

相手の右手に持つナイフが不吉に光る。

狂気を宿した闇色の瞳で覗かれると、まるで心を直接踏みにじられるような酷くおぞましい錯覚に襲われる。頚動脈を圧迫され続けるサキの握力が徐々に失われてゆき、柄を握る手が震えだした。

「ぐ……ぅあああああっ！」

それでもサキは必死に掻き集めた力で刀を振った。掴まれた腕を狙った刃はあまりにもトロい速度だったけれど、なんとか首は解放された。

クラリとする意識を無理矢理取り戻す。呼吸の度に血の巡りが戻ってゆく。掴まれた喉が焼けるように痛くなっていた。

「ゲホッ、ッハ、はぁっ、はぁっ……！？」

空気を求めるサキの腹に爪先がめり込む。

悲鳴すら上げる間も無く、サキは数メートル背後の壁に叩きつけ

られた。

「こんなモノじゃ済まなさない……さあ、立ちなよ」

「……く……ぅ」

（――強い。）

近接戦闘においても互角、さらにあの呪いのような能力は厄介どころの話ではない。相手を見るだけで術を完成させるなんて非常識も甚だしいが、そんな反則技も鬼族なら有り得る話だ。実在自体が疑わしい魔眼の類も、鬼という伝説の存在なら持っていても不思議ではない。

（本当に、不幸だ。）

ドラゴンをやり過ごしたかと思えば鬼が居た、なんて三流以下のひどいストーリだ。

「……ひとつ、聞きたい、なの」

この状況を打破する手段を、サキは一つしか持っていない。それを実行する前に、どうしても確かめておかなければならない事があった。

サキが問う。極力冷静に努めた声色は、怒りが滲むのを隠せなかった。目の前の相手をどうしても許せそうになかったから。

「……無理だね。もうあのジジイは助からないよ。本当さ、零れた水が二度と返らないのと同じようにね」

果たして得た回答は最悪だったけれど、その言葉に安心感を得たのも事実だった。

「そう……わかった、なの」

何故なら、これで心置き無く戦えるから。

不倶戴天の敵というべきコイツを、許さずに済むから。

（今はただ、コイツを、倒す。）

サキは体を沈み込ませるようにして、ゆっくりと構えを変えた。

＊　＊　＊

呼と吸。人は息を吸って吐く。全ての人間が行うこの動作は、やり方によって身体に多大な影響を与える。”呼吸法”と呼ばれるその技術は一般人の生活の中にも存在し、例えば痛みを和らげる効果などは良く知られているが、身体の機能を一時的に活性化させる方法も存在する。

その効果の程は微々たるものに過ぎないのだが、ある物と併用するとその効果が爆発的に跳ね上がる事は、あまり知られていない。

それは体内を常に巡っているもので、サキは”気”と呼んでいる。

錬度によるが、気を併用する事により呼吸法は一気にその威力を増す。高めれば高めるほどにまだ先が有り、どこまでも強化できるように思えるほどだ。

今、サキの身体は目の前の鬼によって動きを半分程に封じられている。解除法は解からない。仮に解かったとしても本当に相手が睨むだけで発動する能力ならば、すぐさま同じ目に遭わされる。この状態をひっくり返す方法は一つしかない。

そう、身体をそれ以上に強化してやれば良いだけの話だ。呪いを跳ね返せるほどに。

「……ッ、ッ……」

微かに漏れ響く吐息の間隔が短くなってゆく。サキを囲む空気が歪んで見えるようになる。まだだ、まだ足りない。強化の度合いは”段”で数えるのだが、今までに実戦で経験した強化限界は参段(さん)まで。

恐らく今必要な段数は――最低でも伍(ご)。

肆(し)段以上をまだ試した事がないのは、肉体の限界を超えた途端に体内に収まり切らない力が激痛を引き起こすからだ。限界を超えた途端に襲い掛かる激痛は耐えがたい苦痛だった。

（けれど、例え身体が壊れたって構わない。私の大切な人を傷つけられた、その痛みに比べたら大した事じゃない）

目の前の敵を、絶対に許さない。

必ず主様を救ってみせる。

その決意が力となってサキの体内に宿ってゆく。

「ッ……」

肆段。時の速さがマイナスからプラスに転じた。

痛い。

手も腕も胴体も脚も関係なく全部が痛い。体中が一斉に悲鳴をあげている。気を抜けばすぐにでも気絶してしまいそうだ。

それでも止める訳にはいかない。

歯を食いしばる。余計な事は何も考えるな。

（アイツを倒す。アイツを倒す。アイツをぶっ倒す！）

最後に大きく吸い込んで、気合と共に一気に吐き出す！！

「カクゴしやがれっ、なのッ！！！」

伍の段に到達した身体が、踏み出した足が、痛みに絶叫するのを黙殺して敵の傍まで一足で跳ぶ。地脈を縮めるが如くの速度は完全

に相手知覚を凌駕した。

相手の動きが突然跳ね上がれば対応も当然遅れる。短剣で防ぐより早く自らの体をつき抜けた刃を見て、恐怖に顔を歪める鬼の様を、サキには確認する余裕があった。

「なん……だって……」

何の躊躇もなく赤銀が胴体から抜けた。

サキが手にする神刀のもう一つの名は”赤羽根（あかはね）”。その異名が示すように噴出した鮮血が羽根のように辺りに舞い、周囲を赤く染めた。

何の手応えも感じなくなっているサキの腕が刃の血を振り払い、微かな水音が静寂の中に生まれて、また静かになる。鬼の体がゆっくりと、ゆっくりと沈んでゆく。

「バ、カな。こんな、」

ことり、と地面に音をたてて転がった宝玉をサキが拾う。

主の命ともいうべきそれを両手でそっと包む。

まるで放心したようにじっと見詰めたまま、サキは強く強く宝物を握りしめた。

「せ……て。破……しない……と……」

だからサキには聞こえていない。限界を超えて全てを運動能力強化に充てたツケは聴覚にまで障害をもたらし、さらにこれで終わったという油断が、泣きたくなるほどホッとした心理が、この後とるべき行動を遅らせた。

「消え……諸とも……終わ……」

鬼の体が地面に染み込むように、呪詛を残して消えてゆく。

仰向けの唇が微かに動いても、もう声は出ない。

「……ッ」

サキの身体が揺れを感じた。絶望のリズムを刻む足音の主がここに向かっている。何よりも恐れていた守護者が、罪人を裁きに来たのだ。

ニィッ

相手を陥れたことに満足した、狂った笑みを浮かべながら、最後まで残っていた唇は溶けるように消えていった。

16．宝玉の間・2（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

続きは明日、大体昼前後には更新できるようにがんばります。

17．結末（前書き）

今回は前半に残酷描写があります。苦手な方はご注意ください。

17．結末

咆哮は、唯一の出口のすぐ向こうにまで迫っていた。

出口はひとつ。正面から戦って勝てる相手だとは到底思えない。まださっきの鬼のほうが可愛く思える程に、サキは壁越しのプレッシャーを感じていた。戦おうにも擦り切れた雑巾のような体はもう満足に動かない。逃げる道も無い。隠れる所なんてあるわけ無いけれど、それでも探す。

（もう少しでゴールなのに。もう少しで、主様が助かるというのに――）

――グオオオアアアアアア！！！！！！！

サキの胴より何倍も太い四肢で地面を揺らしながら、火竜が姿を表した。

足が、竦む。

剣を取ってから今まで、どんな相手にも恐怖を感じなかったのに。サキの歯がカチカチと乾いた音を立てる。

「あ……う……」

守護者が罪人を裁きに来たのだ。

真紅の鱗を持つ巨竜がサキの姿を認め、凄まじい怒気を叩きつけてくる。

サキの顔ほどもある目玉が凝視しているのは、手にした宝玉。

刀身が情けなく震える。全身が疲労と激痛でまともに動かない。

「ぐッ」

出口は守護者の背後にのみ。

手にした宝玉を隠すように胸に抱き、激痛を噛み殺してサキが駆ける。

（主様の命は、もう残り少ない。絶対にこの宝玉の力が必要――）

――ガアアアアアアアッ！！！！！！

薄暗かった空間が眩い白色で染まる。突如膨れ上がったとんでもない熱量が全身に襲い掛かる。サキの体が意識から離れてのたうち回った。

「――――――――――っ！！！」

直撃したら骨も残らないような炎が目の前で炸裂したのだ。人の形が保たれているだけでも驚きだったのだろう。竜がそのぎょろっとした目を不満げに細め、巨体をゆっくりとサキに向かって進めた。

ヒッ……ヒッ……ヒッ……

喉を焼かれ、奇妙な音にも聞こえる苦悶の声は、サキ自身にももう聞こえていない。

うつ伏せに倒れこんだまま、宝玉を守るように握り締めた。

「――が―、―の」

右の手が地面の石畳に爪を立てる。

「お―がい、だ――」

体を起こそうとして、力を入れた左腕が動かない。

「おねが―、だから、主―を、助――、わたし―、どう――――、いい――」

色が失われたサキの視界に映る守護者が、獲物を冷徹に睨みつける。縋るように口にした言葉を聞き入れる筈も無く、その巨体は止まらない。

悪夢のように巨大な足が、サキの体に圧し掛かった。

「が、ぁあああああああああッ」

跳ねた手からことり、と宝玉が転がり出てしまう。必死に手を伸ばしても届かない所にまで行ってしまった。

（――死ぬ。ここで終わってしまったら、何よりも大切な人が、死

んでしまう）

「だめ……なのっ」

ギッと噛み締めた口から鮮血が流れる。ぽろぽろと涙を流しながら、必死に巨大な足から逃れようと足掻く。

「――けて。――――、誰――、――け……て」

――グアアアアアアアアッ！！！！！！！！！

ふと、サキが体に感じていた絶望的な戒めが消失した。直後に巨体が地面を揺るがす音がして、パラパラと小石が辺りに降り注いだ。

「……トカゲ相手に、こんなにもムカついたのは初めてだ」

霞む視線の先に、別れたはずの人物が居た。酷く傷ついた体を抱き起こし、不機嫌そうな顔でサキを見つめていた。

「――――、――？」

「いい。ちょっと大人しくしてろよ」

魔王がそっと眼前に手をかざすと、そのままサキの意識は彼方へと沈んでいった。

＊　＊　＊

「だいじょぶです。あとは安静にしていれば数日で回復するはずです」

リアは心底ホッとした顔でサキの体に毛布をかけた。あの後すぐこの隠れ家に戻ってきた俺は何もやっていないように見えたかもしれないが、とにかく疲れている。

ああ、まったく。コイツらと一緒だとトラブルが大挙して押し寄せてくるのは絶対に気のせいじゃない、と声を大にして言うが誰も聴いちゃいない。

「なんでドラゴンなんかと戦わなくちゃならなかったんだ。ったく……」

酷い目に遭った。レッドドラゴンなんて久しぶりに見た。耐久力がハンパない相手なのでやり過ごそうと思ったのに、良く見たらサキが足元に居たのだ。何であんなのが居たのか良く解らないけど、俺が不幸だったという事は間違いない。

「きっと宝玉を守ってる守護者だったんですよ。それにしても大変そうでしたね～」

「そう思うんならお前も手伝えよ!?　何であんな厄介なのと俺一人で遊ばなくちゃならないんだよ!!」

見てみろよホラ此処、と有り得ない火力で焦がされた服の端をプラプラさせて見せてもちっともリアには効果がないので諦めるしかない、というか泣き寝入りに近い。

まあ、リアはじいさんの看病をずっと続けていたから仕方ないんだけどさ。

「それで何処に飛ばしちゃったんですか？　サキちゃんをこんな酷い目に合わせたんですから、ちゃんとお仕置きしたんですよね？」

「あのトカゲ、そんな遠くに飛ばされるほど軟な体してねえっつーの」

ムカムカした感情を込めた右ストレートをあの竜にブチ込んで、通路から強制的に退かしたに過ぎない。まともに相手してたら冗談抜きで決着前に日が暮れる。その間サキを放置する訳にもいかないだろ？

恐らくあの地下神殿の端辺りで目を回している筈だけど、もう二度と行く予定は無いからどーでも良い。ツノ折っておいたし。

目の前で横たわるサキが大事そうに握り締めている宝玉が、光を反射した。眠っているにも関わらず、まるで硬直したように握って離さないので、そのままにしてある。

くー、と息を立てて眠るその姿は平和そのものだが、体はリアが

悲鳴を上げる程ボロボロだった。

「ったく、無茶しやがって」

サキが誰と戦っていたのか、おおよその予想はつく。

じいさんを助けるためにドラゴンとまで戦っているとは思わなかったけど。

ついでに言うと、何故か柱の影に転がっていたオマケも想定外だった。

「なあリア、あの子供はどうなってる？」

思い切り無視しても良かったのだが、発見してしまったので仕方なくサキと一緒に運んだ人物はグレイス？世。少し前まで闘技場で偉そうにしていた子供だ。

「誰が子供だ無礼者」

「なんだ生きてたのか」

少し前に意識を取り戻していたグレイスが、小憎らしい視線を向けながら部屋に入ってきた。リアの治療が一段落したらしい。

「ふん、大体の事情はリア殿に聞いたよ。僕がじいを……ラインハルトを処刑しようとしていたと聞かされたときは驚いたけどさ」

その姿はやっぱり小さいけれど、グレイスが見せた表情は前までのイメージと随分違う。本当に辛そうに目を伏せるその姿は、自分

の事だけを考えて喚き散らす子供とは別人のように思えた。何か変なモノでも食べたんだろうか。

「あの男は、サキが？」

「金髪ヤローのことを言っているのなら、本当のところは俺も知らん。サキに後で聞いたらいい。俺が見たのは馬鹿でかい火竜だけだ」

俺がその場に到着した時にはもうヤツの姿は見えず、サキは竜の下敷きになっていた。だから今は想像するしかないけれど、サキの状態を見る限り、かなり激しいやりとりがあったんだろう。

グレイスは一つ大きな息を吐いて、目を瞑った。

「やっぱさ、僕の責任なんだろうね」

俯き加減で呟くグレイス。何が？　と尋ねるとしぼんだ声色が続いた。

「じいやサキがこんな目に遭ったことだよ。僕がもっとしっかりしていればと思うと情けないよ。……それで、じいを救うには宝玉（それ）が必要なんだ？」

「ええそうなんです。でも――」

「いいよ」

何でもないように言い切られたせいで、理解するまで大分時間が掛かった。理解しても意味がわからなかったけど。

「いろいろ小言ばかりでうるさいヤツだけど、居なかったら物足りないしね」

「でも、それでは宝玉が」

「さっきリア殿はこの宝玉を壊して使うって言っていたけれど、それ間違いだから。僕なら壊す必要なんて無いからね。今のじいを治す程度の奇跡なら、宝玉に影響があってもせいぜい暫く国に渡る息吹が微減するくらいだと思う。リア殿が進行を食い止めていてくれたお陰だよ、ありがとう」

「「え？」」

ハモッた。

「僕は“語り部”だからね」

まるで悪戯に成功したような得意気な顔をして、グレイスは笑ったのだった。

17．結末（後書き）

次話で一章完結になります。
明日の昼頃までに投稿したいとおもいます。

18.「終わりだ終わり。もう次へ行こうぜ」

瞼をゆっくりと開いたじいさんに飛びつくように抱きついたサキは、まだ回復しきっていない体も手伝って、腕の中ですぐに眠りに落ちてしまった。全ての緊張が解けたお陰か、その寝顔は先程までと違ってとても柔らかなものになっていた。

少し照れた風に「ほっほ」と笑って大切そうにサキの頭を撫でるじいさんは、事情を知って驚いた様子だったけれど、皆が無事だったことが何よりだと喜んでいた。

暫くして落ち着いた面々を前に、グレイスとじいさんは「是非御礼がしたい」と城に俺達を招待してくれた。結果的に国を救ったことになってるらしい俺達に、王様からお褒めの言葉や褒美を頂戴する話が持ちあがったらしい。けれど堅苦しいのは嫌いだし肝心なところで何もしていなかったので、辞退した。

結局は立場上断れないサキだけが盛大に祭り上げられ、そのことで文句を言われたのは、まあ余談だろう。

＊　＊　＊

「サキちゃんには深く考えないで、って言われたんですけど……」

サキを称える式典の歓声が微かに聞こえる城の片隅で、リアは困

った風に笑った。

さっきから浮かない表情をしているのは、ずっと考え事をしていたせいらしい。

「結局、私はどうすれば良かったんでしょうか」

そう俺に問いかけたリアは、懺悔するように目を伏せた。

あの時リアは多くの人を守ることを選択し、サキは一人を守ることを選択した。

どちらも己が正しいと信じ、どちらも譲れない両者。双方が満足する手段が存在せず、必ずどちらかに身を置くしかない時、傍観を許されない勇者が取るべき正解は何なのか。

リアは「いくら考えても解からないんです」と呟いた。

「レオンさんが私の立場だったら、どうしましたか？」

もしもグレイスが語り部じゃなかったら、なんて仮定の話で思い悩んでいたらしい。

魔王に勇者の教育が勤まるとも思えないけれど、リアが余りに思い詰めた表情をしているので、話に付き合ってやることにした。

例えばさ、と前置きする。

「もし、グレイスがじいさんを助ける事が出来なかったなら。宝玉をぶっ壊すしか道がないのだとしたら、サキはそうしただろう。お前はそれを黙って見ていられたか？」

「……ううん、なんとしても止めようとした、と思います」

「サキが悲しむとか、じいさんが助からないとか解かっていて、それでもお前はサキを止めようとした。この国の連中を守りたいと思ってそう決めた。そうだろ？」

「……そう、です」

「それはお前の中にある価値観がそうさせたんだろ？　同じくらい大切だとしても、お前はほんのちょっとだけ平和を守る側に傾いていたんだよ」

「……。」

「サキだって同じなんじゃないか？　国の連中が困る事も、ひょっとしたらじいさんにまで怒られる可能性もあると解かっていて、それでもじいさんを救う為に宝玉を壊すという道を選んだのは、そっち側に傾いていただけなんだと思う。ここまではいいか？」

「はい。でも私には、どちらが正しいのか解からないんです」

どちらかが善、という考え方は魔物という解かりやすい敵としか戦っていない勇者だからなのかもしれない。

「お互い様なんだよ。サキも言っていたんだろ？　深く考えるなって。どっちが良いとか悪いとか、立場が変わればどんなものだって解釈は全然変わるだろ。だから、自分が正しいと思うほうに進むのが正解だと思う」

「自分が正しいと思うほう、ですか？」

「そう。だからお前の質問に対する俺の答えはリアの信じた道、つまりサキをぶん殴って止める、だろうな」

「わ、わたしそんな事しませんよっ」

まあ、とにかくだ。完全な答えがない問題にいくら突っかかっても袋小路に迷い込むだけ。リアは勇者だからか自分よりも”正義”ってやつに拘る節がある。だから今回みたいな場合はどこまで考えても答えなんて出ないだろう。

「でもっ、それじゃ絶対にどちらかが悲しい思いをしますよね」

うん。俺が言った答はそういうことになる。そしてリアが求めた答えは、きっとどちらもがハッピーエンドを迎えられる選択肢なんだろう。欲張りなヤツだ。

「なら、お前がもっと凄いヤツになるしかないよな。今回の場合、宝玉に頼らずじいさんを治せたなら、それで終わった話なんだ。そう考えると簡単だろ？」

どんな無理難題にも手を差し伸べられるようになるなんて、俺にはとても出来る気がしないけどさ。お前がなろうとしているのは人間が崇める神みたいなものだし。

「……誰かを助けるって、難しいですね」

「そんな悩むなって。じいさんもお宝も無事だったんだからそれで良いじゃん」

「うー、だって……」

まだスッキリしないわからず屋にデコピンをプレゼントしてやった。

「終わりだ終わり。もう次へ行こうぜ」

何だそのいかにもビックリしましたって顔は。そんなに痛くなかったろ？

「あ。えと、」

「今度は何処へ行くんだ？　もうこの国に居たってすること無さそうだしな」

今度はもっと気楽に暇を潰せる展開を望みたいもんだ。

「そなの。もう一生分褒められてうんざり、なの」

「うおっ！？」

突如乱入してきた声に素でびびった。

ん、とピースした手をこちらに向けている真っ赤髪の頬までが少

し赤みを帯びているのは、恐らく主に無理やり飲まされたせいだろう。

「サキちゃん！　あれ？　式典は？」

「もう皆べろんべろんのぐでんぐでん、なの。あれはただ騒ぎたかっただけな気がするの」

意識を向けると、主賓が居なくなっているというのに遠くに感じるドンチャン騒ぎテンションが収まる様子はない。完全に宴会モードに突入しているみたいだ。子供王と呑気じいさんの笑い声が一際大きく木霊しているのは空耳だと思っておこう。

「というわけで連れてって、なの」

主人の傍にいなくて良いのかという俺達の問いに「問題ないの」という一点張りしか返ってこない。

「ね、レオン。リアっち。お願いなの」

「サキちゃん……いいの？」

「前に言ったはずなの。二人の事気に入ったって」

その言葉にびっくりしたように眼を大きくしたリアだが、やがて大きく頷いた。

「うんっ！　サキちゃん。これからも宜しくね」

「こちらこそ、なの」

……ま、いっか。

＊　＊　＊

その日の夜遅く。

既に戦場跡と化した式典会場の片隅で、二人だけが生き残っていた。

「あの子は大層私の事を慕ってくれております。それはとても嬉しいことです。しかし、今回の一件を知って、サキに対する一つだけあった懸念が現実のものになったと思ったのでございます」

サキはラインハルトという人物を絶対的な第一位に据えている。その考え方が、サキを今回のような行動に走らせてしまったのだろう。運良く事無きを得たものの最悪の結果も十分有り得た、と再び元の座に就いた老人は若干落ち込んだ表情をしてみせた。

「サキはこの老いぼればかりを大切にしすぎて、自分を余りにも軽視している。王もそう思われたとこはありませんかな」

「ああ、それは僕も良く解かる気がするよ」

主に寄り添うサキの姿を思い出してグレイスが相槌を打つ。死屍累々と酔っ払い共が寝そべる光景の中、余っていた野菜スティック

を手で掴んでパキッと齧った。

「ふと思ってしまうのです。もしも私が居なくなったら、あの子は空っぽになってしまうのではないか、と」

シャリシャリと野菜を噛む音だけが響く。行儀の悪いそれに老人が一瞬眉を顰めたが、今日くらいはいいかと自らもひとつ手にすると、一気に半分を口にした。

「それで、リア殿達と同行を？」

「はい。彼らとは初対面とは思えない程にサキが打ち解けておりますからの。彼らに同行して世界を回ることで、大事なものを見つけてくれればと」

「鬼の目にも涙、か」

「なんですかな？」

聞こえないような声だった筈なのに素晴らしい地獄耳だ。グレイスは肩を竦めて「何でもない」と惚けて笑った。

「娘を授かることが出来なかった私にとってサキは実の娘も同然ですからの、寂しいという気持ちは当然ありますが……ほっほ」

「わが国としても偉大な守護天使を一時的に失う事になるのか。まあ、じいが決めた事だ。仕方がないと思って諦めるよ」

「心配要りませぬ。語り部の力がこの国を守ってくれるのですから。……何時の間に語り部として覚醒なさっていたのかは、この際不問

に致しましょう。まさか勤めが面倒くさいから黙っていた、などという理由では間違ってもないでしょうし」

「はっはっは。眼が笑っていないよ？」

「笑っておりませぬからの」

何処に隠していたのかどさりと突き出された今後のスケジュールには、語り部としての勤めもキッチリと記されていた。

「……。秒刻みはやりすぎだと思うんだけど」

幼い王はちょっとだけこのジジイを助けた事を後悔した。

「明日からまた忙しくなります。王もサキが居なくなることを寂しがってばかりはいられませんぞ？」

思わず噎せ返ったグレイスを、自称親代わりは面白そうに見ているのだった。

18.「終わりだ終わり。もう次へ行こうぜ」（後書き）

今回で一章完結です。

ここまで付き合っていただいて、本当にありがとうございます。
少しでも楽しんで貰えたなら嬉しいです。

評価、感想、ツッコミ、ご指摘など、一言でも頂けるなら是非お願いします！

※今後の更新予定などは、活動報告ページに書きたいと思います。

ex.1　不機嫌なメイドさん

これは、ハイグレイ王国での騒動が終わってからすぐ後の話だ。

国として正式に礼が出来なかったので、せめて個人として礼をさせて欲しい。そうじいさんに持ちかけられた俺達は、少しの間だけじいさんの屋敷に厄介になる事になった。

森の館も居心地よかったが、本館はさらに立派な屋敷だった。じいさん自身は贅沢にあまり興味が無いらしいが、立場上国の来賓を迎えることも少なくないらしく、どうしても質素なつくりには出来なかったらしい。

俺もリアも休息は必要なかったのだけど、サキは重症だったのでもう暫く休養した方が良いとのこと。治療を担当したリアの意見を尊重して、結局一週間ほど滞在する事になった。

のんびりとした毎日はとても有意義だった。初めて食べる食材が並ぶ出店を気の向くままに制覇したり、カード勝負で見事にリベンジを果たしたりして、一週間はあっという間に過ぎようとしていた。

そんなある日の昼下がり。俺は混乱の渦に叩き落とされた。

サキの様子が変なのだ。

何が変ってまず服装がおかしい。いつもの動きやすそうな服（灰色をベースに装飾が施された上着と、腿の半分あたりまでを覆う厚手のスカート風の衣服）ではなく、爺さんの屋敷でもチラホラ見かけた侍女服に身を包んでいる。ストレートに言ってしまえばメイドさんの格好だ。いつも尾のように縛っている髪を下ろした上にレースつきのカチューシャまで装着済みで、妙に気合が入っている。

変なのは格好だけじゃない。普段は喜怒哀楽を表情で示すことが少ないサキが、俺を睨み付けている。それも結構凶悪に。正直に言えばちょっと怖い。

「……。サキ？」

一体どういう事なんだろう。事情を知っているらしいリアが「大丈夫ですよっ」と能天気な顔で笑っていたが、何度見てもサキの表情は俺を睨んでいるようにしか見えない。

ちっとも大丈夫だとは思えないんだけど。

リアはそのままどこかへ行っちまうし。自分だけ逃げたんじゃないだろうな。

一撃で俺を地獄に叩き落とせる力を持っているとはいえ、サキも女の子だ。リアとはタイプが違うけれど、コケティッシュな格好をすれば感心するほど可愛くも見える。これで微笑みのひとつも浮かべたら、きっとすれ違う誰もが振り向くだろう。

こんな表情（かお）さえしていなければ。

猫のようにつりあがった目で睨むその様は、かなり迫力がある。

居心地が悪そうに立ち尽くす俺とその俺を何故か睨み続けるメイドさんは、人が多い通りのど真ん中で明らかに浮いていた。

＊　＊　＊

事の発端は昨日のことだった。夕食が終わった頃に声を掛けてきたサキは、俺にどうしても時間を作って欲しいと頼んできたのだ。もともと用事らしい用事なんて無かった俺は、軽い気持ちで頷いたんだけど……。

これは選択を誤ったかもしれない。

「レオン様」

「……なんでしょう。サキさん」

突然の様付けにかなり面食らう俺。何か怖いのでこっちも敬称をつけてみる。

「本日はレオン様のお世話をさせていただきます。至らぬところは御座いますが精一杯ご奉仕させて頂きますので、どうかよろしくお願いいたします」

折り目正しく礼をするメイドさんの頭頂部がこちらを向き、スッと元に戻る。そしてその目はやっぱり俺を睨んでいる。

うん、これは夢だ。多分悪夢だ。絶対最後に酷い目に遭って目が覚めるパターンだ。

「……」

古典的ではあるが頬を思い切り抓ってみた。何故か頬が痛かった。

「レオン様？」

下手な事を口にした瞬間に殺されそうな眼力。ここは話を合わせたほうが良いのだろうか。

「何なりとお言い付け下さい」

「……じゃあ、お腹空いたからご飯食べたい、とかでも良い？」

自分で言うのもなんだが、かなり腰が引けている。

「かしこまりました。焼き物、揚げ物など具体的なご要望は御座いますか？」

首を振った俺に軽く頭を下げたメイドさんが、パンパンと手を打ち鳴らす。すると何処からともなく豪華な装飾を施された馬車がやってきて目の前に止まった。

「……随分本格的だな」

メイドさんに促されるままに乗り込むと、馬車は静かに走り出した。

＊　＊　＊

およそ１０分ほど、心地悪く感じる揺れに身を任せていた。揺れが静かに収まって馬車が静止する。御者台の後方に座っていたメイドさんが扉を開けて大仰に傅いた。

「到着いたしました。足元にお気をつけ下さい」

言われるままに馬車を降りた目の前には、ミニチュアの城を思わせる豪華なつくりの建物があった。扉の前には高級そうな衣服に身を包んだ男が二人いる。扉に近づいた俺に深々と一礼をした彼らは、どうやら店の重役らしい。

「大切なお客様のご歓待に当店をご利用いただき、真に有難う御座います。サキ様」

俺に付き従うように歩くメイドさんの会話が微かに聞こえた。よくよく考えるとサキは国王を補佐するじいさんの傍に常に控えていた人物だ。その関係でこんな店にも顔が利くのかもしれない。

サキが何と返事したかまでは聞こえなかったが、背中に感じる視線が未だに少しも和らいでいないことだけは良くわかった。

今日はまだ何も食べていないせいか、胃がキリキリと痛い。

「こちらで御座います」

案内された部屋は、かなりの大人数が収容できそうな広い空間だった。白と金で眩く彩られた部屋の中心を割るように長いテーブルが鎮座し、清潔そうなシーツが敷かれている。その上には豪華な装飾の蜀台が等間隔に配置されていた。

素早く豪奢な椅子を引いたメイドさんに促されてど真ん中の席に座る。当の彼女は当然のように俺の後ろで立ったまま静かに佇んでいた。視線が突き刺さって非常に居心地が悪い。

「なあ、お前は座らないのか？」

「わたくしはレオン様にご奉仕する立場にあります。お気になさらず、どうかごゆっくり食事をお楽しみください」

だったらせめてその眼力をもうちょっと緩めて欲しい。

「……むう」

無理にでも椅子に座らせないとどうも落ち着かない。俺は何度か座るように促したのだが、結局は暖簾に腕押しだった。

次々と運ばれてくる煌びやかな料理を無駄にしてしまう訳にも行かず、結局は一人で手をつける事になったのだった。

＊　＊　＊

料理はどれもかなり美味かった。今まで出店巡りが殆どだった俺にとって、この世界の高級料理は初めての連続でとにかく凄かった。自分のボキャブラリーの無さがちょっと恥ずかしいけど、そんな言葉しか思いつかない。

「ご満足していただけましたでしょうか、レオン様」

「ああ、もう食べられないくらいに食べたよ。美味しかった。」

これは偽りの無い本心。実家の料理人にも見習わせたい程文句無く素晴らしかった。

ただ、食事中もこのメイドさんの様子が終始気になって仕方がなかったけれど。

冷静になってみれば感じる視線に敵意は無い。ただ、ものすごく緊張しているように思える。

俺の返事を聞いて少しだけ頬を緩めたメイドさんだが、すぐ元の顔に戻ってしまった。

「それでは、他に希望されることは御座いますか？」

これ以上黙って話を合わせても疲れてしまう。弱り果てた俺は少し考えて、希望の場所を告げてみた。

「……かしこまりました」

一瞬だけ俺の意図を考えるような間があったけれど、メイドさんは大人しく俺の言葉に従ってくれた。

＊　＊　＊

「おー、絶景だな。風も気持ちいいし、気に入ったよ」

今は昼を大分過ぎて、太陽がそろそろ落ちようかという頃。

賑やかな場所から少し離れたところにある小高い山の上は、心地よい風が吹いていた。国の外観が見渡せるこの場所からは、つい先日騒ぎの中心となった王城も見えている。「仕事の量が洒落にならない」とぶつぶつ言っていたグレイスは、今頃もじいさんに尻を叩かれているのだろうか。王様って大変だよな。

相変わらず俺の背後に控えていたメイドさんの方を振り向く。俺を強く見詰めていた顔がすぐに下を向き、「何なりとお申し付けくださいませ」と硬い声で俺に告げた。

「正直に答えて欲しい」

「はい」

「何をそんなに緊張してるんだ？」

このままでは埒が明かないので、正直に質問する事にした。俺の質問に固まってしまったメイドさんは、ばつが悪そうに目を逸らした。

「用意してくれた食事は本当に美味しかったし満足している。けれど、お前がそんな状態だからそっちの方が気になって仕方がないんだ。これ以上続けるのなら、せめて理由を教えてくれないか」

「……何か至らない所が」

「そうじゃないっての。あとこれ以降敬語は禁止な。いつもの言葉で喋ってくれ」

どうして急に態度を変えてしまったのだろう。最初は手の込んだ悪戯の可能性をずっと信じていたんだけど、どうやら違う。結局は幾ら考えても解らないので、もう直接聞くしかない。

暫く沈黙していたサキが口を開いたのは、景色が茜色に染まり始めた頃だった。

「レオンにお願いがある、なの」

「お願い？　叶えられるかどうかは知らないけど、聞くだけは聞くぞ」

それが突然メイドさんになった理由なのだろうか。聞くのが少々怖いけれど、ここで有耶無耶にする訳にもいかないので先を促した。

「わたしが二人に付いて行くことを許して欲しい、なの」

「……え？」

あれ？　それってつい先日リアが手放しでＯＫを出したハズじゃなかったっけ？

俺の驚いた顔をどう解釈したのか、サキは懇願するように一歩進み出る。

「お願いなの。私も色々と世界を見て回りたい、なの」

「ちょっと待て、俺それ反対してないだろ？」

「……なの？」

「え？」

傍からみればアホみたいな会話だと思うが、結局はそんな話だった。

＊　＊　＊

「いや、確かに俺はあの時返事をしなかったけどさ。別に反対もしていなかっただろ？」

「……レオンはいじわる、なの」

なんだよそれ。

俺は悪くないと思うけど、今日は色々とご馳走になった事だし黙っておく。サキが今日ずっと怖い目をしていたのは、俺がその話を断ったらどうしようと真剣に悩んでいたからしい。

「でも、どうしてメイドなんだよ」

「主様とグレイス様が、レオンは絶対メイドさんの言うことなら頷いてくれるって言ってたの」

なるほど。後であいつらを殴りに行こう。

理由を知って体の力が抜けてしまった。再び絶景の方に振り返ってぐっと体を伸ばすと、凝り固まった体に血が巡ってゆく。こんなコトなら最初からちゃんと理由を聞いておけばよかった。そうすればきっとあの食事も、もっと美味かったに違いない。

「あと、もうひとつ言いたい事があるの」

「ん？　なんだ？」

「助けてくれてありがとう、なの」

サキは後ろから、そっと俺の背に抱きついてきた。

「レオンにもリアっちにも、本当に感謝しているの。今日はそれをどうしても言っておきたかった、なの」

「……サキ」

「今日こんな事をしたのは、少しでもお礼をしたかったから、なの。食事は主様とグレイス様が用意してくれたの」

そうだったのか。

振り返ると少し恥ずかしそうにしているサキがいた。つい出来心からその頭を撫でてみたら、気持ち良さそうに目を細めてくれた。

「なんだかレオンは主様に似ている、なの」

「そうか？」

あそこまで飄々としているつもりは無いけどな。

結局、日が沈むまで俺達はそこに居た。じいさんの屋敷に帰った俺達に、独りで寂しがっていたらしいリアが泣きついてきたところは割愛する。今日は何だか疲れた。

＊　＊　＊

これで話が終われば良かったのだけど。この日はまだちょっとしたオマケがあった。

夕食も済んで部屋でノンビリしていた俺の所に唐突にじいさんが侵入してきて「一緒に風呂に入らんかの？」と誘ってきたのだ。

じいさんは風呂が大好きらしく、自分の屋敷にある浴室は結構こだわって造ったらしい。じいさん自らが設計したという浴室は、王室の設備に引けを取らないほどの大きく豪華なものだと自慢していた。外の風景を一望できる露天風呂や焼き石を使ったサウナなんかも有るみたいだけど、ここに見える様々な色のお湯に一通り浸かるだけでもふやけてしまいそうだ。

「ふぃー、極楽極楽。どうじゃ、温泉とは良いものじゃろ？」

今は泡がパチパチと弾ける炭酸入りの湯船に浸かっている。初めての感覚だけどなかなか面白い。じいさんは心臓に良いとか疲れが良く取れるとか小難しいことを言っていたが、要するに体に良い温泉らしい。

「ああ、ただのお湯に浸かってるより気持ち良いな。けどさ、ちょっと熱くないか？　そろそろ出たいんだけど」

４０度以上あるこの湯に入ってから既に３０分以上は経過している。変わらず涼しい顔をしているじいさんとは違い、鏡の中の俺は既に顔が真っ赤になっていた。

「まーまー、もうちっとだけ、な？　裸の付き合いも良いもんじゃろ？」

さっきからずっとこの調子だ。このままだと本気で茹で上がっちまう。無理やりにでも出てしまおうと企んだ俺と何故かそれを邪魔

するじいさんは、そんな見苦しい攻防を何者かが入ってくるまで続けていた。

「あん？」

誰だろう。俺は入り口の方に振り向いた。

ぺたぺたと濡れる石の上を歩く音が響いて聞こえる。侵入者は俺の目の前まで歩いてくると、丁寧にお辞儀をした。

「あ、あの。お背中をお流しします、なの」

……は？

「おお、やっと来たか。よしよし、それじゃワシはお先にあガッ」

ごく自然に俺を置いていそいそと出て行こうとする後頭部に風呂桶を投げつけた。見事に頭から転んだジジイに駆け寄る。

「な・に・を・か・ん・が・え・て・や・が・る？」

「なにって、今日はおぬしの世話をするとサキが言っていたじゃろ？」

何故かニヤニヤ笑いを浮かべやがったクソジジイ。さっきから俺を無理やり引き止めていた理由はコレだったらしい。

サキはひどく恥ずかしそうにしながら、白い体に大きめの布切れ

を巻いて胴体を隠している。細身ながら胸や腿の辺りで布がはだけないようにしっかり握っているその姿が、妙に扇情的というか目を奪われるというか、いや何考えてるんだ俺。

良く解らない何かに精神を乗っ取られていたらしい。既にじいさんは何処にも見当たらず、何故か俺はサキの言われるままに風呂椅子に座っていた。

「……。」
「……。」

「……。」
「……。」

なんだろう、このまな板の上の鯉になったような感覚は。

この状況がもしも王国の連中（特に国王）にバレようものなら本気で魔王討伐隊が結成されるかもしれない。現実はちっとも癒されないというか、サキの緊張がヒシヒシと伝わるというか。抽象的に言うとＨＰが減っていく気がするけれど。

サキはただひたすらに俺の背中を磨き続ける。どうすれば良いのか判らないので俺はただ身を任せるしかない。気を紛らせようと声を掛けても、全く返事すらしてくれないし。

「サキちゃん？　あれ、もう先に入ってるのかな」

そして扉越しに聞こえた謎の声。もとい勇者の声。

湯から出て引いていた汗が、全身から一気に吹き出てきた。

今思い出したのだが、この温泉は時間帯によって男湯と女湯が入れ替わるらしい。

マズイ。このけしからん光景を見た時の勇者の行動が容易に想像できる。何とか言い訳を考えないと、このままだと暗い未来しか描けない。

もう少しソフトに表現すると、多分俺は殺される。あれちょっと何言ってるのか解んなくなってきた。

「……いやいや、落ち着け俺」

待てよ、違うよ俺悪くないよ。考えたらこの状況はただじいさんにハメられただけだし、サキの格好だって俺が強要した訳じゃないんだし。冷静になって話を聞けばいくらあのリアだって理解できる筈だ。そうだよな？

「サキちゃーん。いるー？　ラインハルトさんがここだって――」

ガラッ、と扉を開けた小さな手が、その形のまま硬直した。やあ。いいお湯だよ。

「……。」

予想通り出現した勇者の格好は、サキよりも更に際どかった。

具体的に言えば小さなタオルで胸から下を辛うじて隠しているだ

けというか、もしも後ろに回り込めば肌色しか見えない姿というか、綺麗だとは思っていけど本当に透き通るような肌だとか、意外にも胸はそんなに小さくないとか、だから俺は何を考えてるんだ。

そして、お前は何故風呂場に聖剣を持ち込んでいるんだ。

「っきゃあああああああああ！！！！！！！？」

という訳で、俺達がこの国から出発する予定は少しだけ延びた。

ex. 1　不機嫌なメイドさん（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

書きたかったシーンが一つあったので、それを書く為にこの話を作ってしまいました。

次はちゃんと2章を投稿したいと思います。

19.「オ・ニ・イ・サ・マ？」

ハイグレイでの騒動が解決してから、一週間と少しが経過した。

静養していたサキは、リアが「完璧ですっ！」と太鼓判を押すまで回復し、俺達は明日からまた別の場所へ向かう事になっていた。次は是非とも気楽な展開を望みたいが、俺は相変わらずこの世界の地理がさっぱりだ。なので行き先はリアとサキに一任してある。

リアの目的からして、基本的には何か騒動がありそうな場所へ向かう事になるのだろう。今頃は情報収集をしている筈なのだが、この世界の情報伝達手段はあまり発達していない。

遠く離れた相手に情報を即座に送る手段は、使える人間が限られる魔術しかない。だから基本的に国から出ない人間は、他国の情報を殆ど知らないらしい。

じいさんにも聞いてみたのだが、少なくとも交流がある周辺国に騒動が起きているという話は無かった。そこで、比較的他国の情報を知っている商人や冒険者を頼ろうって話になっていた筈だけど……そろそろ行き先が決まっていても良い頃合だというのに、あいつら未だに報告に来ない。

今頃北上するのか南下するかで揉めているのだろうか。いや、どうせおやつをケーキとクッキーどちらにするかで悩んでいるとか、そんな下らない理由だろう。

コンコン。

新たな行き先について考えていた矢先に部屋の扉がノックされる。やっと次の目的地が決まったのかもしれない。

コンコン。コンコン。

随分せっかちにノックが続く。リアにしては音が大きいのでサキだろうか。

「開いてるよ。どーぞ」

がちゃりとノブが回り、扉が開く。現れたのは闇色を基調としたレースやフリルに彩られたハデな衣服と、過剰に膨らんだスカートを纏った誰か。まるで人形のような出で立ちだった。

誰？　サキじゃない……よな？

「見つけた……」

その顔は俯いている為に見えない。何故かわなわなと肩が震えている。強調するように大きく開かれた胸元からは薄い褐色の肌が覗いていた。俺と同じ銀色の髪をロールさせてリボンで結んだ女はキッと俺を睨み付け、ベッドに腰掛けていた俺にツカツカと歩み寄ったかと思うと、俺はそのまま押し倒された。

「やっと見つけたわよ！　バカお兄ちゃん！！」

頭に響く大きな声で俺を罵倒した人物は、俺をそんな風に呼んだのだった。

＊　＊　＊

正直に言うと、ビックリしすぎて最初は声が出なかった。

「フェリン！？　お前、どうしてこんな所に居るんだよ」

「それはこっちの台詞よ！　おにいちゃ……こほん、お兄様。魔王としての務めを彼方に投げ捨てて、一体何をしているのかしら？」

ベッドの上で馬乗りにされた格好で、頭上から雹のように硬く冷たい声が降ってくる。

最後に会ったのが１０００年以上前だからだろう。短かった手足が随分伸びていたせいで、一目見たくらいでは全く気付かなかった。

フェリンは俺の妹だ。昔一緒に暮らしていた頃は、まるで雛鳥のようにいつも俺の後ろを歩いていた。両親から受ける地獄のような教育の最中もずっと俺の傍を離れずにいた彼女は、傷の手当てもしてくれる優しい性格の女の子だった。

当時はとても内向的な性格だったので、今みたいな声を出す姿を見ているとどうも同一人物だとは思えない。しかし、輝くような銀の髪も瞳も薄い褐色の肌も、間違いなく妹のそれだった。

「オ・ニ・イ・サ・マ？」

こんな風に目を吊り上げて首を絞めてくるような娘じゃなかった

筈なんだけど、長い月日は性格も変えてしまうらしい。というか苦しい。

「ぐぇっ、ちょ、待ってくれ。本気で絞まってるから！　落ち着け！」

ぺしぺしと薄い褐色の手を叩く。唇を尖らせていた妹君は「うー」とひとつ唸ってようやく手を離してくれた。

「げほ、ったく、お前も随分力が強くなったな。っぷあ！？」

「女の子にそんな事言うな！」

鳩尾を見事に打ち抜かれて悶絶する。どうやら下手な発言は寿命を縮めるだけらしい。両手を挙げて降参をアピールすると、やっと大人しくなってくれた。

「いやー、てっきり俺の事なんて忘れられてると思ってたからさ、まさか迎えが来るとは思わなかった」

「今まで自由にさせてあげていただけでも感謝して欲しいわよ。お父様が亡くなってから今まで、本当に大変だったんだからね」

ぷんすか怒りを露にするフェリン曰く、父親ジェノサイが死んでからは母親のサクヤが王代理として指揮を執っていたらしいのだが、ある日突然キレたらしい。どうやら仕事の量が限界を超えた途端、息子に殺意が芽生えたのだとか。

フェリンが言うように、魔族の王にはその世界を治める義務がある。普段ふざけた事ばかり言って母親に半殺しにされるような俺の父親も、魔界で発生するイザコザにはある程度目を光らせていた。

無論ただのケンカ程度は日常茶飯事だし、魔物同士で殺しが起きようと口を挟む事はしない。ただ、神が暮らす天界と協定が結ばれていて、他世界に影響があるような騒ぎは自主的に鎮める約束になっている。

俺が暮らしていた頃は大した騒動も起きていなかったが、オヤジが死んで久しい最近になって、ちょくちょくと事件が起きているらしい。

……やっぱり俺が不在だったから、なのか？　母親であるサクヤの名前も相当怖がられていたと思うけど、”魔王”という肩書きは俺が思う以上に影響力があるのかもしれない。

「今お兄様は魔界全土から指名手配されてるわよ。お母様は本気で連れ戻したがっているわ」

「なんだよそれ……」

扱いがまるで世紀の大犯罪者だ。かつて勇者が侵攻してきた時だって我関せずのスタンスを貫いていた母親がそこまでするなんて、これは相当本気らしい。

「と言う訳で、わたしはお兄様を連れ戻すために此処に来たの。だから今すぐ城へ戻ってきて。自分から出頭すれば、まだ九割九分殺しで許してくれる可能性も少しはあるから」

「殆ど死んでるだろそれ！」

今ノコノコ帰ったら、俺は殺されるらしい。

「イヤだ。俺は自分から死刑台に飛び込む趣味なんて無い。お前だって縛られるより自由な方がいいだろ？」

俺の拒否回答に、妹の整った眉の角度がさらに吊り上がった。

「わたしは本来お兄様が行うべき案件を幾つも抱えさせられているのですけれど？　その事に対する謝罪の言葉は無いのかこのバカ！！！」

腹を狙って振り下ろされた両手を今度は何とか掴む。フェリンは黒いオーラを纏いながらキッと俺を睨んだ。

「だいたい、この世界の征服なんてとっくに終わってると思ってたのに、フツーに人間たちが間抜け面晒してるし。今まで何処で何やってたのよ！」

そういえばそんな言い訳して家を飛び出したんだっけ。

確かに無断で１０００年以上家を空けたのは悪かったと思ってるよ。でもさ、俺だって好きで長い間フラフラしていた訳じゃないんだよ。悪いのは俺を閉じ込めやがった人間で……。

……何を言い訳しようと、頭に血が上って真っ赤になっている妹の勢いが止まるとは思えない。むしろ言い訳するだけ火に油を注ぐのかもしれない。

突然の妹襲来にどう対処したものか困り果てていた俺。この状況を動かしたのは、ふらりと部屋にやってきたリアだった。

「レオンさん？　なんかすごい音がしましたけど、大丈夫ですか……ぁぅ！！」

開いていた扉の向こうからひょっこり顔を出していたリアは、何故か顔を赤くしている。

「やっぱりレオンさんって胸が大きい女性（ひと）が好きだったんですね！？」

「待て待て待て！　何かものすごい勘違いしてないかお前！？」

こんな感じで、事態はより混沌とした方へと進んでいった。

＊　＊　＊

ベッドに仰向けに転がる俺と、その上に馬乗りになるフェリン。そしてそんな俺たちを入り口から顔を半分だけ出して見ているリア。こんな状態で騒いでいたらあまりにもアレなので、まずはフェリンを退かしてリアを部屋に招き入れた。

沈黙が重苦しい。さっきまでの剣幕がなりを潜め静かに負のオーラを撒き散らすフェリンと、それを困ったように伺うリアはさっきから一言も言葉を交わしていない。

俺からの簡単な紹介の後リアが何度か話しかけたのだが、悉くフ

ェリンは無視し続けていた。

「あ、あのっ」

俺が窘めても睨み返すだけだったフェリンへ、リアが再度声をかける。その出鼻をくじくように、フェリンはようやく口を開いた。

「アンタね」

「はい？」

「お兄様が、責務を捨て置いて遊び歩く腑抜けた風船みたいになってしまったのは、貴女がお兄様を誑かしたからんでしょう」

……あっているような、違うような。どう答えたら良いのか困っている間に、フェリンの怒りは勝手に燃え上がる。ところで、俺そんなナヨナヨしてる？

「お兄様はそんなヒマじゃないの。悪いけれど、わたし達はもう失礼するわ。今日からはこの世界での溜まりに溜まった仕事を全部片付けてもらいますから」

「あのっ」

さすがと言うべきか、リアはこんな刺々しい雰囲気でも臆したりはしないらしい。フェリンとは正反対の柔らかい笑みを浮かべながら「そのお仕事、私も手伝います！」と元気に発言した。

……。

お前、相変わらず前のめり気味に厄介事に突っ込んでいくのな。

20.「……そうですか」

結局、命が惜しい俺はリアの提案に乗ることにした。

妹との真摯な会話の結果、フェリンが抱えている案件を手伝う事になったのだ。首尾よく解決できれば鬼畜母への通報は待ってくれるらしい。自分から首を突っ込んできたリアに加えてサキまで来てくれることになったので、これから手伝う内容を聞くところだ。

場所を茶室に移した俺とリアとフェリンが鉄木の円卓に均等の幅をあけて座る。後ろでは侍女服を着込んだサキがテキパキとお茶の準備をしていた。じいさんの傍にいない時は、こんな風にメイドさんとして働いているらしい。

リアはサキに落ち着かない視線を送っていたが、手伝いの申し出をやんわりと断られて結局大人しくしていた。

「今一番早く終わらせたい案件は、古文書の奪還よ」

渋々と内容を語りだしたフェリンがテーブルをとんとんと叩くと、古めかしい本の絵が浮かび上がった。重厚な黒皮の表紙には金字で”Ａｌｃｈｅｍｙ　ｒｅｃｏｒｄｓ”と示されていた。

「これがその古文書。正式には”レナスの秘宝録”という名前よ。お母様の親友だった人物が遺したもので、二つと無い貴重な本よ」

これには古今東西のあらゆる宝が記載されているらしい。凄いのはその質で、今では所在すら不明なレアリティの高い様々な秘宝が載っているという。

「それだけならまだしも、古文書には幾つかの秘宝の在り処がこっそりと記述されているという話なの。悪用でもされたら親友に顔向けできないから、絶対に取り戻すようにと強く言われているわ」

もしも誰かが秘宝を手に入れてそれで問題が起これば、ただでさえ危険な母親の理性が吹っ飛んでしまう。さらに言えばそのとばっちりが俺にまで及ぶ可能性が非常に高い。

うん、頑張ろう。

「古文書がこの世界に存在するってのは、確かなのか？」

無くなったと騒いでおきながら実は宝物庫の棚の裏側に落ちていた、なんてオチはないだろうな。

「もちろん確かよ。少し前に盗まれたばかりだもの」

フェリンの話によると、盗人は大胆にも城の宝物庫に進入し、警備を振り切ってこの世界に逃げ込んだらしい。忽然と姿を消してしまった罪人は、今も古文書と共にこの世界のどこかに潜んでいる筈だという。

「この世界のどこかなんて、幾らなんでも広すぎだろ。他に手掛かりは無いのか？」

「手掛かりがあるなら、こんな所で暢気にお茶を飲む前に乗り込んでいるわよ。まだこちらに来たばかりだし、今は低級悪魔（ミニデーモン）たちに色々情報を集めさせている最中よ。この世界は魔力が薄いから、少し苦労しているみたいだけどね」

フェリンが使役するヤツらの調査能力はかなり高い。「珍しい銀髪の男がいる」という噂話から俺に辿り着くまで半日も要らなかったらしい。ミニデーモンの目があれば、犯人の手掛かりを掴むのも時間の問題だとフェリンは言う。

「盗んだ犯人は、どんなヤツなのか解ってるのか？」

「勿論。キールが後一歩のところまで追い詰めたのよ。結局まんまと逃げられて、お母様から罰を受けて喜んでいたけれど」

また懐かしい名前が出てきた。俺の教育係兼執事という肩書きを持つキールとも随分長く顔を合わせていない。いつも笑顔を顔に貼り付けている変な男なのだが、あいつは相変わらず人の母親に狂った忠誠を向けているらしい。

「彼の証言によると、犯人はオーガの一種みたい。体格はお兄様より頭ひとつ大きいくらいで、髪と瞳は緑色。眉尻の上辺りに小さな角が見えたと話していたわ。この世界にオーガなんてそうそう居るものじゃないから、見つけたらそいつに間違いないと思う」

へー。オーガねえ。あのキールからまんまと逃げ果せたとなれば、そこそこ腕が立ちそうだ。

「一部ではお母様に折檻してもらう為にワザと取り逃がしたなんて噂もあるみたいだけど。……それが本当だったら、わたしアイツ殺すわ」

現在抱えている問題に忙殺されているフェリンは真面目な声でそう言った。

＊　＊　＊

話も終わり、後は偵察からの報告を待つことになった。目の前のカップが空になったので、今はサキが静かに新たな茶を注いでいる。

前にも思ったが、サキは刀を持たないと気配が希薄になる。これもメイドさんとしてのスキルなのだろうか。

静かに全員のカップに紅茶を注いだサキは、ぺこりと一礼してまた後ろへと下がっていった。

「ところで、リアさんとお兄様は目的を共にする仲間、と仰っていましたね。その目的とはどういったものなんでしょう」

ようやく柔らかくなってきたフェリンの目元がまた少し吊り上がる。言葉も硬くなっていて明らかに機嫌が悪い。さっさと白状しなさい、と全身が語っていた。

「あ、ああ。ええと」

俺は鬼畜両親から開放されたくてこの世界に来ただけだ。だから目的といっても、今のところは暇つぶしになりそうな面白い物を探すくらいしかない。

リアと行動を共にしているのは、あの白い世界から助けてもらったことに対する礼にすぎない。この勇者がどんな運命を辿るのかを見ていたい、という気持ちも少しはあるけどさ。

だが、そんな理由で今まで責務を放置して遊んでいました、なんて告白しようものならこの場で謎の大爆発が起きる可能性が高い。

「お兄様？　そんなに汗をかいてどうしました？」

半目になった妹の視線がとても痛い。

俺の目的を正直に言ったところで、フェリンは到底納得しないと思う。

だからといって、リアの目的を正直に話しても新たな火種にしかならないだろう。

リアが言う世界征服はあくまで平和にするための手段であって、フェリンが思うようなものじゃない。「世界を平和にしたくて頑張ってます！」なんて言ったらどんな反応が返ってくるか想像しただけで恐ろしい。妹はそういうのが大嫌いなのだ。

俺はリアに視線を向け、「何とか誤魔化してくれないか」と念を送った。

うおい！　俺のアイコンタクト無視かよ！

以前イヤになるくらい正確に俺の心を読めたくせに、肝心な時に全く通じていない。

「……お兄様？　リアさんの言うことは本当なのですか？　勇者で

もあるまいし、そんな荒唐無稽なお題目を掲げて今まで遊び歩いていたと？　そもそも征服はどうなってるんですか？」

口元はにこやかなのに声が笑っていない。鉄木のテーブルがミシリと軋んだ。

「わたしは勇者ですから。レオンさんはそれを手伝ってくれているんです」

リアさん、頼むから少し黙っていてくれませんかね！？

自分の馬鹿さを後悔してももう遅い。フェリンの顔が明らかに硬直した。

マズイ。小さな頃から勇者を題材にした書物を愛読していた俺とは違い、フェリンは勇者という存在を嫌悪しているのだ。それが魔族としてごく普通の反応だけど、この場で暴れるのは勘弁してほしい。

「……そうですか」

そんな俺の願いが通じたのか、驚くほどフェリンはあっさり引き下がった。ただしその顔からは表情が消えていた。

これは後で血が流れるかもしれない。

怯える俺をよそに、フェリンの顔がサキへ向く。

「ところで、お仲間がもう一人いらっしゃった筈ですが。……彼女なのですか？」

「あ、ああ。ちゃんと紹介するよ。名前はサキっていうんだけど――」

妹とケーキを配し終えたメイドさんの目が合う。

その姿を初めてちゃんと見た我が妹は、次の瞬間にはサキに飛びついていた。

「うにゃあああ!?」

今まで冷静にメイドさんを演じていたサキから素っ頓狂な悲鳴があがる。フェリンはじたばたと暴れる彼女を意に介さず、侍女服が皺になるほど抱きしめた。

「ねえお兄様、この娘わたしにちょうだい！　気に入ったわ！」

まるで愛玩動物を相手にするみたいにくしゃくしゃ頭を撫でて頬を寄せる。どれだけテンション高くなってるんだと呆れた俺の目の前で、妹とサキは「ちゅっ」と唇と唇を合わせた。

「！！！」

「かーわーいーいー！　サキちゃんって言うんだっけ。ねえ貴女、わたしのペットにならない？」

絶句する俺達をよそに、テンションを最高以上に振り切ったフェリンがキスの嵐を浴びせる。完全な不意打ちに顔を赤らめていたサキが暴れだすまで、そう時間はかからなかった。

＊　＊　＊

「……、なの」

「ああ、癒されるー。怒った顔までカワイイなんて、何て罪作りなのかしら」

双方の衣服が派手に乱れる程の激しい攻防は、結局フェリンの勝ちになった。

反撃空しく逃げられなかったサキは、今も膝上に乗せられたまま少しウンザリした表情になっている。フェリンはサキと比べて頭ひとつくらい背が高いので、この状態だと本当に大きい人形を抱いているみたいだ。にこにこと浮かぶ笑みを見る限り、我が妹は相当ご機嫌の様子だった。

「こんなカワイイ生き物を働かせようだなんて、お兄様酷いわ。いくら魔王だからって鬼畜にも程があるわよ」

無理やり抱き締めて相手がぐったりするまで離さないお前の方が数倍鬼畜だよ。

「いい加減に離してやれ。動物じゃあるまいし、ペットになんかできるわけないだろ」

「あは、さすがに冗談よお兄様。でもペットになってくれるなら喜んで飼うけどね。お兄様なんかよりずっと大切にするわよ？」

フェリンはまだまだ抱きしめ足りない様子だったが、最後に頬に口付けを残してようやくサキを開放した。ぺたんと床に座り込んでしまった彼女に手を貸すと、サキは「ちょっと風に当たってくる、なの」と言い残して出て行ってしまった。心配なのかリアもその姿を追っていく。

「やりすぎだっての。後で謝っておけよ」

はーい、といい加減な返事をした妹は相変わらず上機嫌だ。静かに目を瞑ったかと思うと、「ご苦労様」と呟いて俺に視線を戻した。

「実はさっきから偵察妖精（ミニデーモン）の報告を聞いていたの。サキちゃんを抱いていると集中力が上がるのか感度が良好で、思わず最後まで続けちゃったのよ」

だとしても、もう少しやり方が有るだろうに。きっとサキはフェリンのことが苦手になったに違いない。あの凍りつくような雰囲気から開放されたのは嬉しいけれど。

「……んで、目星は付いたのか？」

「ええ、お兄様。ここから西へ進んだところにある古城で、それらしき姿を見たらしいわ。早速だけど行きましょうか？」

人間に比べて少しだけ鋭い歯を見せてフェリンが笑う。「楽しみね」と呟く声はかつての妹とは違って、どこか酷薄な響きだった。

21.「それではお気をつけて」

件の城は、ハイグレイから馬車で7日以上かかる遠方にあるらしい。

らしい、というのは俺が実際にその道を踏破した訳ではないからだ。フェリンが虚空から取り出した姿見を抜けると、目の前には荒んだ城がそびえていた。

四角く切り取られた白石を積み重ねて造られた城壁は、風雨や雑草に侵食されてボロボロになっている。本来の持ち主が放棄してから、既に長い年月が経っているのだろう。

城の大きさは、ハイグレイと比べるとかなり小さい。外見は城だが、ここはどこの国にも属していないという。

後ろを振り返ると、ここがかなり高い山の上だということがわかる。周囲は視界がよく、遠くまで曲がりくねった細長い道がよく見えた。路は荒れ放題になっているので、律儀に歩くとかなり骨が折れるだろう。

久しぶりにコンパスを手に取る。中心の三角のまわりには灰色で示された山しかない。コンパスは詳細な地図として使うには少々無理がある。細かい地形を把握するのなら、ちゃんとした地図の方が良いらしい。

「この城には、バケモノが出るという噂があるの。周辺の住民はみな恐れているみたいで、誰も近づかないらしいわ。わざわざこんな場所に遊びに来るのはわたし達くらいよ」

逆を言えば、こんな不毛の地をウロウロしているヤツはこの城に用がある可能性が高いともいえる。絶対ではないけれど。

「ここへ続く道の中腹あたりで、緑髪のオーガが目撃されていたわ。周辺に棲む動物たちによると、おぼつかない足取りでまっすぐ城へと歩いていったようよ」

フェリンが使役する使い魔は、種族が違う相手でも意思疎通ができる。数十体がチームを組んで捜索するので、その目から逃れることはかなり難しい。

それでも、この城の主に関する情報は無いに等しい状態だ。使い魔は現在の情報を集めるのは得意だが、証人がいないほど過去に関する情報はさすがに無理なようだ。

改めて城の方へ目を向ける。

周囲は堀で囲まれていて、濁った水が溜まっていた。俺達から水面までかなり落差がある。人間の背の5倍以上はあるだろう。

「……大きな生物の気配がしますね」

何かに気付いたリアが、近くに落ちていた石を掴んでぽいと投げ入れた。

「うお、デカイな」

ぽちゃん、と音を立てた途端に水面から巨大な口が出現した。石

を周囲の水ごと飲み込んだ後、水飛沫を上げてすぐに沈んでいった。

「あれは多分ミズゴショウ、っていう生き物なの。あんな大きいヤツは見たこと無いけど、なの」

サキがそう解説してくれた。余談だが、サキはフェリンの強い希望によりここでもメイドさんの姿だ。妹の暴走を何とかして欲しいと訴えられたけど、期待に応えるのは多分無理だ。すまん。

……話が逸れた。ミズゴショウ、だったっけ。

魚の体に手足が生えているような姿を持つ水棲生物だが、サキの話によると大きくても大人の背丈の倍程度。しかし今見えた口の大きさからして、あのバケモノは明らかにその3倍以上はあった。

見た目どおりの獰猛な性格らしいので、あまり関わり合いになりたくない相手だ。

堀の幅はミズゴショウの倍以上はあるが、跳ね橋は完全に破壊されている。こんな状態ではとても使えないだろう。

そんな俺の考えを読み取ったのか、フェリンは木の葉を一つ手に取りふっと息を吹きかけた。緑の葉がすぐさま巨大に膨れ上がり、瞬く間に緑色の橋が架かる。

「これで文句ないかしら？」

相変わらず気の利く妹だ。

先頭に立ってツカツカと橋を渡る姿は、どこか母親を思わせる。

俺が居ない間ずっと補佐をしていたおかげで、身のこなしまで似たのだろうか。あの母親が二人に増えたと思うとゾッとする。

辿りついた城門は幅が狭く、三人が横に並んだら窮屈に感じる程だった。上部には城主のものと思われる紋章が掲げられていた。

紋章には珍しく、齧られた様々な果実の絵が並んでいる。リアもサキも、こんな紋章は見たことがないと言っていた。

＊　＊　＊

「うーわ……こりゃ酷いな」

城内は予想通りに荒れ放題だった。赤かった筈の絨毯は埃で白く変色しているし、至るところに蜘蛛の巣が張り巡らされている。俺たちの足音に驚いたのか、城に住み着いていた小さなネズミが「チチッ」と鳴きながら穴に潜り込んでいった。床もボロボロで、少しの衝撃でも崩れてしまいそうだ。

「さて、それでは手分けをしましょうか。こんなに人数が居るんだもの、ゾロゾロと固まっていても効率が悪いだけだわ」

いまは白昼を少し過ぎた頃。

光源は薄汚れた窓しかない。城内は昼間だというのに薄暗く、カビ臭い空気はひんやり冷たい。捜索に手間取って日が沈めばさらに面倒になるだろう。確かに手分けした方が良さそうだ。

外から見た限り、この城は3階まで見えたので丁度いい。

「それじゃ地上階は任せる」

「私たちですか？　レオンさんはどうします？」

「俺は地下だな。ホラ、ここに階段が見える」

床には少し色が違う一角があった。誰かが破壊したのか一部が欠けていて、その隙間の先に階段が見えるのだ。

「……いいわ。わたしはこの階を、サキちゃんは2階を、リアさんは3階をお願いするわ。それでいいかしら？」

「了解、なの」

「わかりました。緑のオーガさんを見つければいいんですね？」

「ええ。体格に似合わず素早い相手なので、くれぐれも気をつけて下さい。あと、他にも色々と出るかもしれませんので油断は禁物ですよ？」

「出る？」

ネズミとか？

「古城で出ると言えば、決まっているじゃないですかお兄様。争いに敗れた無念が宿るゴーストの類です」

「……おばけ、なの？」

サキの声が少し細くなった気がした。どことなく、小さな体がさらに小さくなっている。

「あれ、ひょっとしてお前そういうの苦手だった？」

「そ、そんなことない、なの」

なんてわかりやすい反応なんだ。

サキはふるふると首を振って否定したがっている様子だが、きっと誰もその言葉を信じていない。

「大丈夫よサキちゃん、わたしが助けてあげるから……それよりもお兄様？　もしも隠れてサボタージュしたらどうなるか、わかるわよね？」

「俺がそんな不誠実な男に見えるか？」

「見えるわよ」

間髪無く答える妹がちょっと怖い。昔はこんな風に噛み付く姿なんて想像もできなかったのに。時の流れってのは残酷だ。

「そうそう、もし発見したら適当に弱らせて捕獲してくださいね。古文書の所在を聞かなければいけませんので」

フェリンは虚空を掴むように手を握る。ゆっくりと開くと、掌に黄色い宝石が４つ並んでいた。

「これはダイヤと呼ばれる鉱石の一種。わたしが少々細工しておいたから、これを使えば簡単に捕獲できるはずよ」

一定以上衰弱した相手に触れさせれば、それで捕獲できるらしい。

「探索が終わったら、この中央階段前に集合しましょう。それではお気をつけて」

22．「イヤに決まってんだろ！！」

地下への階段をゆっくり進む。

自分の足音が何重にも響いて耳が少しくすぐったい。端が崩れかけている階段を慎重に降りていくと、ちょうど５０段で地下室に辿りついた。

フェリンから貰った白ダイヤは思った以上に明るい。体の周りでふよふよ浮かんでいる光の玉は、俺が歩く方向へ正確に追従する。おかげで光が一切届かない地下室でも周りをよく見渡せた。

「うえー、いい趣味してるな」

地下室には、壁に並んでぶら下がっている鎖、鋸のような刃物、棘がびっしり生えている鉄の棒、棺のような形の箱（中に大量の針）などが無造作に置かれていた。全て不吉な色のシミがこびり付いていて、実際に使われたことが伺える。

この部屋はあまり広くない。正方形の床一辺の長さは歩いて１０歩程度で、奥には隣の部屋へ続く錆びた扉がある。

気分が悪くなるような臭いが漂うここには、人の気配が一切感じられない。生者といえば足元でチョロチョロしているネズミだけだった。

部屋の扉に手をかけると意外にもアッサリ開きそうだった。錆びを削ぎ落とすような音が耳に痛い。顔をしかめてぐい、と扉を押すとパラパラと何かが落ちるような音がした。

次の部屋には、一つの椅子だけが真ん中にぽつんとあった。両手と両足を拘束する革のベルトがあるので、これも一種の拷問用具なのだろう。既に白骨化した誰かの遺体がだらりと座っていた。

あんまりこういうのは好きじゃない。魔界にはゾンビも生息しているけど、だからといってあの顔を近くで見たいとは思わない。例えばこのガイコツがいきなり元気に話しかけてきたらと思うと気味が悪い。

「えぇ～、それ差別ですやん。ガイコツがしゃべったらイカンのですか」

真っ白いガイコツに炎の弾を投げつけた。おまけにそのままカチコチに凍らせて、止めに顔くらいの岩を投げつけた。

がっしゃん、と乾いた音をさせて骨が散乱する。

「……、」

「も～、いきなり何をするんですかァ」

「黙れガイコツが！　心臓に悪いんだよ！」

バラバラになったはずの白骨がブルブル震えて氷を振り落とす。カシャカシャと音を立てて動き出す。原型を留めないほどボロボロだった骨が、まるで時を巻き戻すように組みあがっていく。

数秒ほどで元の姿に戻ってしまった。

「ふー」

どうやら一息ついているらしい。肺すらないのにどうやってんだお前。

「え、ワイそんなにカッコイイ？」

どうしよう、このガイコツすごく鬱陶しい。

サクッと殺ろうにも既に死んでるし、壊しても眉ひとつ動かさずに元に戻りやがるし。

「いやいや、眉なんてありまへんから」

「やかましいわ！　さらっと心読むんじゃねえよ！」

「顔に思いっきり出てますやん。そんなんじゃ他の骨にもモロバレでっせ」

なぜ骨に説教されなきゃならんのだ。つーか俺の表情ってそんなに解り易いのか。

「まーまー、そんな怒らんといて。イライラしたら体にもよくないでっせ。……そや、ワイの骨でも舐めます？」

「イヤに決まってんだろ！！」

ああもう、こんなに叫んだのはリアと出会ったとき以来だ。

肩で息をしていた俺は軽く咳払いをする。骨はカタカタと笑うような動きをした後、人差し指だけを立てて、横に軽く振ってみせた。

「やっと落ち着きはったかいな。ワイがカッコよくてビビる気持ちはわかるけど、もう少しどっしり構えへんと。そんなんじゃ周りに振り回されっぱなしになりまっせ」

落ち着け俺。深呼吸だ。こんな地下室で殲滅級の魔法なんて使ったらダメだ。アイツはいつか完全にバラバラにして１００匹くらいの犬に骨を一本ずつ食わせてやる。その時まで我慢だ。

そんな俺の心の内なんてこのガイコツは全く気にかけていない。

パキパキと関節を鳴らして体を揺すり、手足を思い切り伸ばして、筋肉をほぐすように軽く運動をしている。

しばらくすると終わったのか、腰の辺りに手を当てて大儀そうに息をはいた。

「いや～、それにしてもこないな古びた城に来るなんて、兄さんもかなりの変人ですなァ」

そうだった。すっかりペースを乱されてしまったが、此処に来た理由は緑オーガと古文書だった。あと、お前以上に変なヤツなんていない。

「なあ、この城にオーガが住み着いているって噂なんだけどさ、お前何か知らないか？」

「あ～、ちょっと待っててな……ネズミちゃんは、少し前に他所者

が入ってきはったって言ってますなァ」

骨のくせにネズミの言葉がわかるのか。変な骨だ。

話を詳しく聞いてみると、それがオーガかどうかまでは判らないみたいだが、最近になって誰かが住み着いているらしい。

「そうか、じゃあこの城の何処かには居るんだな？」

それが解れば十分だ。

これ以上コイツに関わると何か色々大切な物が吸われていく気がする。さっさとこの空間から脱出しよう。

俺は努めて後ろからの気配を無視してドアを開けて５０段を一気に駆け上がり不完全な床の蓋を氷で丁寧に固めてやった。

よし、封印完了だ。

「ほい、そんじゃ行きましょか」

「！？」

……と言う訳で、俺はガイコツと行動を共にする事になった。

＊　＊　＊

念のため一度中央階段に向かったのだが、まだ誰も戻っていなか

った。地下と地上階では広さが全然違うから当然だろう。

ただ待つのも退屈だしガイコツが構って欲しいと五月蝿いので、結局俺と骨は並んで別の場所へ向かう事になった。

「いや～、城内を歩き回れるなんて随分久しぶりやから嬉しいですわ。ほな早速1階から捜索しましょか」

カシャカシャと音を立てながら白骨死体が歩く。弱い風が吹けばバラバラになりそうな歩みだが、バラバラになったとしても当然のように再生しやがるので心配は無用だ。むしろバラバラにしたい。

魔界にも骨だけの魔物は存在する。しかしそれは一旦壊れてしまえば再生不能で、そのまま朽ち果てるのが普通だ。ごくまれに強い力を持つ固体も存在するが、骨を粉々にされてなお平気な顔して再生するなんて話は知らない。

「おいガイコツ。お前はこの城に住み着いて長いのか?」

「そ～やねえ。長いような、短いような。ワイ自分のことってあんまり良く知らんのですわ」

過去の記憶は殆ど無く、目を覚ましたら俺が目の前に居たという。

「兄さんのお陰で目が覚めたんやろね。ホンマにラッキーやわ」

目覚めの理屈は良く解らんが、俺はアンラッキーだ。

この光景をフェリンが見たらどんなリアクションが返ってくるのだろう。サキの場合は俺ごと切り捨てそうで非常に怖い。リアは最

初驚くだろうけど、平気な顔して挨拶しそうだ。

「そうそう、兄さんの他にも三人程お仲間が遊びに来てるみたいやね。目的は同じなんで？」

「ああ、用が済んだらすぐ帰るから安心してくれ」

心配なんてしていないだろうけど。

「ん～」

眉の間のやや下あたりを揉み解すような動き。なにやら考え事をしているらしい。いちいち仕草が人間臭いガイコツだ。

「探してるのは、オーガの男やね？　……うーん。どうもおかしいなァ。気配が見当たらんのですわ。お仲間三人の気配はよ～くわかるんやけどなァ」

女の娘やろ？　と当ててみせたガイコツの意見が正しいのなら、ここは空振りだったのだろうか。それならそれで早く帰れるからいいけどさ。

「ひょっとして、あそこへ逃げ込んだのかなァ。面倒なコトは勘弁して惜しいんやけど」

「隠し部屋でもあるのか？」

「そうなんですわ。他所モンはまず気付かない仕掛けなんですけどな、城主の隠し部屋がひとつ有るんです。その部屋はちょいと特殊なのでワイの探査に引っ掛からんのですわ」

「へー。それってどうやって入るんだ、お前知ってるんだろ」

「ほい。確か、え～と」

汗を拭くような仕草は絶対に必要ないと思うのだが、どうも拘りがあるらしい。「ん～～～～～」と不気味な唸り声を出しながら腕を組んだガイコツは、散々待たせた挙句「忘れましてん」とやる気のなさそうな口調で答えた。

がっしゃん。

「兄さんヒドイわ！　いきなり人の体バラバラにするなんてアンタ鬼か！」

うるさい。せめて体を元に戻してから喋りやがれ。

先程からガイコツの進むままに歩いていたが、なかなか探索は終わらない。1階の通路は奥に入ると迷路のように無駄に曲がりくねっているので、単純なつくりの地下と比べて相当に広く感じる。一応各部屋に立ち入ってオーガの姿を確認しているけど、気配すら感じられなかった。

6つ目のドアを開けて部屋に入ると、丸い形の井戸があった。

「……何も見えないな」

自分の声が反射して幾重にも聞こえる。

明かりの一つを井戸の底へと向かわせてみた。しかし光が点になるほど深く潜っても、まだ底までは遠いようだ。

「ここは山の上やから、めっちゃ深くまで掘らないと水なんて出ないんですわ。この井戸にしてもあまり使い勝手はよろしくないですし、ワイ汗っかきやから顔を洗うのも一苦労ですわ」

白骨死体がどうやって汗をかくのか見てみたい気もする。

「……まだ届かないのか」

ダメだ。これ以上深くはここからじゃ見えない。もしかしたら井戸の中に潜んでいるかもと思ったけれど……まあいいか。俺なら絶対にこんな所に隠れたりしない。

「ん？」

井戸の淵に何やら文字が刻まれていた。引っ掛かるものを感じた俺は明かりを呼び寄せて顔を近づける。光に照らされたそこには、埃とカビだらけの文章が刻まれていた。

「”見目麗しくとも天寿天命は”……何だろコレ」

「ふむふむ、なんかワイの灰色脳みそとハートが囁きますわ。これは覚えておいた方がよろしいですぜ、兄さん」

脳も心臓も見当たらない相手に言われても全然信用できないけどな。

「ま、いいか。大した長さでもないし」

一応頭の片隅に残して、俺は探索を続けた。

＊　＊　＊

それからは本当に何のイベントも発生しなかった。相変わらず何の気配もしない空間は俺とガイコツが歩く音だけが響き、ネズミすら姿を見せない。無駄に歩かされたこのフロアも、とうとう最後の部屋を終えてしまった。

「まだ誰も来ていないのかよ……」

集合場所の階段前に再びやってきたが、相変わらず誰もいない。

幾らなんでも遅すぎやしないだろうか。フェリンにも会わなかったし、まさか何かトラブルでも起きたか？　……いや、あの妹に限ってそれはないか。リアもサキも、黙って負けるほど弱くないし。

「兄さん、そりゃ女のコはもっと時間掛かるでしょ。こないな薄気味悪い城内を女ひとりで探索させるなんて、兄さんも良い趣味してますなァ。『きゃー！』って言いながらネズミに追いかけられる姿を想像して、楽しんでるんでっか？」

なんだよその悪趣味。

そもそもあの三人はそんな気質じゃない。もしお前が見つかったら、悲鳴を聞く前に塵も残さず葬られる可能性の方が高い。そう教えてやったのに、骨には理解できなかったようだ。

「ほほう、そりゃますます面白いでんな。ガイコツの意地にかけて

も悲鳴くらい引き出してみせまっせ」

そうニヤリと笑うと（何故か笑ったように見えた）ガイコツは階段を上ってゆく。

放置するのは何となく不安なので、仕方なく俺も2階へ向かった。

23．隠し部屋への道（前書き）

こんにちは。ここまで読んでくださってありがとうございます。

今回ちょっとした謎解き要素を入れてみたのですが、携帯からご覧になっている方は、ズレて表示されるかもしれません。ごめんなさい。可能ならばパソコンからご覧下さい。

23．隠し部屋への道

2階へ到着して少し移動すると、1階と繋がっている大きな吹き抜けがある。それを挟んだ反対側の壁に馬鹿でかい肖像画があり、俺を見下ろしていた。

一階からでもぼんやり見えていた絵だが、近くで見ると細部までよく見える。長く放置されているのでボロボロだが、人を食ったような笑顔の男が描かれていることはちゃんとわかった。くすんだタイトルプレートには”城主　エドガー・アラン”と書かれていた。

「カッコイイでんな～」

「そうか？　肖像画で舌を出してるなんて相当の変人だろ」

カタカタと骨を鳴らすガイコツのセンスは良くわからない。

……なんだこれ。プレートの下にさらに石が嵌め込まれているのだが、そこにも文が彫られていた。

「”九重の天に住むものは、位の高きものが先頭に立つ。我に会うことを望むなら、４人を正しく導くことだ”……また変な文章が出てきたな」

「兄さん、こっちにもありまっせ」

１２３４
四ＡＢＣＤ　薔薇の根
三ＯＰＱＲ　敵葬の溝

二ＧＨＩＪ　奈落の淵
一ＴＳＴＵ　絶望の莚

……なるほど。　これが隠し部屋への道しるべなのか？

「兄さん？　そんな腹痛が三日も続いたような顔して、どうしはりました？」

どんな顔だよ。失敗した彫刻みたいな顔に言われたくねえよ。

「これは後回しだな。それよりもフェリンたちを探す方が先だ」

一体どこを遊び歩いてるんだろう。俺だけ除け者にして帰ったんじゃないだろうな――おいガイコツどこへ行く。

「ひひひ、子猫ちゃんを見つけましたわ。見ててや兄貴、カワイイ声を聞かせてやりまっせ」

浮かれた声色の骨が怪しい動きでコソコソと西の通路へ走ってゆく。乾いた足音が聞こえなくなると、耳が痛くなるような静寂が訪れた。

今までガイコツのせいで忘れていたが、この城は本当に音がない。こんな所で誰かが叫んだら確かによく聞こえるだろう。簡単に声を辿れそうだ。

「ギャアアア～～～～！」

……あっちか。

予想通り聞こえてきた骨の悲鳴を、俺は辿る事にした。

＊　＊　＊

「何なのこの不快な珍獣は。このわたしが壊せないなんて有り得ないわ」

手にした”扇子”という道具を苛立たしげに少し開き、すぐ閉じる。フェリンは癖のようにその動きを繰り返しながら、バラバラになった骨が再生する様を不満げに睨んでいた。

「こんな所で何やってんだ。もう1階の探索は終わってたのか？」

「あらお兄様。思ったよりもずっと早かったわね」

1階の探査を早々に終えたフェリンは、サキの探索を手伝うつもりで2階に来たという。そんな事をするなんて、妹は本当にサキを気に入っているらしい。

「お兄様さえ許してくれるのなら、本当に連れて帰りたいわ」

「ダメだっての」

じいさんが知ったら多分腰を抜かすから勘弁してやってくれ。サキを頼むと言われた手前、自分から約束を破るのも寝覚めが悪いだろ。

「はいはい、お兄様は相変わらずね。それで地下はどうだったの？」

「残念ながら、収穫はあの骨だけだ」

収穫ではなく被害と表現した方が正しいかもしれない。

フェリンは呆れたように扇子を広げて顔を仰ぐ。そんな非難するような目で見ないでほしい。

「……わたしもオーガについては収穫なしだったわ。そうそう、1階の井戸で妙な一文を見つけたの」

同じ文を諳んじた妹は興味深げに笑う。

「吹き抜け近くの壁に大きな肖像画があったでしょう？　そこに示されていた文も興味深いし、きっとこの城には何かあるわね」

「……ここにあまり長居はしたくない、なの」

辺りを窺うように、フェリンの背後からサキが顔を出した。この城の雰囲気があまり好きではないらしく、普段の泰然とした姿とはまるで違っている。体を縮めて、足元で呻いているガイコツを泣きそうな目で見ていた。

「ぐおお、なんつ～強力な一撃や。もう少しであの河を渡るとこやった」

「お前もう死んでるだろ。どこの河を渡るつもりだ」

……それにしても不可解な程の耐久力だ。完全にバラけた骨は先程と同じようにどんどん組みあがっていき、すっかり再生してしま

った。

「全部の部屋を探したけど、結局二階には居なかった、なの」

ガイコツの予言を証明するように、この階にも鬼はいない。まさかとは思うが、オーガは本当に隠し部屋とやらに潜んでいるのだろうか。

「まだリアは帰ってきていないよな。ついでだから三階も行ってみるか」

「お兄様」

今までより少しだけ冷たい声で、フェリンが俺を遮る。

「リアさんのお迎えはお兄様にお願いしても良いかしら。その代わり、わたしとサキちゃんは肖像画の方を調べますから」

「お前、相変わらずそういうの好きだな。別に良いけど、サキに襲い掛かるなよ」

「大丈夫よ。ちゃんと合意の上で襲うから」

「……もしも不埒なことされたら遠慮なく斬って良いからな」

「……なの」

さて、行くか。

「あれ？　ワイは？」

＊　＊　＊

階段を上り3階に到着した。

通路を進んですぐのところで、大きな扉が通路を密封するように立ち塞がっている。ギィ、と音を響かせて扉をくぐると、その先は今までと様子が違っていた。

空気が重く湿っている。床も水らしき液体で濡れていて、溜りになっている部分もあった。

「なんだ、ここだけ雨でも降ったのか？」

「イヤイヤ兄さん、ここはこういう場所なんですわ。研究のために、ここはいつも過剰なくらいに湿気ってるんや」

水棲生物が快適に過ごせるように、意図的にこんな環境になっているらしい。

城主は長い間生物の研究を繰り返しており、外の堀にいたバケモノもその成果の一つだという。

「昔は1階の井戸から水を汲んでいたんやけど、ここの研究が進むうちにそれも要らなくなったみたいですわ。なんでも水を無限に生み出す生物とかもいたみたいでっせ」

眉唾モンですけどな、と喋るガイコツ自体が奇跡の存在なので、そんな変な生物も実在するのかもしれない。

「この分やと、まだ生き残ってる巨大生物とかが徘徊してるかもしれへんね。リアちゃんやっけ？　彼女は大丈夫かいな」

それはきっと余計な心配だ。あいつがただデカイだけの相手に負けるとは思えない。

「それで、リアの居場所はわかりそうか？」

「ほいほい兄さん、今度こそ御所望の可愛い悲鳴を聞かせたりまっせ」

「誰も頼んでねーよ」

まあまあ、と下品に笑いながらガイコツが眉間を揉むような動きをする。リアの気配を探しているのだろうか。うつむき気味の姿が置き物のように僅かも動かなくなり、周囲が静かな緊張に包まれた。

「あ、レオンさん？」

「ギャアアア！！　出たァ！？」

茶色い悲鳴を上げた骨がひっくり返り、床に打ち付けた衝撃でまたバラバラに散乱した。存在自体がホラーの癖に、実はかなりのビビリらしい。

リアはきょとんと骨を眺めていたが、さして気にする訳でもなくこちらを向く。

「レオンさんのお友達ですか？」

断じて違うわ。

「アレは無視してくれ。それより、もう終わったのか？」

お前とんでもない方向音痴だったはずだけど、ちゃんと見て回れたのか？

「エクちゃんがサポートしてくれたので、なんとか大丈夫でした。でもこの階にオーガさんはいなかったです」

……ここもハズレなのか。ということは本当に隠し部屋に潜んでるのかもしれない。

「なあリア。この階のどこかで変な文章を見なかったか？」

「文章、ですか？」

気が進まないが、こうなったら隠し部屋ってのを見つけるしかない。今頃フェリンがサキと考えているあの謎文を解けば、きっと隠し部屋の場所が示されるのだろう。しかし、解くにはまだ必要なピースが足りていない筈だ。

「ごめんなさい、気付きませんでした」

リアが申し訳なさそうに首を振る。

「イヤイヤ、気にすることはおまへん。ワイが手取り足取りエスコ

ートするさかい。うひひひひ」

「そうですか？　ありがとうございます」

にこやかに笑うリアとカタカタと笑う骸骨は、そのままてくてくと歩いて行ってしまう。

……なんだろう、すごく負けた気がした。

＊　＊　＊

「それにしても、本当に喋る骸骨さんなんているんですねー」

「俺はお前のリアクションの方が驚いたけどな」

まさか眉一つ動かさずに受け入れるとは思わなかった。

「兄さん、無言でワイをバラバラにするの止めて～な……」

うるさい。

また新たな部屋に入ると、怪しい色をした液体がなみなみと注がれたビンが所狭しと並んでいた。奇妙な形の何かが、中でクルクルと回っている。

「何だこの部屋は。気味が悪いな」

「様々な実験生物の保管場所みたいですね。……うーん、特に文章

はありませんね」

井戸の文章も偶然気付いただけだし、全部を見つけるのは相当の根気が必要そうだ。

……それとも、何かヒントでも見逃しているのだろうか。

「奈落の淵、か」

1階の文章は井戸の側面に書かれていた。これは”奈落の淵”という一文が示していたのかもしれない。

記憶から文章を引っ張り出す。

薔薇の根
敵葬の溝
奈落の淵
絶望の莚

この館は地上3階と地下1階の4階構造になっている。そして1階井戸にあった文章を示すと思われる”奈落の淵”は下から2番目の文だ。文の位置が階を示すのならば、3階の文を示すヒントは”薔薇の根”なのかもしれない。

「この階で薔薇なんて見たか？」

「バラですか？　……あ。そういえば、向かいの部屋で寂しそうに一輪だけ咲いていました」

リアの案内でそこへ向かう。

実際に見てみると確かに棚の上に花瓶があり、黒い薔薇が一輪刺さっていた。その根ということは――

「あった」

花瓶の底を確認すると、意地悪なほど小さな文字が書いてあった。

「”赤薔薇もつ貴公子の”……多分これだな」

これで2つ。恐らくは2階と地下のどこかにもある筈だ。

俺達はフェリンと合流する為、2階の大きな肖像画まで戻ることにした。

＊　＊　＊

フェリンたちの所へ戻ると、肖像画の前で妹が難しい顔をしていた。どこからか椅子を用意して座り込んでいる。

「むー、やっぱり考え方が違う気がするわ……」

「……、にゃの」

案の定サキはフェリンに撫で回されていた。サキはもう色々諦めたらしく、大人しくフェリンの膝の上に収まっている。サキの頬をぷにぷにしながら、妹はこちらに目線を向けた。

「あらお兄様。やっぱり3階にもいなかったみたいね」

「ああ、ガイコツが言うには隠し部屋に潜んでいるらしいけど」

「隠し部屋ね……いるとすれば、もうそこしか考えられないわね。そうそう、3階の文章は見つけてきてくれたかしら」

既に2階から地下までは発見済みだという。俺はフェリンに3階の文を告げて、4つ全てを並べてみた。

”見目麗しくとも天寿天命は”

”赤薔薇もつ貴公子の”

”刹那のみの幻のひと”

”手足胴すべては脆く”

そして、意味ありげに肖像画の下に記された文章は次の通り。

”九重の天に住むものは、位の高きものが先頭に立つ。我に会うことを望むなら、4人を正しく導くことだ”。

１２３４
四ＡＢＣＤ　薔薇の根
三ＯＰＱＲ　敵葬の溝
二ＧＨＩＪ　奈落の淵
一ＴＳＴＵ　絶望の莚

恐らく、必要なピースは全部ある。これを解けば隠し部屋への道

筋が示される筈だ。日が暮れるまでには終わらせたいもんだ。

２４．隠された部屋（前書き）

こんにちは。ここまで読んでくださって有難う御座います。
今回は残酷描写にあたりそうな内容がありますので、苦手な方はご注意ください。

24．隠された部屋

”九重の天に住むものは、位の高きものが先頭に立つ。我に会うことを望むなら、４人を正しく導くことだ”

まずはこの文章から考えよう。

「”４人を正しく導く”……この４人ってのは俺達が見つけた４つの文章を指してるっぽいな」

「そうね。ついでに言えば”位の高きもの”とは、それぞれの文章が書かれていた階を指す、と考えると良いかもね。文章を3階のものから並び換えてみましょうか」

これくらいは解ってるわよ、と言いたげにフェリンが壁に文字を書く。薄暗いこの城でも良く見えるように、淡く発光した文字が浮かび上がった。

”赤薔薇もつ貴公子の手足胴すべては脆く見目麗しくとも天寿天命は刹那のみの幻のひと”

……並び替えても意味が良くわからない。

貴公子ってのは誰なんだろう。城主を指すのかと思ったが、肖像画を見る限り赤い薔薇なんて見当たらない。

「一応この城に赤い薔薇がないか探したけれど、少なくとも2階までは無かったわね。3階はどうだったかしら」

「黒い薔薇ならあったけどな」

赤い薔薇はリアも見なかったという。

「きっとこの文章だけで考えてもダメだと思う、なの」

フェリンの腕の中で静かだったサキが、もぞりと体を動かした。
小さな手が指したのは、肖像画の下に記されていた表らしきモノだ。

１２３４
四ＡＢＣＤ　薔薇の根
三ＯＰＱＲ　敵葬の溝
二ＧＨＩＪ　奈落の淵
一ＴＳＴＵ　絶望の莚

”薔薇の根”などの文は、既に発見した４つの文章の場所を示している。しかしその隣にある表らしきモノをどう使うのか解らない。

「……そうね、文を書き換えるわよ」

フェリンが指を振ると、壁に書かれていた文字が変化した。

１２３４
四ＡＢＣＤ　”赤薔薇もつ貴公子の”
三ＯＰＱＲ　”手足胴すべては脆く”
二ＧＨＩＪ　”見目麗しくとも天寿天命は”
一ＴＳＴＵ　”刹那のみの幻のひと”

「ちょっといいですか？」

ここでリアが律儀に手を上げた。「大したことじゃないですけれど」と前置きしてから自信なさ気に言う。

「〝もつ〟、〝すべて〟、〝ひと〟はカナで示されていますよね。草書にせずにカナで示されているのが、ちょっと不思議だと思ったんです」

……ひょっとして。

「――ああ、そういうコトでしたの」

若干不機嫌そうな声を出したフェリンがサキを開放して肖像画に手を触れる。暫く丁寧に調べていたが、どうやら目的のモノは見つからなかったらしい。忌々しげに嘆息した妹がリアを睨んだ。

「これ以外に、３階にも肖像画があるわね？」

「はい、ひとつ在りましたけれど……」

「案内してくださる？」

俺が口を挟む間もなくフェリンは階段へと消えてゆく。リアが少し慌てたようにその後を追っていった。

俺は……まあいいか。あの二人なら余裕だろうし、ここでのんびり待つとしよう。

＊　＊　＊

魔王から離れて三階にやってきた二人が無言を貫いて歩いてゆく。フェリンの足音はやや鋭く、リアの足音は控えめだ。水浸しの廊下を真っ直ぐ進んで5つ目の扉に入ると、黒い水で覆われた床が二人を出迎えた。

「転んじゃわないように、気をつけてくださいね」

「……ふん」

リアの忠告にフェリンは答えない。少し困ったように笑ったリアが背を向けて再び歩みだす。足元に広がる水が音も無く割れて、二人の通り道にだけ床が顔を出した。

「余計なお節介を……貴女、とっくに解けていたのでしょう」

「そんなことないです。考えすぎですよ」

そういう割には、3階の肖像画について何の疑問も口にしない。忌々しげに唇を歪めたフェリンは一つ大きく息を吸い、鼻につく不快な臭いに思わず顔を顰めた。

「これが肖像画です」

リアが小さな額縁の前で停止する。やはりかなりボロボロになっているが、描かれていたのが人形だということは見て取れた。関節

が明らかに作り物で、口も四角く切り取ったように開いている。人形は片目を閉じてこちらに笑みを向けていた。

フェリンがその額淵を触ると、固定されているはずの額縁が右に少しだけ動く。そのままやや強引に動かすと壁に小さなボタンが現れた。迷わずそれに触れると背後にあった本棚がガタガタと揺れ、耳に痛い音をさせながら右へと移動していく。暫く待つと黒色の扉が姿を現した。

「……わたしが片付けるわ。貴女はそこに居なさい」

フェリンが扉を開く。リアはただ黙ってその後姿を見送った。

＊　＊　＊

扉の先はフェリンの予想以上に広かった。黒い扉があった壁の向こう側は、本当なら城の外に出てしまう筈だ。しかしフェリンは見知らぬ部屋に確かに立っている。

「成る程。道理で気配も感じない訳だわ」

ここは一種の異空間だった。「この部屋に篭って研究でもしていたのかしら」と小さく呟いたフェリンの声はもちろん、どんな大きな音でも外には漏れない。おなじく外部の音も内部には届かない。外部から隔絶された空間だ。

部屋は本棚で埋め尽くされていて、迷路のようになっていた。入り口以外の壁も全て本棚が占拠していて、フェリンの5倍はあろう

かという高さの天井ギリギリまで置かれている。こんな高さだと普通は手が届かない。

「ここの主は中空に浮く魔術も使えたということかしら。変わった人間ね」

部屋の奥にある大きな机には、１０冊以上の本が山と積まれていた。床に敷かれた絨毯の上にも、机から零れ落ちたように3冊ほど散乱していた。

「……無駄よ。そんな大きな図体をして隠れられるなんて思わないことね」

既にフェリンは気配を捉えている。前方奥の本棚の影に立っていることも、その額に冷たい汗が流れていることも、激しい鼓動に耐えながら息を潜めていることも、彼女は手に取るように理解していた。

「あの宝物庫に侵入（はい）れただけでも大した物だけど、こんな所まで逃げ果せるとはね。今後の為にも犯行方法（やりかた）を教えて貰えるかしら？」

オーガが潜む本棚に歩み寄る。無防備に姿を晒したフェリンに向かって、大きな腕が鋭く伸びた。

「ギッ――」

「あいにく、今日は機嫌が悪いの。だから遊ぶのはナシにするわ」

フェリンの目前まで迫っていた鋭いツメがビタリと静止する。ブルブルと腕が痙攣するほど力を込めているのに、そこから先は僅か

も前に動かない。

太い血管が浮いて震える腕に、細い指が触れる。

メキッと音をさせて、オーガの腕が飴のようにぐにゃりと曲がった。

「ガ――――」

「五月蝿い。耳が穢れるから黙りなさい」

銀の髪を彩るリボンが解けて中空に浮く。蛇のように鋭くオーガの首に巻きついて叫び声を絞め殺した。浅黒い肌の首に食い込むリボンは容赦なく力を強め、オーガの首がギシギシと軋んだ。

「……なるほど。古文書はそこに隠したのね？」

体を大きく揺さぶり暴れまわるが、どうしてもフェリンには届かない。顔を赤くしたオーガが枷を引き千切ろうと首周りに手をかけた。呻き声を撒き散らしながら太い腕に精一杯力を込める。しかし、リボンはまるで鋼鉄のようにビクともしない。

空気を求めて口を大きく開けても、リボンは首に食い込み呼吸を許さない。オーガの目が血走り足が震え膝が折れて地面を這う。それをあざ笑うように、フェリンはさらに相手を締め付けた。

「ッ……ッ……」

苦しげに頭を地面に擦り付ける。だらしなく零れた唾液が絨毯に染みをつくる。その様を無感動に眺めて、フェリンの細い指先が仄

かに暗い光を宿した。黒く彩られた爪の先は、背後からオーガの心臓を狙っていた。

「えいっ」

フェリンの背後から黄色いツブテがぽいと投げ込まれ、オーガの背に当たる。まばゆく発光した途端に大きな体が揺らめいて、吸い込まれるように消えてしまった。

ぽとりと絨毯の上に落ちたそれは、黄色いダイヤだった。

「殺しちゃうのはダメですよ」

しゃがみ込んだリアがダイヤを拾い上げてフェリンの掌に落とす。親指ほどの大きさがあるダイヤの中で、グッタリと倒れたオーガが浅く呼吸を繰り返していた。まだ辛うじて生きている。

「……なにをしているの？」

「目的は古文書なのですよね？　盗みを働いたことは確かに許されないですけれど、もう十分懲らしめられた筈です。ちゃんと本を返してくれるなら、それで許してあげてくれませんか？」

「許す？」

掌上のダイヤを強く握りこんだフェリンの声が、酷く温度を下げる。

まっすぐの瞳を向けてくるリアを薄く笑い、細かく体を揺らした。

「流石は勇者様、って所かしら。こんなクズにまで救いの手を差し伸べようとするなんてご立派ね。でもね」

淡く光ったダイヤが崩れ、オーガの巨体が絨毯の上に投げ出される。緑の瞳を恐怖に染めて逃げようとする背中に、リボンが幾重にも突き刺さった。

「このクズが犯した罪は万死に値するわ。正当な裁きを下すことに一体どんな問題があるというの？」

オーガの体がビクッと大きく震えた。肉を抉り心臓を握り潰したリボンがまるで紙のように巨体を引き裂き、大量の鮮血がぶちまけられた。

「ひどい色ね。汚らわしいわ」

フェリンが血で濡れたリボンの先端を切り落とす。生きているように蠢いていた髪留めは落とされた部分を再生し、静かに宿主の元に納まった。

周囲が淡く発光する。肉塊となったオーガは地面に染みこむように消えていった。

「大丈夫よ。古文書の隠し場所は、ちゃんと記憶を探っておいたから」

残された夥しい量の鮮血が絨毯に染みを広げてゆく。それを無言で見ているリアに向けて、魔界の姫は優雅に微笑んだ。

25.「嘘？」

「……だからな、この文章の内容自体には意味なんか無くて、重要なのは草書とカナの文字数なんだ」

例えば”赤薔薇もつ”は草書3文字とカナ2文字になる。こんな風に文章を数字に置き換えると、次のようになる。

”赤薔薇もつ貴公子の”　⇒三２　三１
”手足胴すべては脆く”　⇒三４　一１
”見目麗しくとも天寿天命は”　⇒三４　四１
”刹那のみの幻のひと”　⇒二３　一３

こうして出てきた数を表と照らし合わせると、答えが出てくるのだ。

１２３４
四ＡＢＣＤ
三ＯＰＱＲ
二ＧＨＩＪ
一ＴＳＴＵ

三２⇒Ｐ　三１⇒Ｏ
三４⇒Ｒ　一１⇒Ｔ
三４⇒Ｒ　四１⇒Ａ
二３⇒Ｉ　一３⇒Ｔ

「という訳で、答えは”ｐｏｒｔｒａｉｔ”……肖像画になるんだ」

「ややこしい、なの」

そうだよな。誰だよこんな遊びを考えたヤツは。

「イヤハヤ、お見事ですわ。殆ど迷わずにアッサリ解きなはるなんて」

「……お前、やっぱりこれの解き方知ってただろ」

井戸の文章を偶然見つけた時も思わせぶりなことを言っていたし、材料が集まった直後から急に口数が減っていたし。俺が睨むとガイコツはカタカタと音をさせて笑った。

「不思議とこれは覚えてるんですわ。それにしても悔しいわ～」

「悔しいって、お前が作ったみたいに……もしかしてお前、ここの城主だったのか？」

ハッキリした根拠があるわけじゃないけれど、そんな気がする。しかしガイコツは曖昧に首を振った。

「う～ん、どうなんでしょ。これはホンマに正直に言いますけど、自分に関する記憶は殆ど無いんですわ。この城についての断片的な記憶ならパッと浮かぶことがあるんやけど」

「お待たせ。お兄様、サキちゃん」

ガイコツが首をひねっている間に二人が戻ってきた。妹の右手には例の古文書が収まっている。どうやら無事に終わったようだ。

誇らしげに笑う妹はすぐさまサキの元へと駆けてゆく。意外にもサキは大人しく捕まった。文句を言いつつも慣れてしまったらしい。

リアは「わたしは見ているだけでした」とだけ俺に言い、静かに隣に立った。普段の微笑みが消えて無表情になっているだけなのに、その横顔は沈んでいるように見えた。

「大丈夫か？　なんか顔色が悪そうだけど」

「ううん、なんでもないです。のーぷろです」

にぱっと笑って見せたリアの顔はいつも通りの笑顔だった。暫くじっと見ていたが、リアはにこにこと笑うばかりで何も言わない。……見たところ異変はないし、多分気のせいなんだろう。

「ふおおおおおお！？　ちょっとそこのお嬢ちゃぱぱぱァ！」

奇声を撒き散らすガイコツが五月蝿かったので反射的に頭部を掴んで引っこ抜いた。

「ちょっと！？　ひとの頭を毟り取るとか勘弁してや！！」

骨が手の中で顎をカタカタ振るわせる。こいつを黙らせるには一体どうしたらいいんだろう。ウンザリした俺をよそに、ガイコツは初めて聞くような真剣な声を出した。

「お嬢ちゃん。その薔薇ちょいと見せてくれまへんか？」

頭のないガイコツがリアに近寄る。指すのはリアが手にしていた赤いバラだ。

「あ、ごめんなさい。綺麗だったので思わず持ってきちゃいました」

「イヤイヤ、謝らなくてもええよお嬢ちゃん。ちょいと失礼」

「お前ら普通に会話してんじゃねえよ……」

隠し部屋の床に落ちていたというバラにガイコツの手が触れた途端、骨が淡く光る。薄暗い周囲をぼんやりと照らす光は、徐々に大きくなっていった。

「お、お、おおお？　これは、めっちゃ気持ち良いやんけ～。おっほ～～！？」

聞いている方が気分を悪くするような気色悪い声だった。今すぐ粉々にして止めさせたいなんて考えている間にも光は加速度的に強くなっていく。俺の手の中にあった頭部も淡い光になって、大きな光へ吸い込まれていった。

ガイコツは全員の視線を釘付けにしたまま白い光を撒き散らす。目を明けていられないほどに眩い光の中で、骨のシルエットが急に太くなっていく。破裂音が一度だけ響いて光が霧散した。

「赤薔薇持つ貴公子って、こういう事かよ……」

「いや～、まさかこの姿に戻れるなんて思わんかったですわ」

太陽を直接見た後のように目が痛い。そんな俺の前で、肖像画の男が笑みを浮かべていた。

＊　＊　＊

エドガーと名乗った男は、生前の記憶も思い出したらしい。俺達に無理やり握手を求めながら上機嫌で語りだした。

「ワイは錬金術者として結構色々な分野に手を出していたんですけどな、特に進んでいたのが生物についての研究やったんですわ」

錬金術師として一部では有名だったらしく、周辺国の有力者と取引しながら得た資金を元に研究に没頭していた。水を生み出す生物は水源が乏しい地域に破格の値段で売れ、巨大化した生物は様々な国から引く手数多だったという。

「ま、兵力としては正直微妙だったんやけど。この城の堀にいるミズゴショウって見た？　今もちゃんと生きてるのはアレくらいなんですわ」

それらはあくまで過程で生まれた偶然の産物に過ぎなかったらしい。

「ワイの目標は生の永続……有体に言えば永遠の命ってヤツやね」

「まさかその実験の結果、おまえ自身がガイコツになっても生きていたってのか？」

「そ～なんですわ。いや～、やっぱり肉体はどうしても朽ち果てる運命から逃げられないみたいや。魂だけ残してもやっぱりムリやった」

「でも、今はちゃんと元の姿に戻れていますよね。研究は完成したのではないですか？」

「イヤイヤ。これは裏ワザというか、ズルというか。すぐ消える幻なんですわ。……少し待っててください兄さん。渡したい物があるんです」

もうあまり時間がない、と笑ったエドガーは背を向けて歩き出した。

＊　＊　＊

「……結局何なんだよコレ」

帰ってきた部屋のベッドに寝転びながら、指に光る銀細工の輪を眺める。見た目も手触りも普通だし魔力も感じない。どこからみても、俺には普通のアクセサリとしか思えなかった。これをエドガーは「大切に持っててください。きっと兄さんの助けになりますから」ともったいぶった言い回しをしながら押し付けてきたのだ。

特に悪意のようなものは感じなかったので指に嵌めてみたのだけど……指から抜けなくなる、なんて古典的なトラップもなかった。炎を模したような意匠がなかなか好みなので、このまま使っても良いかもしれない。

結局あいつは俺に指輪を手渡した後、ただのガイコツに戻ってしまった。リアが持ってきた赤い薔薇は黒く変色し、二度と戻ること

はなかった。

「お兄様」

開いていた扉への静かなノックと共に妹が部屋に入ってくる。古文書をこれから母親に渡しにいくのだろう。

結局、俺はフェリンに正直に話すことにした。今まで行方不明だったのは異世界に閉じ込められていたからだということ。リアが助けてくれたこと。リアの目的はこの世界を平和にしたいということ。リアのお願いを聞く形で旅に同行していること。そしてサキと同行するに至るまでの簡単な経緯を、全部白状した。

本気で怒られることを覚悟していたけれど、フェリンの感情は怒りなんて次元を超えてしまったらしい。呆れたように笑った妹は「お兄様らしいわ」とだけ言って、それ以上俺を詰るようなことはしなかった。外見も性格も随分変わったけれど、兄に甘いところは変わっていないようで嬉しい限りだ。

ベッドに座る俺にゆっくりと歩み寄った妹がニコっと笑う。

「どうし――」

唐突にフェリンが俺の口を塞いだ。

「んっ……」と微かに漏れる吐息を感じる。両手で頬を挟んだまま、愛おしむように何度も俺の口を吸いながら、倒れこむように体を預

けてくる。くちゅ、と水気のある音をさせて何度も口中を確認してから、満足そうな顔が離れていった。

つう、と銀糸が落ちる。ちろりと赤い舌を出したフェリンは悪戯っぽく笑ってみせた。

「……ウソは言っていないみたいね？」

「誤魔化そうとして悪かったと思ってるよ」

「世界征服宣言が出任せだったなんて。お母様が知ったら何て言うかしらね」

どうだろう。恐ろしくて考えたくもない。

……でも俺に「世界征服してこい」と言った意図が未だに解らないんだよな。今更そんな事しても面倒ばかりでメリットなんて無いハズなのに。

親父だって自分が人間の世界へ侵攻したことはなかったはずだ。せめて死ぬ前に意図だけでも聞いておけば良かった。もう遅いけどさ。

「……本当に一緒に来ないの？」

「自殺する趣味は無いって言っただろ」

嘆息したフェリンは、それ以上食い下がらなかった。「またお仕事をお願いに来るからよろしくね」と告げて立ち上がり背を向ける。虚空から姿見を取り出して床に置くと、鏡面が水面のように波打っ

た。

「お兄様。これは忠告だけど、あのリアって女にはもう近づかない方が良いわよ」

「そんなこと言われてもな。お前が勇者を嫌ってるのは知ってるけどさ」

「大嫌いよ。奇麗事ばかり並べていい気になっているだけじゃない。虫唾が走るわ」

ひどい言い草だ。昔よりも勇者嫌いが強くなっているのかもしれない。再びツカツカと歩み寄ってきたフェリンは俺に顔をぐいと近づけた。１００％の不満顔だ。

「恩があるとはいえ、あんな女の言葉にほだされるだなんて……お兄様の好みが子供だとは知らなかったわ」

人のことを幼女好きみたいに言うんじゃない。一応魔王なのに変なあだ名がついたらどうするんだ。

「サキのことは好きなんだろ？　同じ人間なんだし、大きな違いがあるとは思わないけどな」

「サキちゃんは可愛いもの。外見はもちろん、心もね。彼女からはお兄様への恭順の意しか読み取れなかったわ」

フェリンは直に触れた相手の思考を覗くことができる。相手が警戒していると難しいという制限はあるが、物理的に強く接触すれば

強引に読めてしまう。フェリンは甘えるようにさらに顔を近づけてきた。

「サキちゃんの唇、ぷにぷにだったなー。ねえお兄様、ちょっとだけで良いから貸してくれない？」

「ダメ」

「いじわる。お兄様って独占欲強かったのね」

だから、そういう問題じゃないっての。

「……あまりお母様を待たせられないからもう行くけど。本当に気をつけてね、お兄様」

眼前にあるフェリンの不満げな顔が一転して曇る。昔の俺がいつも見ていた、本当に俺のことを心配しているときの顔だった。

「サキちゃんと違って、あの女はお兄様に嘘をついているわ」

「嘘？」

「正確には、本当のことを言っていないと表現したほうが近いかしら。あの女が本当に望んでいるのは、この世の平和なんかじゃない気がするの」

直接触れたわけじゃないから、ハッキリとは言えないけれど。そう言った妹はもう一度「気をつけてね」と繰り返して鏡の中へと吸い込まれていった。空気に溶けるように輪郭が薄くなり、完全に透明になる。無事に戻っていったようだ。

コンコン

ドアがノックされる。ベッドから立ち上がってノブを捻ると、リアがいつもの柔らかい笑顔のまま立っていた。

「そろそろお夕食の時間ですよ。一緒に行きませんか？」

「ああ、わかった」

今日はご馳走みたいですよ、と嬉しそうに笑っている。

フェリンにあんなことを言われたからだろうか。その笑顔が、少しだけ造り物のように見えた。

25.「嘘？」（後書き）

読んでくださってありがとう御座います。今回で2章終了になります。

26.「戦ってみたくないですか？」

勇者リア。

何を血迷ったのか魔王を仲間にして世界を歩く変なヤツだ。

トラブルを発見したら即座に頭から突っ込んでいく。そして俺は引っ張られる。今回のイベントも、始まりはそんな感じだった。俺の言葉も聞かずに突っ込みやがったのだ。

千人以上の兵士で埋め尽くされた、戦場のど真ん中に。

「ああもうっ、よくわかんないですけど戦争なんてしちゃ駄目ですってば！！」

「誰も聞いてないな……ん？　リア、よく見てみろ。ひょっとして――」

「もうっ！！」

俺の声はどうやっても聞こえないらしい。リアは大真面目に声を張り上げ続けていた。

話は少しだけ遡る。

ハイグレイの周辺国に楽しそうなイベントがないか調べたけれど、結局大した情報は集まらなかった。さて次はどちらへ進もうかと悩んでいたが、そもそも情報がないので決めようがない。そこで厳正

なるくじ引きの結果、北へと進む事になった。

移動手段として、ラインハルトのじいさんが”ラグビーク”という乗り物を貸してくれた。これは人の背の三倍程度の高さを浮遊しながら進むので、揺れが少なく馬車と比べて非常に快適だ。一見ただの絨毯にしか見えないが、サキは器用に運転している。楽しそうなのでその内やり方を教えてもらおうと思っている。

森林や山を避けつつ三日ほど進むと、国境にもなっている大きな河が見えてくる。これを越えた先にある”ウィクマム”という小国が次の目的地となる国だ。どんな国なのかよく知らないけれど、深く考えても仕方がない。リアと一緒にいると、どこへ行こうとトラブルと遭遇するような気がするから。

そんな俺の予感は見事に的中した。

河を越えた先には広大な平原があったのだが、そこで千人以上の人間が互いに刃を向けてハッスルしていたのだ。

予想外の光景に最初は面食らっていたリアだが、やがて初心を思い出したらしい。準備運動もそこそこに立ち上がると「せーの」と勢いをつけて飛び降りようとした。

「勝手に止めちゃっていい、なの？」

「……え？」

サキの疑問にリアの足が止まる。

この戦いにどんな意味があるのか、俺たちで勝手に判断しようにも情報はゼロなのだ。

どちらかに非があるのか、どちらにも正当な理由があるのか、それすらも解らない。いくらなんでもこんな状態で首を突っ込むなんて暴走しすぎだと思う。

だから冷静になろうぜとリアの袖を引っぱった。

「うー」

「唸るなよ……」

飛び込みは一旦踏み止まったのだが、未練がましくウロウロするリアに付き合わされること暫し。徐々に倒れる兵士の姿が目立つようになると、とうとうリアは我慢の限界に達した。

「傷ついて倒れていくのを黙って見ているだけなんて、私にはできませんっ」

とか言いながら戦場に突っ込みやがった。当然のように俺まで引っ張られた。

そして現在に至る。

どちらにも属さない俺達は、両軍から攻撃される最悪な状態になっていた。

リアは無謀にも「やめてください！」と叫んでいるが、完全に無視されていた。だからって昏倒させて止めさせようとするのは良いのだろうか。

暴走勇者は絶妙な力加減で気絶の山を築いてゆく。呆れ顔で見ている俺にもひっきりなしに攻撃が来るが、そんな事よりもリアに向かって「全軍中お前が撃破数トップ独走中だ」と教えてあげた方がいいかもしれない。

現在二位のサキも深く考えるのは止めたらしく、向かってくる相手を楽しそうに撫で斬りまくっている。二人を中心に気絶の山が見る間に大きくなっていった。

ちなみに、どんな心境の変化なのかサキはメイドさんの格好のままだ。「ちゃんと戦いやすいようにつくってある、なの」と言っていたが、戦場のど真ん中に立つにはかなり不適切な格好だと思う。ちらちらと覗く白い脚に相手の動きが止まるので、これはこれでアリなのかもしれないけれど。

暫くして、ようやく指揮官クラスが異常を察したらしい。合図らしき大砲がずどんと響いて兵士の動きが止まった。

「……あれ？」

リアがきょとんとした目で辺りを見回して、呆れた顔をしている俺の視線とぶつかる。

「よく見てみろよ。これは多分演習だ」

両軍の旗が色違いってだけで殆ど同じだし、兵士の剣は刃が潰されている。さっきから俺が何度も指摘しようとしたのに話を聞かなかったけどさ。

「え？　どうして？」

こんな馬鹿らしい事がキッカケで、俺達はまたしても厄介事と関わることになった。

＊　＊　＊

俺達は、当初の予定より一時間ほど遅れた頃にウィクマムに到着した。

この国は平原の只中にあり、岩を積み重ねた高い城壁に囲まれている。南側の門で入国審査が行われていたが、俺たちの審査は拍子抜けするほど簡単だった。どうやら演習での騒ぎが既に伝わっていたらしい。妙に腰の低い門番は、愛想笑いを浮かべて俺たちを迎え入れてくれた。

既に傾きかけている陽の光に染められて、国全体が鮮やかな赤みを帯びている。木材の建物が目立つ町並みは素朴でノンビリした印象だ。

人口の規模はハイグレイの三分の一程度。小国とはいえ数千人は暮らしているはずなのに、主要道路は人通りが少なく閑散としている。チラホラと見える住人はなぜか一様に不安げな様子だった。

密かに楽しみにしていた出店もほとんどない。個人的にはかなり残念な国だ。

「勧誘されちゃいました」

リアは演習に突っ込んだことを謝罪しに行っていたのだが、帰ってくるなり突然そんなことを報告してきた。

「勧誘されたって、まさか兵士に？」

「はい。『ぜひ我が国の力になって欲しい』と言われちゃいまして」

「リアっちはそれを引き受けた、なの？」

「まだ返事はしていないです。突然の話ですし、私だけの問題ではないですから」

ビックリした。今までのパターン通りに即座に飛びつくと思ったのに。

……そうか。そうだよな、いくらお前でも学習はするものなんだよな。演習に突っ込んだ事は忘れてやるから、別の場所に行かないか。この国は出店も少なくて退屈しそうなんだ。

そう主張した俺に向かって、リアは珍しく真剣な表情で俺に詰め寄った。

「レオンさん」

がっしと肩を掴もうとして目測を誤ったらしく、腕を掴まれた。

「是非ともレオンさんの力を借りたいのです。レオンさん以上の適任なんて、世界中を探してもいないんです」

「俺が適任？　一体何をさせようってんだ」

「勇者との対決ですっ！」

……突然お前は何を言い出すんだ。何かの冗談のつもりか？

困った。ボケがあまりにも前衛的すぎて理解できない。そう思い再度確認したところ、相手が勇者だというのはどうやら本当らしい。

訳がわからん。

「その勇者ってお前じゃないだろ？　勇者って何人もいるものなのか？」

「そーです」

「そーなのかよ！　勇者って一人じゃないのかよ！？」

「そもそもここで言う”勇者”とは、国がそれぞれ勝手に基準を設けて認めた人物に与える称号です。勿論わたしはちゃんと聖痕を受けた勇者ですけど、王様に認められただけの”なんちゃって勇者”が多数存在するのです」

本気で憤慨した様子で勇者の実像をレポートするリアは、眉根の角度が更に吊り上がっている。

「信じられない事ですが、自分で勝手に勇者だと名乗っている人まで存在するみたいなんですよっ。こんなことだから最近の勇者は質が落ちた、なんて言われちゃうんです」

そんなこと言われてるんだ。

魔王城近辺に来る勇者なんて滅多にいない。だから俺は勇者は一人きりだとばかり思っていたのだが、実はあっちこっちに存在するらしい。何だかありがたみが薄れる話だ。

「……それで？　俺にはまだ事情が飲みこめないんだけど。この話はスカウトされた話と繋がるのか？」

「この国の人たちが戦おうとしている相手が、勇者なんです」

「はい？」

俺には未だ話が見えない。

しかし前以上の厄介事になるという予感に、背筋がちょっとだけ寒くなった。

＊　＊　＊

全ての勇者には所属する国がある。国の全面的な支援のもと、自

国を脅かす存在に対抗するために選ばれた最高の戦士を、”勇者”とよんでいるらしい。

ということは、国の数だけ勇者が存在する事になる。しかしサキの国にはそれっぽいのが居なかったじゃないかと聞いてみたら「何年も前から空席、なの」という答えが返ってきた。その辺りはけっこう適当らしい。

このように例外はあるが、基本的に勇者は一国に一人任命される。そして自然と国の間でのランク付けが存在する。ランクの強さは絶対的ではないものの、国の人口と豊かさがそのまま比例しているらしい。

人が多いほど高い才能が生まれやすく、環境が整うほどその才能を開花させやすい、ということなのだろう。

そしていま俺達の話題になった勇者は、”セントアレグリー”という王国所属のヤツだ。

セントアレグリー王国は”勇者の国”とも言われる有名な大国であり、伝説の勇者として名高いアレキザイドの出身国としても知られている。

世界に最も多くの勇者を送り出してきたこの国は、正義の名の下に人々を苦しめる存在を排除してきた。世界的にもその権威は大きく国の規模も世界最高クラス。必然的に世界の物事の中心に位置している国だという。ランク的には最上級と言って差し支えないだろう。

そんな立派な国の勇者とこの国が何故戦う事になったのか。それは、俺もよく知ることになった日天玉が関係しているらしい。

「この国の日天玉をセントアレグリーに譲渡せよ、と言ってきたらしいんです」

それは無茶な相談じゃないだろうか。国の命を支えている心臓を寄越せと言っている様なものだろうに。

「当然断ったみたいなんですけど、そうしたら力ずくで……と」

話を聞いた限りでは、彼らが宝玉を奪おうとする理由はまだ不明らしい。色々と交渉したらしいが全て無駄に終わり、結局戦うことになってしまったという。

なんともタイミングの悪い時に立ち寄ってしまったみたいだ。住民の元気が無い理由はこれなんだろう。”正義の国”の勇者と対立するとなれば、戸惑いもするだろうし。

「まさか……相手は大国の勇者だから、あの程度の兵士じゃ束になっても敵わず無駄に死ぬだけだ。それなら代わりにそいつを懲らしめてやろう……とか考えたわけじゃないよな？　な？」

「大正解です！」

思わず顔を手で覆ってしまった。

「まだ向こうが悪いと確定した訳じゃないだろ。それに、この国の未来がどうなろうと大して興味も無いんですけど」

さっさと次へ行こうぜと言いたい俺に一言、悪魔の囁きが。

「戦ってみたくないですか？」

「ん？」

「勇者とです。レオンさん言っていましたよね、勇者と魔王は戦う宿命にあるって」

……まあ、勇者との対決っていう響きには、確かに惹かれるものがあるような気がするけどさ。

27.「どうしよう!?」

ウィクマムの王城は、今日も騒がしかった。

「あわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわ」

「何の動物のマネですか？」

「ちがうよ!!　ゆーしゃが攻めて来るんだよ!　宝玉寄越せって言ってきたんだよ!　ホントなんだよ!　どうしよう!?」

目の端に涙を浮かべた女の子が、大きすぎるローブから伸びる手足を振り回して喚いている。鮮やかな紫の髪がくしゃくしゃに乱れるのも構わずに、さっきからずっと同じようなことを叫んでいた。

そんな様子を前にして背の高い女性が美しい眉をひそめる。小さな花の意匠が刻まれた戦装束を纏う彼女は、空色の長い髪を揺らして息を吐いた。今日だけで五度目の溜息だった。

「ミズホ様。何度も申し上げたとおり、この国の長である貴女の決断を皆が待ち望んでおります。どうか落ち着いてください」

肩に手を置いて真摯に語りかける女性は、切れ長の目を優しく緩めて紫の髪を丁寧に整える。しかし、ミズホはローブが破れそうな勢いのまま口を閉ざそうとしない。

「セントアレグリーの勇者が攻めてくるってなんだよ無茶だよそんなの反則だよっ!　……ひょっとして反抗したら、悪いのこちら側って事にならない？」

「ええい、どうして貴女は私の胸ばかり触るのですか！」

「なんだか落ち着くんだもん」とミズホの顔が大きな胸に埋もれる。ぐにっと形が変わるほど強く膨らみを掴まれて、ロベリアは顔を真っ赤にしながらその手を引き剥がした。

「だってさ勇者だよ？　しかもあのセントアレグリーのだよ？　ロベリアだって大変だって思うでしょ？」

言いながら、ロベリアの眉間が一層厳しく寄ったことにミズホは少し怯む。それでもなお訴えようと口が動きかけたが、鋭い目がギラリンと確かに光って「ひぅっ」と身を縮ませた。

「確かにセントアレグリーともなれば、勇者の中でも特別な存在です。ある程度の無理ならば飲むのが外交的にも良策だと考えます。しかし、だからといって我が国の宝玉を差し出すとなれば話は別。断固拒否するべきです」

「それで思い切って断ったから、こんなコトになったんじゃないかぁ」

すでに泣いている女王の姿に頭痛を感じて、ロベリアはこめかみに指をあてて目を瞑る。最近癖になっている溜息の後、何度考えてもわからない疑問が口から漏れた。

「全く、あの勇者は何を考えているのか……いえ、正しくはあの国の王ですか」

今から一週間ほど前に、セントアレグリーの勇者一行が突然ウィクマムを訪れた。彼らは困惑するミズホ達に向かって、ウィクマムが持つ日天玉を渡すよう要求してきたのだ。

日天玉はあらゆる命を支える大切なものだ。当然拒否したのだが、彼らはミズホ達を「危険思想の持ち主だ」と突き放し、あろうことか剣を向けてきた。ミズホを護る人間は全て一蹴され「十日後までに宝玉譲渡の手はずを整えておくように」と言い残して去っていった。

「彼らの主張はあまりにもムチャクチャです。いくらセントアレグリーの要請といえど、我が国民を守ることに勝るものなどありません。この国の長として、必ずや宝玉を守り抜くのです」

「そんなこと言ったってさ、相手はあのセントアレグリーの勇者だよ？　ロベリアだってその目で見たでしょ？　ドラゴンを一人で倒しちゃったとか、魔王にだって勝てるとか噂されてるけど、実際メチャクチャ強かったし。あんなの相手にボク達の力じゃ束になっても敵わないよ。広範囲殲滅魔法なんて使われたら一瞬で……あぁ」

へなへなと床に崩れ落ちたミズホは、嘆くように両手を頭に乗せた。

「絶対に戦力が足りないよ。猫の手でも何でも借りなきゃ絶対にムリだってば」

「猫がどれだけ集まったところで、結果に何の変化も生じないと思いますが？」

あまりにグサリと刺されたことにムッとしてミズホは唇を尖らせたが、すぐにふにゃっと悲しそうに歪んだ。こんな事で言い争っても、何の利も得られない事くらいはわかるからだ。

大きな溜息をわざとらしく響かせて、注意されたって知るもんかとばかりにゴロンと床に横になる。柔らかな光沢を放つローブがくしゃくしゃになった。

「はぁ。魔王でも召喚できたらいいのに」

「ご冗談を……いくらミズホ様が召喚士の血を色濃く受け継がれたお方であるとはいえ、それは難しいかと」

ポツリと零れた呟きは、約一名を否応無く今回の事件に巻き込んでしまうのだった。

＊　＊　＊

えーと。確か俺は、フラフラと街を見て回る二人が迷子にならないように気を配りながら、ようやく見つけた店で炭火焼肉の串を食べた。他にも”キンツバ”という名前の、やたら甘いお菓子をサキが買ってきたので一緒に食べたんだ。

その後、リアが「装備を整えたい」と言うから付き合ったのだが、結局買ったのは防御力がなさそうな普通の衣服のみ。「良家のお嬢様のようです！」と店員に褒められて清楚な白い上下一式とニーソックスを買ったリアは、嬉しそうに俺に感想を求めてきた。

「……防御力は5ってところだな」

これは一般的な全身甲冑の防御力を１００とした場合の数値だ。ちなみに、そこらの厚着した熟女の方が数値的には高かったりする。

俺の冷静な分析に、なぜかリアは頬を膨らませてサキの所へ行ってしまった。あんなふわふわしたスカートだとメイドさん以上に戦いにくそうなのに、何を考えてるんだか。羽根を模したようなデザインが確かにちょっと可愛いけどさ。

……いかん、話が逸れた。

そんなふうに俺達はあまり元気のない街を探検して「そろそろ宿に戻るか」と二人に意見を求めた所までは覚えている……のだけど。

そのあたりで突然俺の視界が切り替わったのだ。

ここは一体どこなんだろう。

「あわわわわわわわわわわわっ」

目の前にはリアくらいの背格好の男……じゃなくて女がいた。短く鮮やかな紫の髪と快活そうな目を見て最初は男かと思ったが、感じる雰囲気が間違いなくそれとは違う。恐らくリアとほぼ同年齢だと思われる変な女が、ぶかぶかローブを皺にしながら腰を抜かしていた。

女の額やや上辺りには一角獣のツノらしきものが生えている。変

わったヤツだなと思ったが、よく見たらアクセサリとして装着しているらしい。

一度声をかけたのだが、まともな答えが返ってこない。仕方がないので周りをぐるりと見渡した。

まるで貴族が住むような立派な部屋だった。舞踏会でも開けそうな広い部屋の床には、巨大な魔方陣が描かれている。それを見て何となく状況が掴めてきた。どうやら俺はコレに引っ張られたらしい。

「ほ、ホントに召喚できちゃった？」

ということは、召んだのはこの女なのか。だとしたらお世辞抜きに大した腕だ。まさか俺が強制的に人の元に召ばれるとは思わなかった。

「お前、誰だ？」

「あ、えと、ボク――」

言いかけたところでコンコンと乾いたノックが響く。返事を待たずに登場したのは、空色の髪が目を引く背の高い女だった。

「ミズホ様、間もなく軍議の――」

女が驚いたように蒼い目を見開く。そして床に描かれた魔方陣を見て、何かを確信したようだった。

「ミズホ様、まさか」

「どーだっ！！　すっごいだろ本当に召んじゃったよ！？　うわーボクってひょっとして天才かもしんないよね、っていうか、天才じゃないとこんな事できないよね！？」

「やかましい」

うるさい女の頬を摘んで黙らせると「うにぃっ」と鳴いて目に角を立てた。

「うぅっ、なにすんのさ」

「全く……失礼いたしました。この娘は少々変わっておりまして」

「うっわ！　ロベリア酷いよその言い方は！　仮にもボクは一国の女王様だよ！？」

「だったらもう少し落ち着きというものを思い出してください。アホの子だと思われますよ」

「いいの？　そんなコト言っちゃって。それ以上言うとボク泣くからね？」

喧しい会話を聞いている限り、この二人は主従関係にあるのだろう。だがロベリアがミズホを敬っているようには見えない。どちらかと言えばウンザリしている様子だ。主がいつもこんな調子で騒いでいるからだろうか。だとしたら同情してしまう。

ずいぶんと様になっている溜め息をついてから、ロベリアが俺の正面に立った。

「失礼ですが、貴方は一体何者なのでしょうか？」

また召喚したのかと言いたげなロベリアの様子を見る限り、ミズホが何者かを召びつける展開は初めてではなさそうだ。ここは正直に答えよう。そしてさっさと帰ろうぞ。

「俺はただの旅人ってやつだ。気がついたらここに強制連行されていたんだよ」

「違うって！　何言っているのさ。キミは魔王でしょ、まおー」

うるっさい！　今それを認めると間違いなく厄介な展開になる流れだろコレ。

あまりに喧しいのでもう一度頬をつねってやろうとしたのだが、ミズホはぴょんと後ろに逃げていってしまった。

「ふふん。そう何度も同じ手を食らうボクじゃにぁう！？」

「ミズホ様。少し黙りやがれです」

ロベリアがミズホの首を摘む。鼻先をくっ付けるようにして鋭く笑う様がかなり怖かったらしく、ミズホが口を押さえてコクコクと頷いた。

「……俺からも聞きたいんだけど。ここは一体どこなんだ？」

やっと俺のターンになったと思って質問したのだが、ロベリアと呼ばれた女は何故か答えない。代わりに、微かに険のある表情で一歩引き下がった。

「その前に、もう一度確認させてください。あなたは本当にその、ただの人間、なのですか？」

何か感じるものがあったのか、ロベリアは俺の申告を信用していない様子だった。銀髪もちょっと尖った耳も、珍しい個性ってことで納得してくれないだろうか。

「そうだぞ？　今はやんごとなき理由から、世界中を引っ張りまわされている最中だ」

「違うって！！　本当だよロベリア、ボクちゃんと成功したんだから！！」

ミズホの真剣な瞳を見た途端、ロベリア表情がハッキリと硬くなる。同時にこの部屋が不穏な空気に支配されたのをヒシヒシと感じた。

「おいおい、本当に俺が魔王だなんて思うのか？」

「ミズホ様はこの国の女王にして、最も優れた召喚士でもあらせられます。ミズホ様が成功したと仰れば、間違いはありません。……正直に言えば、とても魔王などとは思えないほど迫力や怖さがありませんが」

なんだか凄く傷ついた。

しかし、こんな時こそ冷静にならねばならないんだ。ここから無事に帰れるかどうかが運命の分かれ目のような気がするから。

「落ち着いてくれ。千歩譲って俺が魔王だったとしても、別に何もしないー―」

俺の熱弁は完全に無視され、辺りを漂う魔力が一点に集中して一気に弾けた。

「落ち着けって言ってるだろ！」

容赦なくぶっ飛ばされる氷弾のせいで、部屋の調度品が乾いた音を立てながら崩れてゆく。出来る限り相殺しながら訴えるが一向に止む気配はない。

《来れ氷の精、紡げ破壊のワルツ……》

ロベリアが大きく両手を天に掲げ、百は余裕で超える氷の槍が顕現した。一つ一つが人間の腕ほどもあるので、まともに当たったらきっと痛い。そんな悲劇を回避しようとあれこれ訴えたが、悲しい事に全部無駄だった。

「いい加減にしろよ！　人を呼びつけておいてこの仕打ちはあんまりだ！」

「ロベリア！　頑張れー！」

「てめえ！？　後で覚えてろよ！」

何故俺が出会う人間は話を聞かないヤツが多いんだ。答えはわからないが、いい加減鬱陶しくなったので黙らせてしまおう。

攻撃に移る直前、ロベリアが浅く息を吸う。詠唱完了から発動す

るまでの僅かな時間が、魔術が抱える最大の弱点だ。このタイミングで集中を乱されると、それだけで自らの魔力が暴れて制御不能となる。結果は見ての通りだ。

「!?　う……ぁ……」

ロベリアの額をトン、と叩いた途端に硬直したように動きが止まる。やがて体から空気が抜けたように吐息が漏れ、細い腰が砕けてぺたんと床にへたり込んだ。

槍が詠唱者の異変に合わせて消えてゆく。ロベリアの動作が速かったので余裕は無かったが、狙い通り止められてホッとした。軽い興奮状態にある相手にこれ以上説得しても無駄っぽいので、しばらく眠ってもらうことにした。

＊　＊　＊

「ごめんなさいは？」

「ほ、ほへんははひ」

全ての元凶のほっぺをぐりぐりと抓ってやる。うっすら涙が浮かんだ頃にぱっと離すと、ミズホは赤くなった頬に両手を当ててのたうち回った。

「ううぅ。乙女の柔肌を何だと思ってるのさ」

「自業自得ってヤツだ。さて、それじゃ俺は帰るからな」

もう夜も遅くなって、そろそろ就寝時間になろうという頃だ。早く帰らないと宿の夕食が処分されてしまっているかもしれない。それは何としても阻止せねば……しかしこんな時間に食べると太っちまうかな、うーん。

「待ってよ！　お願い、ボク達に力を貸して欲しいんだ！」

部屋を出ようとした俺にミズホが飛びついてきた。抱くように俺の腕を掴んで、全体重をかけて床に引きずり倒そうとしている。まるで木の上で生活する小動物みたいなヤツだ。大して重くないので無駄な行動だけど。

「ヤダ」

「頼むよ！　本当にボク達困ってるんだってば！！」

さっきまでとは違いかなり必死な表情で「お願いだって！」と食い下がってくる。どう考えても厄介ごとの予感しかしないのだけど……話くらいは聞いてやろうか、と思ったのが間違いだった。

「ぐあッ？！」

痛い！　もの凄く痛い！！　割れるような、なんて言葉じゃ全く足りないくらいに頭が痛い！！！

ただの頭痛を百倍にして爆発させたような痛さ……まさか、召喚の主には逆らえないという隷属の呪いか？　バカな、俺がこんなアホの子に支配されるわけ――

「おーねーがーいー！　ボク達を助けてよーー！」

――めちゃくちゃに痛い！　洒落にならないくらいに痛い！！

「痛いっての！　やめろっておい止めろ！　解かったから！　言うこと聞くから！！」

「ホント！？」

ぱあっとミズホの顔が輝いてピタリと痛みが止んだ。……助かった。無意識かどうか知らないが、完璧にコントロールしているみたいだ。

「ああ、だからまずは落ち着け。お前が興奮すると、俺にとんでもない悲劇がっ痛あああああ！」

「ホントだ」

「お前ぶっ殺すぞ！？　って痛いから止めろ！　遊ぶなっ！」

というわけでまあ、そういうわけだ。同情するなら呪いを解いてくれ。

28.「軍議のお時間です」

「わたしの格好、防御力5だって言われちゃいました」

サキが尋ねると、リアはそう告白して細い肩を落とした。

周囲を見れば、彼女が男女問わず視線を集めているのは明らかなのに。本当に気付いていないのか、意味のないものだと考えているのか。サキには良くわからない。

リアは綺麗だ。主に連れられて出会った貴族や王族を含めても、同年代で彼女ほど容姿が整った女性をサキは知らない。好みの問題ではあるのだけれど。

「レオンはリアっちが欲しかった言葉が分かっていないだけだと思う、なの」

どうあれ、悲しい顔を見るのは好きじゃない。自分を救ってくれた彼らにはいつでも笑っていて欲しい。それがサキの正直な気持ちだった。

迷子を勇気付けるように手を握ったサキは、ちょうど目に入った看板を指してリアに伺いを立てる。同意を得たことを確認して、並んでお店に入っていった。

＊　＊　＊

「わ。サキちゃんコレにしませんか？　期間限定の妖精フルーツセットの、ドラゴンクラス」

「ん、おいしそうなの」

「限定ってところが良いですよねっ」

あれこれ比べながら相談していた彼女たちは、ここの幻のメニューに照準を定めた。どれだけの分量があるのか判らないから一般人は恐くて注文できない、というシロモノなのだが、この二人にそんなことは関係ない。心なしかオロオロしている女給さんが、いかにも心配している様子でご注文を繰りかえした。

「で、ではお客様、期間限定の妖精フルーツセットのど、ドラゴンクラスをお一つでよろしいですか？」

「わたしも、なの」

すかさず訂正するサキに、女給さんの口が間違いなく引きつった。

「お、お客様？　当店のドラゴンクラスは、十人以上の団体様が利用されるパーティー専用ですので、お一つでも多いかと……」

「だいじょぶです。お金ならちゃんと持っていますから」

いえそういうコトではなくてですね、と食い下がる女給さんと意味のない応酬が続く。どこまでも平行線から動かない状況を見かねたのか、責任者らしき人物が一礼して話に加わってきた。

「失礼ながら、当店のドラゴンクラスは無謀かと。今まで個人でこ

れをお食べになった方はいらっしゃいません。ましてや、お嬢様方のような細身の女性が食べきれる量ではございませんので」

頑として譲らない店側に、リアが「じゃあこうしましょう」と手をぽんと打った。

「とりあえず一つ注文しますね。それで足りなかったらまた注文しますから」

「……結構です。もし二つ目が必要なら、それは私共からのサービスといたしましょう。お代はお一つ分で結構です」

「わぁ。ありがとうございますっ」

「決してご無理をなさらぬように」

胸を撫で下ろした女給さんは、その後三十分も経たない内に二皿目を運ぶことになった。

「もう少し足りない位で止めたほうが、身体に良いみたいですしね」

「腹八分、なの」

しれっと言い残して二人は店を後にした。

「ありがとう、サキちゃん」

「おいしかった、なの」

二人は仲良く夜道を歩いていく。すっかり忘れていたレオンのことを思い出したのは、暖かなベッドで目を覚ました翌日のことだった。

＊　＊　＊

悪夢的な出会いから一日が経過した。

ミズホの私室に連れ込まれた俺は、現在ひどい目に遭わされていた。

部屋には呪われそうな怪しげな人形や古文書が所狭しと並んでいる。明るい日差しに照らされているので陰鬱な雰囲気はないが、なんだかシュールな光景だ。微かに甘い香りが残る丸いクッションに座らされた俺は、正面に座るミズホから真剣な眼差しを向けられていた。

「お手っ！」

「ふざけんなよ？」

アホの子が大真面目に掌を突き出してくるのだ。さっきからずっとこんな責め苦を受け続けて俺は不幸だ、と声を大にして主張しているが効果はゼロ。そろそろ泣きたいが、泣いてもこの苦しみから解放されないのが辛いところだ。

「ほら、お手！　よしよし、わたしがご主人様だよー」

……どうやら俺がやるまで続ける気らしい。噛み付いてやろうか、と思うのと同時に、思考が犬っぽくなってきた自分に軽くショックを受けた。

ミズホが俺を使役できた理由は”王族秘伝のアイテム”とやらを使ったからだという。国の一大事に用いる切り札だという怪しい品だが、その効果は身をもって証明してしまった。一旦契約が成立してしまえば召喚者の願いを全うするまで効果が持続するから、もう開き直るしかない。

だがしかし。

「もー、言うことを聞いてよ。ちゃんとしないと、わたしの身体――」

「うるっさい！　何がお手だ、俺はペットなんかじゃねえよ」

そこまで開き直りきったら大事なものを失っちまう。魔王がお手なんてしたら空前絶後のビックリな光景だし、末代までの大恥になることも確定だ。

そんな感じで心の底から困っていた時だっただけに、このタイミングで現れたロベリアが女神に見えた。

「ミズホ様、軍議のお時間です」

「ほら女王様。大切な用事なんだろ？　さっさと行ってこいよ」

「えー、あとちょっとなんだよ」

何がだよ。

「魔王レオン。あなたもご同行願います」

「俺も？　別に必要ないだろ」

「今回の作戦にはあなたの存在が不可欠ですから。余計な混乱を招かない為にも顔合わせをしてもらうつもりです。勇者襲来まで日がありません。少々長引く事になると思いますので、そのつもりでお願いします」

女神に見えてもこのロベリアは基本的にそっけない。どうやら王女の有事以外はこんなテンションが基本のようだ。ツイと顔を俺から離してまだ諦めないアホの子を促しにかかる。

「ちんちんっ」

「するかっ！！」

勘弁してくれ、本当に。

＊　＊　＊

「……というのが、私どもの提案する作戦です。えー、しかし、勇者達が見せた力を考えると勝算は、えー、かなり厳しいものと、えー、お考えください」

どよ～んと沈んだ雰囲気が漂う会議室では、およそ十名が不景気な顔を突き合わせていた。同じような格好で、同じような渋面をして、同じような溜息をついている。前回の訪問で見せつけられた力がよほど衝撃的だったらしく、楽観視する意見はゼロ。

「だーいじょーぶっ！」

そんな暗黒チックな雰囲気の中、空気の読めない女王は晴れやかな笑みで周りを見回した。

「ボクがものすっごいのを召んじゃったからさ！　ね、レオン」

手招きされるままにミズホの横に並ぶ。魔王だといきなり紹介されて、周囲は一様にぽかんとしていた。予想はしていたけれどまるで信用されていないみたいだ。

「また悪戯に得体の知れないものを呼びつけたのですか？　危険だからあれほどお控えくださいと念を押したというのに。えー、いくら腕が立つからといって、あの勇者を相手にできるとは、えー……」

「う、勝手に呼んだのは悪かったよ。でもさクロ大臣、レオンが強いってのは確かだよ。だってロベリアがあっさりやられちゃったんだよ？」

「はい。私には手も足も出ませんでした。セントアレグリーの勇者を退けられるのは、彼を置いて他にはいません」

普段ミズホの世話をしているロベリアだが、本当の肩書きは将星だ。この国最強だという彼女の言葉が十分な威力を持っていたようで、それ以上追求されることはなくなった。代わりに周囲から恐れ

るような視線を感じたけど、そんなのは気にしないに限る。

「俺としても隷属の呪いを解くために協力するしかないんだ。この話はこれくらいにして、相手のことを教えてくれ」

「そだね。じゃあクロ大臣、皆には確認になるけどもう一度お願いね」

「御意。……えー、勇者一行の総勢は、前回とおなじ十人だと思われます」

相手はたった十人。一国を相手とするにはあまりにも少ないが、各々が相当の力を持っているのだろう。溢れ出る汗を拭いながら説明してくれた内容によると、その中でも特に”第三勇者パージ”ってやつが一番強いらしい。

「第三勇者？」

なんだそれ。勇者に番号がついているなんて聞いたことがないぞ。

そんな俺の疑問に、クロちゃんは汗を拭いつつ教えてくれた。聞くところによると結構常識的な話らしい。

「えー、セントアレグリーだけは複数の勇者を命名しておりますから。我々が相手をしなければならないのは、えー、セントアレグリー第三位の勇者なのです」

彼らはセントアレグリー国王の命令を受けて各地を巡り、様々な問題を解決する。その実績により席次が決まっているらしい。勇者は十位まで存在するらしいので、三位のパージは結構強い勇者って

ことなのだろうか。

「今の勇者ってのは、軍隊の一部みたいなものなんだな」

世界中の希望を背に仇なす魔物を滅し、ついには敵の親玉を打ち倒して世界に平和を取り戻す――勇者とはそういう存在だと思っていた。少なくとも、俺が千年も閉じ込められる前まではそうだったのに。

「大昔ならいざ知らず、今の世で勇者に求められるのは自国を守ることですから」

聞こえないように呟いたつもりだが、後ろのロベリアにだけは聞こえていたらしい。悲しい事に、俺が憧れる勇者像はもう影も無いみたいだ。あのリアを見た時点で半分以上諦めていたけどさ。

「……そう言えば、この国の勇者は？　いないのか？」

ふと浮かんだ疑問を口にした途端、楽天的に笑っていたミズホの顔から色が消えた。

「――死んじゃったよ」

呟くような声が部屋の隅々まで響いて、ざわついていた空気が一気に凍った。

「わが国の勇者マジークは、前回の通告の際に見せしめとして彼ら

に殺されました。既に事態は不可避な状況にまで進んでいます。ですから我々は、こうして貴方に縋るしかないのです。情けない話ではありますが……」

……勇者が勇者を殺すのか。どうなってるんだ今の”勇者”ってのは。”正義の国”が聞いて呆れる暴れっぷりだ。

「その他のメンバーは？　今回相手する勇者はパージだけなのか」

「はい。しかしその他のメンバーも勇者の従者だけあって、精鋭ぞろいであることは間違いありません。特に”魔剣術士”クラリスと”聖拳闘士”フレイは並みの勇者を凌ぐほど高名です」

強力な魔法剣を得意とするクラリスと、大地を砕く破壊力を秘めた拳を持つフレイ。ロベリアが挙げたこの二人は結構な有名人らしく、勇者と共に色々と伝説を残しているらしい。ドラゴンを倒したとかモンスターを数百体なぎ倒したとかあるらしいが、具体的な紹介は割愛する。要は、勇者を含めたこの三人が中心的なメンバーだということだ。

俺は暫く考えてから、周囲で黙っている連中に質問を投げかけた。

「この主要メンバー三人を除いた残りと、お前らの軍で戦ったらどうなる？」

「……そうですね、残りの七人に広域殲滅呪文を使えるという情報は無いですから、それが正しければ、持ちこたえる事は可能だと思います。」

暫く無言が続いたが、結局答えてくれたのはロベリアだった。どうやらこの中でちゃんと状況を把握しているのは彼女だけらしい。

それにしても、勇者がいない条件ですら持ち堪えるのが精一杯なのか。相手が強いのかウィクマムが弱すぎるのか知らんが、どちらにせよ嫌な話を聞いてしまった。

「しかし無茶です。パージ、クラリス、フレイの3人を相手にするとなると、例えドラゴンでも倒されてしまうと聞きます。いくらなんでもそれは作戦とは呼べません」

確かに、複数を同時に相手するのは厄介だ。一国の軍隊を脅かすほどの手練らしいし、侮ったら痛い目を見させられるかもしれない。というワケで、元々の首謀者にも働かせよう。

「俺だけじゃない。連れにも手伝わせるつもりだ」

この国に来た時と立場が逆になったけど、リアとサキならばきっと大丈夫だ。問題は誰に誰をぶつけるかということになるけど、それは後で考えればいいだろう。

「とにかくその三人は俺たちで何とかする。残りは多分ここの軍で迎え撃ってもらう事になると思うけれど、それでいいか？」

「いいよ。でもあの三人は本当にヤバイよ！　別格だよ？　それでもいいの？」

「ああ。さっさと願いを叶えて、この忌々しい呪いから開放されたいからな」

「ずっとここに居てくれても良いんだよ？　ん？」

「力いっぱいお断りだ。アホの子に付き従う趣味は無いからな」

「そんなこと言わないでさ。ほらほら、今ならロベリアのおっぱいだって揉み放題だよ？」

「誰が揉ませ放題ですか！　どんな痴女ですかわたしは！　……ってだから胸を掴んで引っ張らないで下さいミズホ様！！」

ズダンと机を叩きつけて叫ぶ女将星の胸がぷるん、とゆれる。視線を感じた彼女が光よりも早く胸を隠しながら、何故か俺の顔を思い切り睨みつけてきた。

「……そんなに揉みたいですか？」

別に俺は何も言っていないんですけど。

「もー。レオンったらエロエロなんだから。胸だけじゃ足りないの？　だったらロベリアと子供とかちゅッ！？　……にゅう」

見事な裏拳が顎に決まってアホの子が一足先に退場した。

加害者が反逆罪に問われても仕方ないような吹っ飛び方だったが、その場にいた全員が目を逸らしているので、どうやら良くある光景らしい。

ロベリアはふー、ふー、と息を荒げて、熟れた果実のようになりながら俺を睨む。

「……やはり魔王とは危険な存在です、わ、私の身体なんてそんな――」

だから俺は何も言っていないんだってば。

29.「儀式？」

軍議が終わってから少し時間を持て余したので、陽が沈む前にこの国の兵士を見ておいた。

予想以上にボンクラだったらどーしようと不安になっていたが、幸いにして思ったよりもマシだった。魔術こそ使えないものの指揮系統がしっかりしているし、武器を振る力強さも悪くない。将星職に就いているロベリアが丁寧に指導した賜物らしい。

しかし、安心して任せられるというレベルでもない。多対1の戦闘訓練なんてそうそうやらないだろうし、万が一にも失敗となれば契約者の願いが叶わないことになる。つまり隷属の呪いが解けないのだ。そうなったらこの先どんな馬鹿らしいことを強要されるかわからない。

故に、絶対にこの作戦は成功させなければならないわけで。相手が第三勇者だろうが第一勇者だろうが、ここは強制敗北イベントだと思って諦めてもらおう。

フェリンが言うには、あいつは既に近くにいる筈だ。周りに誰もいないことを確認してから、小声で懐かしい名前を呼んでみた。

「居るか？　アレジアンス」

時刻はちょうど逢魔時。誰にも聞こえていない筈の呼びかけに応じて闇が迅速に収束してゆく。闇はやがて一つとなり形を成して、俺の前で跪いた。

「お久しぶりです、レオン様。ようやくお声を掛けてくださいましたね」

懐かしい声だ。この世界とは比べものにならないほど闇に彩られた俺の故郷には、代々魔王に仕える一族がいる。家事から戦闘、果ては参謀まで何でもこなす万能の補佐人として重宝している連中だが、その筆頭がこのアレジアンスだった。肩書きは近衛軍団長兼執事、だったっけ。

「……なんだ？その格好」

白い肌に黒髪と黒い瞳、長身の痩躯が特徴的な紳士、というのが本来の姿だった筈だけど……目の前に現れたのはどう見てもただの黒い子犬だった。

「フェリン様が繋げたこの世界との”路”が不安定ですので、極力魔力を消費しない形を取っております。……お見苦しいならば姿を変えますが」

「いや、別にいいけどさ」

見苦しいとは思わないが、そんなつぶらな瞳で喋る様はとてもこの男が親父の懐刀には見えない。それでも、アレジアンスは魔界全土で名を知られている数少ない一人だ。

彼の仕事は多岐にわたる。大半は両親のわがままを聞く雑用だったが、いちいち相手をしていられない親父に変わって勇者と戦うこともあった。そのせいでアレジアンスが魔王だと思い込んでいる人

間も少なくなかったらしい。

魔王の代わりが勤まるだけあってその力は折り紙つき。ひょっとしたら俺も全然歯が立たないかもしれない。今は犬だけど。

「ご謙遜を」

……気がつきすぎるところも相変わらずのようだ。「主の考えが読めないようでは執事として名乗れません」とか言っていたが、どこまで読めているのか冷静に考えるのは止めておこう。

「お前が居るから俺は安心して家を空けていたんだけどな。面倒ごとが増えて母さんがブチ切れたってのは本当なのか？　アレジ」

「ご安心を。少々キールに対する扱いがぞんざいになっておられますが、死ぬ程ではございません」

ならいいや。

実家にはアレジを筆頭に優秀な人材がいる。俺が戻らなくてもアレジ達がちゃんと母親の面倒を見てくれるだろう。

「ではレオン様、何なりとご用命ください」

姿に似合わぬ優雅な物腰のままアレジはふわりと頭を垂れた。本来の姿であれば嫌味なほどに決まっていただろうけど、子犬の姿ではどうも変な感じがする。……まあいい、早く用件を言ってしまおう。

「実は勇者と一戦交える事になった」

一瞬アレジアンスの殺気が膨らむ。しかしすぐにそれを恥じ入るように収めて、俺に深々と頭を下げた。

「久しく手合わせをしていないと思えば、まさかレオン様のお手を煩わせようとしていたとは……申し訳ございません。今すぐに排除いたしますゆえ」

声のトーンまで一気に低くなる。恐ろしく冷たい目がまだ見ぬ標的を射殺さんばかりに鋭い闇を宿した。

遥か昔、御伽噺になるような勇者と魔王の戦いが繰り広げられていた頃から、アレジアンスには数々の勇者を迎え撃ってきた経験と実績がある。今回のような事態を相談するには最適な人材なのだ。

「勇者の相手は俺がするから必要ない。加えて従者のうち二人は既に目処がついているんだが、残りの七人を相手する連中がいかにも心許ないんだ」

「では、その相手を？」

「わざわざお前に出てもらう程じゃない。俺が相手にする勇者にしたってお前じゃ物足りないだろうさ。お前が選んだ適当なヤツを送ってくれないか？　ああ、できれば魔物と知られない人型がいい」

今の状況を教えると、名参謀は「早急に手配致します」と頭をたれた。

「只今偵察を向かわせました。ご希望に沿った部下をすぐにお送りいたします」

アレジはそう告げると瞬く間にその姿を消す。相変わらず行動が早いヤツだ。きっと有能な部下を送ってきてくれるだろう。

「それじゃ俺もリア達を迎えに行くか」

俺が突然姿を消して心配してるかもしれない。そんな姿を想像して、やっぱりそんな事ありえないかと思い直して俺は城に戻った。ミズホに頼んで連れてきて貰えばいいや。

＊　＊　＊

「んしょ、んしょ……ふう。こんな物かな。そっちはどう？　ロベリア」

「ええ。問題ありません」

俺がミズホの部屋に戻ると、ミズホとロベリアが何やら怪しげな作業をしていた。

部屋の様子がいつもと違う。窓は全て日の光が入らないように遮られ、祭壇にあるような大きな蜀台のみが部屋を照らしている。蜀台は部屋の四隅に設置されているだけなので部屋はかなり暗く、ミズホ達の影が炎に照らされてゆらゆらと揺れていた。床には俺を召喚した時のような魔方陣が大きく描かれている。淡く発光しているその上には赤い液体の入った怪しげなコップが置かれていた。

「……何をやってるんだお前ら」

「んに？　おお、よくぞ現れたなレオン。わらわは嬉しいぞ」

何故か口調まで怪しくなっている。隣のロベリアが真っ直ぐ俺の元へやってきて、グイ、とあの怪しげなコップを手渡してきた。

「ライナの実をすり潰したものです。どうぞ」

「どうぞ、って言われても困るんだけど。喉なんて渇いてないし」

「”儀式”を円滑に進める為に必要なんだよ。ほらグイっと飲んじゃって」

「儀式？　お前が何を始めるのか知らないけど――」

「失礼します」

目を離した隙に背後から近寄ったロベリアがトントン、と俺の肩をつつく。振り返った瞬間を狙って口に何かを突っ込まれた。

「って辛っ！？　からい！！　なんだコレ！？」

「どうぞ」

口の中が痺れるくらいに辛くて痛い。悶えている俺に向けて、ロベリアはあの怪しい液体を差し出してくる。思わず手に取って口をつけると、意外にも優しい味で飲みやすかった。

「ライナの実はミルクのようにほのかに甘いですから。辛さを和らげてくれますよ」

んぐんぐ、と口の端から零れるのも構わずに一気に飲む。口内の火災が和らぐまで汗が止まらなかった。空になったコップをロベリアに突き返して睨むが、当の犯人はグッと親指を立ててミズホと不気味な笑みを浮かべていた。

「……実はね、レオンの力が強すぎて私の体の負担がちょっと大きすぎるんだ。一応私がレオンの主ってコトになっているんだけど、その関係で私にレオンの力が流れ込んできているみたいでさ。このまま放置するとかなりマズイんだよね」

本来は主から召喚された者へ力を分け与えて使役するのに、その逆転現象が起きているということらしい。このままだと魔力過剰状態になってしまうのだとか。

俺に「お手」をさせようとしていたのも、その現象を解決しようとしての行動だったという。だとしてもアレはどうかと思うけど。

「んで、このヤバイ状況を解決するために儀式をやりたいのだ」

「……まあ、いいけどさ。具体的には何をすれば良いんだ？」

「一番簡単なのは、血の交換かな」

互いの血液を口から取り込むことで状況が改善されるらしい。目の前で死なれても困るので、俺は仕方なしに頷いた。

魔方陣が描かれた床に、若干頬を染めたミズホと向き合って座る。

「血が空気に触れちゃうとダメだから、直接ちゅーちゅーしてね」

ほら、とミズホが自らの白い首筋を差し出してくる。……これに噛み付けと？

「ちなみに、他に方法は無いのか？」

「無いことは無いんだけど……ちょっとだけ恥ずいと言いますか、乙女として複雑と言いますか……だ、唾液の交換、なんだけど。で、でもちょっと必要な量が多くってさ。多分一日中くらいチュッチュしていないと無理なんだよねー。あははっ」

むにむにと指を遊ばせるミズホの視線があちこちに彷徨う。

「も、もう一つ別の方法もあるんだけど……ボク、経験ないからさ。やっぱり最初の方法でお願い！　ね？」

「ちなみに、もう一つの方法って？」

「性交渉ですよ」

すっかり存在を忘れていたロベリアの声にびくっ、とミズホの全身が跳ねた。そんな泣きそうな顔しなくていい。もう言わないから。

＊　＊　＊

血は可能な限り心臓に近い場所から摂取する必要があるらしい。

炎で炙っておいた簡素なナイフを鎖骨付近に当てると、ミズホは大げさなほど深呼吸を繰り返した。

「二人で一緒にする必要があるからさ。お願いね」

つぷ、と肌に食い込んだナイフが僅かに血に染まる。互いに抱きつくような格好になりながら、二人同時に口を寄せた。

「ん……」

しょっぱい鉄の味がする。瑞々しい肌に滲む血液を舌で丁寧に舐め取りながら、同時に肌を舐められる。ミズホの小さな舌でちろちろと何度も肌を舐められるのは、小動物に甘えられているみたいでくすぐったい。

「ふくっ、んちゅ、ちゅっ……ん、んんっ」

ミズホの細い肩が小刻みに揺れている。耐えるような吐息といい、どうやらミズホも同じようなくすぐったさに耐えているみたいだ。しかし途中で止めてしまえばまた最初からになってしまう。少々強引だけど、強く抱き寄せて動けないように固定してやった。

「んぅ！？　……んっ、んっ」

血に混じってふわり、と甘い花の香りを感じる。腕の中で微かに汗ばんでいる身体がぴくっと震えて、ミズホも俺の背中に腕を回してきた。

必要な血の量は小さなコップに半分程度。しかし、じわりと傷口から滲み出る血を吸い続けるとなるとそれなりに時間が掛かる。う

っかりすると口の端から唾液が漏れてしまいそうだ。ミズホはくぐもった吐息を漏らしながらひたすら舌を動かしている。そんな相手にペースを合わせながら、俺も静かに血をすする。

ロベリアの方に視線をやると彼女は首を横に振ってみせた。まだまだ必要な分量には達していないようだ。

「ンン……」

水気のある音と耐えるような声だけが聞こえる中、数分ほど経った頃だろうか。ミズホの口から今までとは違う声が漏れ、同時に傷口がじんわりと熱を発し始めた。喪失感と充足感が交互に全身に押し寄せて来るような、よくわからない感覚が全身を巡ってゆく。

「うんッ……はぁ……」

一際大きな呻き声と共にミズホの身体が激しく痙攣して、直後に全身が弛緩した。最後に血を拭うように舌を動かしてからミズホが口を離す。それに習って俺も口を離すと、すぐさまロベリアが駆け寄ってきた。

「おーい、大丈夫か？」

清潔そうな布を手にしたロベリアにミズホを渡す。視線がやや覚束ない様子を見る限り、それなりに負担があったのだろう。立ち上がろうとしたのに膝が折れて、また座り込んでしまう。上気した頬のまま恥ずかしそうに笑っていた。

「もう、急にギュッてするんだもん。あれ反則だよ」

「ああでもしないと、お前が暴れそうだったからな」

そういうことじゃなくって、と言いかけたミズホの言葉がどんどん小さくなっていく。何故か不満そうな顔をして、意外なほどの速さで隣の部屋へ走っていってしまった。

「……どうしたんだ？　アイツ」

「それが本心からの言葉なら、きっと貴方はいつか酷い目に遭いますね」

唐突に不幸を予言された。切れ長の目のせいで迫力ある眼光が心地悪い。何となくロベリアは敵に回さない方が良い気がするので、ここは話を変えてしまおう。

「ちょっと頼みたいんだけどさ。さっき言っていた俺の連れがこの町のどこかで迷子になってる筈なんだ。誰かに声をかけて探してくれないか？」

「わかりました。それではお名前と容姿について教えていただけますか？　……なるほど、魔王は幼い容姿の女性が好みなのですね。納得しました」

違うっつーの。

30.「きっと何とかなります」

ミズホはともかくロベリアは優秀らしい。俺が二人を探して欲しいと頼んでから、僅か一時間程で二人を発見したとの連絡があった。悲しいことにそれは最悪のタイミングだったけれど。

「リア様、サキ様。こちらで御座います」

ロベリアが案内した部屋の中では、一角獣のツノを頭に生やしたミズホが夢中で手を振っている。背を向けているので二人には何をしているのかわからないかもしれないが、ロベリアは理解したようで溜息もそこそこに耳を引っ張り上げた。

「いたたたた！　なにすんだよロベリア！？　いまボクはちょーきょーで忙しいんだよ」

「なんという言葉を口にするのですか」

「初めまして、ミズホさ、ま？」

「なの？」

リアとサキが眼をぱちくりさせて固まった。その先にいた俺に驚いたからではなく、その状態に。目の先にはミズホ、そして俺。

――座ったまま手を握られてぶんぶん振られている、俺。

釈明なんぞできる状態ではない。どう言い訳しようとも絶対に嘘だと思われる。こんなぐうの音も出ない状況で、俺に何ができるの

か。

「……笑えよ」

無理矢理片手を握られて「お手っ！」と繰り返されている俺を笑えばいいだろこんちくしょう。

「レオンさん何をやってるんですか？」

「レオンがイヌみたい、なの」

……すみません、冷静に突っ込むくらいなら笑ってください。頼むから。

＊　＊　＊

ミズホから時計回りに俺、リア、サキ、そしてロベリアが丸い形のソファーに腰掛けて互いに向き合う。ミズホ達への紹介もそこそこに、リアとサキにこの国の状況を簡単に説明した。

二人はすぐに協力を快諾してくれた。今はこれから相手することになる”従者”について、知る限りの情報を伝えているところだ。

「俺はパージの相手をする。二人にはクラリスとフレイを抑えて欲しいんだ」

早くもアレジから届いた情報によると、クラリスは炎の魔法剣を得意とし、フレイは近接打撃戦に加えて魔法も得意らしい。奥の手

があるかどうかはまだ不明だが、この二人なら何とかしてくれるだろう。

「わたしはフレイと戦いたい、なの」

「あれ、剣を使う相手の方が戦り易いんじゃないのか？」

「たまには違う武器を使う相手とやってみたい、なの」

「では、私がクラリスさんの相手をしますね」

相性とかは考えていないらしい。ま、この二人なら何とでもなるだろう。結局リアがクラリスを、サキがフレイを相手する事に決まった。

「あとは残りの七人をボク達が押さえ込めばおっけー！！」

「俺の頭を撫でながら喋るのは止めろっての」

言っても構わずに纏わりついてくるミズホのしつこさに負けて、可能な限り無視を決め込む。こら、耳をくすぐるんじゃない。

「えー、コロは気持ちよさ気だよ？」

「それ本物の犬の話だろ！」

ああもう、作戦会議が全く締まらないのはもう諦めるしかないのだろうか。「わたしもやってみたいです」と物騒なことを呟くリアの言葉は聞こえないフリで何とか回避した。

「一応確認しておきたいのですけれど、彼らが宝玉を譲渡するようにと圧力をかけてきた理由は何なのですか？」

「我々が危険思想の持ち主だから、だそうですよ。このまま放置すれば、我々はいずれ宝玉の力を暴走させて世に災いをもたらすのだそうです」

リアの疑問に、ロベリアはまるで他人事のように答えた。実際まるで身に覚えがない話だという。

「ボク達はちゃんと説明したよ。そんな意思はないし、やりたくても出来ないよって。でも何度繰り返しても『悪党は皆同じことを言う』って取り合ってくれなかった」

その時に対応したのがミズホとロベリア、そしてこの国の勇者マジークだった。要求を呑むわけにはいかないミズホ達に対し、相手は当然のように刃を向けてきた。

二人を守ろうと前に出たマジークは、何の躊躇いもなく殺されてしまったという。

「……よくお前たちは無事だったな」

「私を殺しちゃったら日天玉も奪えないからね。多分知らないと思うけど、あの宝玉は人を使って”鍵”をかけられるんだ。主鍵と副鍵があって……って難しいことは横に置くけど、鍵がかかっている間はどうやっても動かせないようになってる。この国と宝玉が同化しているからね」

「脅しすぎて自暴自棄になられたら困ると判断したのでしょう。主鍵をかけたまま対象の人物が死ぬと、宝玉を動かせなくなってしまいますから」

次までに宝玉の鍵を開放しておけ、と言い捨ててヤツらは帰っていった。絶望的な空気はあっという間に国中を駆け巡り、それ以来淀むような重苦しい空気がこの国を支配している。

「どうして連中は宝玉にそこまで拘るんだろうな。話を聞くと、宝玉の為だけにわざわざ一度帰ったんだろ？　壊した方が何かと早い気がするんだけど」

「宝玉は非常に貴重なものですから、可能な限り壊すようなことはしたくないのでしょう」

「まあ、そうなんだけどさ。どうも力の入れ方が違うというか、宝玉を奪うことこそが連中の第一の目的のように思えるんだよな」

そもそもミズホ達を非難する理由がただの言いがかりにしか聞こえない。セントアレグリーは未来予知でもできるのだろうか。……ああもう、不確かな予測で考えをまとめようとするから混乱するんだ。これ以上考えても仕方ない、直接第三勇者に話を聞けばいいことだ。

「……どうしてこんなコトになっちゃったんだろ。あの国の勇者と敵対する日が来るなんて、夢にも思わなかったのに」

がっくりと肩を落とすミズホの呟きに、誰も答えられない。ロベリアが慰めるように肩に手を置くと、ミズホの頭が甘えるように彼女の首に擦り寄った。

「……宝玉を失ってしまえば、この国一帯は死の砂漠になっちゃう。ボクは皆を守らなきゃいけないんだ。だからお願いだよ。力を貸して欲しいんだ」

「大丈夫です。わたし達も精一杯協力させてもらいますから」

「わたしも頑張る、なの」

リアの笑顔には、相手の心を無防備にする力があるのかもしれない。まだ出会って僅かだというのに、ミズホは「ゴメンね」とリアに飛びついて顔を埋めた。サキにも「ありがとう」と両手を握り、ついでとばかりに俺にも言う。

「レオンもゴメンね。こんな可愛い彼女達がいるなんて知らずにあんなことしちゃって」

「あんなこと、なの？」

「うん。ボク、レオンと抱き合ってちゅーちゅーしちゃったんだ。ちょっとヘンな気分になっちゃったんだけど、そしたらギュッと抱きしめてくれて――」

「ちょっと待てお前！」

お前は突然何を告白してるんだ。行為については事実だけど、妙に誤解しそうな言い方をするんじゃ――

「……今回は協力的だと思ったら、そーゆー事ですか」

――リアの声のトーンがいつもと違う。周りに渦巻く空気が氷のように冷たくなっているせいか、その笑顔が笑顔に見えない。その隣のメイドさんと一緒に、そそくさと俺から距離を取ってしまった。

「酷い目に遭うのも、そう遠い話ではないみたいですね」

そんな嫌な予言を繰り返さないでくれロベリアさん。頼むから。

＊　＊　＊

ミズホのほっぺを引き伸ばしながらお願いした結果、リアとサキにはちゃんと事実が伝わった。それでもあまり態度が軟化しなかった理由はもうよく解らない。

「まず間違いなく、勇者が現れる場所は前回と同じこの北門でしょう」

ウィクマムの概形が描かれた地図を指しながら、ロベリアの白い指が一点を指す。

「この国は周囲を石垣で囲っています。乗り越えられなくはないですが、彼らは既にこちらが抵抗するとは思っていません。悠々とこの門からミズホ様を呼びつけるでしょう」

この北門にはパージを相手する俺が立つことになった。一応話し合いもしてみるつもりだけど、今までのことを考えると望みは薄そうだ。

「可能ならば、この北門で彼らの足並みを乱したいところです。特にパージ、フレイ、クラリスを一度に相手をするのはくれぐれも避けてください」

複数の相手への対処法といえば、全員を孤立させてからの各個撃破だ。そこで俺は、パージを除く全員を、それぞれが待ち構えている地点に飛ばすことにした。

西門の外で待つリアの元にはクラリスを、南門の外で待つサキの元にはフレイを。そして残りの七人は、ロベリアと千人以上の大群が待つ東門付近へ強制的に転送してやるのだ。警戒されていると難しいかもしれないが、相手はこちらが抵抗するとは考えていない筈だ。強制転送という少々大掛かりな罠でもきっと引っ掛かってくれる。

「くれぐれも無理はしないで下さい。あらゆる魔物を打ち倒すといわれる彼らの力は強大です。可能なら応援に駆けつけたい所ですが……」

「そうだな。リアとサキは余裕があるなら他の手伝いをしてやってくれ。俺もなるべく早く片付けるようにする」

「……簡単に言っちゃってるけどさ、相手はあのセントアレグリーの第三勇者なんだよ？　第三位なんだよ？　フレイもクラリスも超強いんだよ？　みんなどうしてそんなに余裕なのさ」

「大丈夫ですよ、きっと何とかなります。のーぷろです」

「強い相手と戦うのはワクワクする、なの」

ミズホの視線がこちらを向く。「みんな、ホントに無理だけはしないでね」と言いながら泣きそうな目になっているけど、心配しなくていいから。大丈夫だ、多分。

「それで、やっつけた後はどうすればいい、なの？」

「勝手に退却していくだろ。捕虜にしたところで面倒なだけだし」

「……そうですね。判断が難しいですが、下手に捕虜として身柄を拘束するとさらなる非難に繋がるでしょう。無理してまで拘束する必要はありません」

今回の目標はあくまで防衛ですから、と結論付けたロベリアの言葉に全員が頷いた。

「勇者の前に立ち塞がる敵役、わたし一度やってみたかったんです」

妙にやる気を出してリアがぴょこんと立ち上がった。ひょっとして悪の道に目覚めつつあるのかもしれない。キメ台詞を考だしたリアにはできるだけ触れないようにして、ひっそりとその場を解散した。

31．開戦

静かな朝。昨日よりも少しだけ暖かい今日は、いよいよ例の勇者が訪れる日だ。対勇者の全権を任されている俺は、北門の前でまだ見ぬ相手についてあれこれ考えていた。

アレジによると、パージは雷撃系の魔法を好んで使う大剣使いらしい。鈍重になりがちな重量形の武器と、速さが最大の利点である雷撃の魔法。どんな風に戦うのか楽しみにしているということは、勿論誰にも言っていない。

パージを「よく出来てはいますが所詮は贋作です」と評したアレジは、仕事が溜まっているらしく既に帰ってしまった。代わりにやってきた部下がどこかに居るはずだが、暇を持て余している俺の相手はしてくれないらしい。

「それにしても、連中がいつ来るかくらい聞いておいてくれよ」

間の抜けたことに、誰もパージ達がやってくる正確な時刻を聞いていないらしい。仕方なくこうして突っ立っていたのだけれど、それもやや退屈になった頃、北門の前に豪華な馬車がやってきた。幌に大仰に描かれているのは、聖剣を模したとされるセントアレグリーのエンブレムだ。

最初に降りてきた人間を見て、そいつが勇者だとすぐに理解した。

名前しか知らなかった第三勇者パージは、俺と同じくらいの体格を持つ青年だった。深い緑髪をツンツンに逆立てていて、華美ともいえる白銀の鎧の上下を身につけている。背にしている豪奢な装飾

の剣はかなり大きい。手数ではなく一撃の重さを重視するらしい。

どこにでもいるような雰囲気ではない。ぱっと見ただけで他の人間と一線を画していると感じる。油断無く周りを見えない何かで覆っているような、突っ立っているだけとは思えない隙の無さは、実力をうかがわせるに十分だった。

その両脇には二人の女が二歩下がって付き従っている。一人は頭を除く全身を銀の甲冑で包んだ明るい緑髪の女。腰には真っ黒な直刃の剣を提げている。やる気なさそうに丸っこい目を半目にして、くああ、と欠伸までしていた。

もう一人は、やや癖のある金の髪と勝気そうな茶色の瞳が目を引く女。両腕には髪と同じ金色の手甲が威嚇するように光っている。全身を伸縮性の高そうな黒い衣服で包み、防具は胸の辺りや腰周りなど最低限しか身に着けていない。両脚には手甲とあわせたようなデザインの防具が鈍く光を放っている。これで蹴られたら硬い岩でも砕けるだろう。

三人の後ろには残りの従者が続々と馬車から姿を現す。御者台に乗っていた男を含めて総勢十人が勢ぞろいした。

これはウィクマムの兵士だけじゃ絶対に無理だ。

一人納得しながら観察していると、先頭に立つ男がムッとしたように顔をしかめてしまった。

「何をジロジロと見ている」

「失礼、男の勇者ってのを久しぶりに見たからさ」

尚も観察を続けた俺に苛立ったのか、パージはすぐさま俺に右腕を突き出してきた。手にしているのは書状のようだ。

紋章の判がついている封を解いて中を確認する。

そこには、ウィクマムが日天玉を悪用しようとしていること、それが周辺国にとっていかに驚異的なものであるかということ、結論として”正義”の名の下に、ウィクマムの宝玉をセントアレグリーが”保護”するということが、やたら尊大な文章として記されていた。読むだけで疲れてしまったので全文の紹介は割愛する。

思わず漏れた苦笑いを隠して、言い分を理解したとパージに意思表示した。

「では、宝玉の間に案内してもらおうか」

「ダメだ」

聞き間違いようの無いほどハッキリとした返答に、空気がギシッと緊張する。やや硬さを増した声で、パージが再度問いかけてきた。

「我々に逆らう、ということか？　それがこの脆弱な国の答えだと？」

「そうなるな。ついでに言えばここから先は通行止めだ。さっさと帰ってくれ」

「……やれやれ。前回の訪問でよく理解してもらえたと思っていたが、まだ説明が足りなかったようだ」

パージが白銀の大剣を片手で引き抜く。青白く発光したか思うとその刀身に稲妻が宿った。持ち主の苛立ちを代弁するように攻撃的な音が響かせて、ぐいとその切っ先を俺に向ける。ゆっくりとした調子で、パージは再度口を開いた。

「今一度問う。我々の提案を受け入れないのならばどうなるか、貴公は理解しているのか？」

交渉の席で抜刀する阿呆がつらつらと御託を吐く。俺が呆れたような顔をしていたせいだろうか。その顔が徐々に険のある表情になってきた。

「何を笑っている」

「ここで素直に宝玉を渡したら、どの道この国はおしまいだ。そんなことも知らないのか？」

「無論知っている。だから今日まで民をこの国から避難させる猶予をくれてやったつもりだったのだがな。この国の女王はよほど王の座に縋り付きたいらしい」

「ミズホはお前らの勝手な言い分で国を潰すようなバカじゃないってことだ。突然住む国を奪われた人間はどうなる？　それもお前らが面倒見るつもりだったのか？」

「……世の平和のためには多少の犠牲はつきものだ。このような小さな国、無くなろうが大した影響などありはしない。命があるだけでもありがたいと思え」

なにそれ。本気で言ってるんだろうか。思わず少しだけ顔が歪んだ俺を見て、パージは嘲るように溜息をつき、大剣をざっくりと地面に突き立てた。

「日天玉の力は絶大だ。邪な意思を持つ者が手にすることは許されない。少々手荒だが必要悪というものだ」

「この国にそんな大それたコトをする意思なんて無いって言ってるだろ？」

「口では何とでも言える。悪党の言葉に耳を貸すつもりはない」

……いかん、さっさと殴りたくなってきたけど、あと一つだけ質問しておこう。

「色々言うけどさ、お前らはこの国の宝玉を奪いたいだけなんじゃないのか？　悪党はどっちだ――」

剣を取ったパージの体が沈み前傾する。腕を引き絞り切っ先を俺に定める。腹に響く低い音と共に大地を蹴り、引き絞った腕を開放する。

ジジ、と音がして、帯電した剣が俺の胸に突き立った。

「――既に貴様の魂は、善悪の判断ができないレベルにまで汚染されているようだ。よって、この私が浄化してやろう」

何とか穏便に済ませられないかと考えていた時間が馬鹿らしくなった。ここまで清々しいくらいに剣を向けられたら、もう笑うしかない。

「面白い。やってみろ」

不審気に眉をひそめたパージが腕を引こうとするが動かない。当然だ。剣先は俺が手で掴んで押さえつけているのだから。

「遠慮は要らない。正義の力ってヤツを見せてみろよ」

「……貴様はあまりにも、愚かだ」

ま、それは否定しない。お前には負けるけどな。

「その愚か者の罠に、お前ら全員が嵌ってるんだよ」

ちょいちょいと指で地面を指す。連中が釣られて土に視線を落とした瞬間、九人の身体が淡く光を帯びた。全員の顔に緊張が走るがもう遅い。ふわりと浮いた身体が徐々に上ってゆき、程なく一斉に光となって空に消えていった。

成功を確認して剣先を放してやると、パージは醜く表情を歪めて歯を剥いた。

「貴様……何の真似だ」

一人残されたこのボンクラに、ゆっくりと丁寧に、聞き漏らしが無いように教えてやろう。

「ここからは、楽しい楽しい強制敗北イベントだ。存分に堪能していってくれ」

「ほざけッ！！」

帯電した白銀の剣が俺の眉間に鋭く迫る。上体を傾けながら左へと避けた俺に対し、パージはクルッとコマのように身体を回転させて横薙ぎに一閃する。鋭く空気を切り裂く音を残しながら、同時に放たれた雷撃が石垣に激しく当たった。

《集え雷光、穿て敵を。雷の槍！》

隙無く呪文詠唱を終える手際は流石に大国の勇者を名乗るだけある。詠唱途中で邪魔するのは常套手段なのだが間に合わず、黙ってやり過ごさざるを得ない。

直進する雷撃を右へと避けた俺に、間髪入れずに鋭い突きが襲いかかる。俺がどう避けるか理解しているかのように鋭く迫る剣の先端は、完璧に避けたつもりだった俺の髪を僅かに散らした。

「ふん、ちょろちょろと……次は外さない。命乞いなら今の内だ」

相手の寝言に笑いがこみ上げてくる。パラパラと石垣から降ってくる小石の一つをキャッチして、ピンと親指で弾いた。

「誰が命乞いするって？」

無意識の内に邪な笑みが漏れてしまったかもしれない。こんな顔、とてもリアたちには見せられないだろう。

32．南門の戦い

乱暴に投げ出された細身の体躯を丸めて、フレイは静かに着地した。

「ここは……ウィクマムの南門付近ですか」

抵抗されることはまず無いと考えていたが、どうやら相手は冷静な判断力を失ってしまっているらしい。軽く溜息をついた彼女は素早く周囲を確認する。いくつかの大きな岩が雑草に混じって顔を覗かせているが、基本的に視界を遮るものは無い。地面にも特に怪しいところは見つからない。仕掛けの類は無いようだ。

「どんな罠が待っているかと思えば、ただ距離を稼いだだけですか。無駄なことを」

この国に自分たちを脅かす存在などいない。例え孤立しようとも何の支障もないだろう。フレイはそう考えて南門へと歩み寄った。

「ここは通行止め、なの」

驚いたことに、門の前には侍女服を着た少女がひとり立っていた。鮮やかな赤い髪と瞳を持つ彼女が手にしているのは、東方でよく目にする武器だ。

この国は年端もいかない少女にまで武器を持たせているのか。心中に怒りを滲ませたフレイは、金の髪を揺らして瞳を少しだけ和らげた。

「止めておきなさい。命は粗末にするものではないでしょう」

「大丈夫なの。アンタが人間なら絶対に死なない、なの」

……いまいち会話が噛み合わない。しかし、子供が戦場で立ち尽くしていると考えれば正常な思考ができないのも無理はない。同情と苛立ちを混ぜた感情を込めて、フレイは再度諭すように語り掛けた。

「私達の目的は宝玉だけ。その門を開けて王城まで案内しなさい。そうすれば無駄な血が流れないですむのだから――」

言い終わる前に少女が剣を抜き放つ。即座に反応した彼女の目前を、赤銀の刃が通り抜けていった。

「さっさと帰ってくれないと斬っちゃうぞ、なの」

「……なかなか鋭い一閃ですが、その程度でこの”聖拳闘士”に挑むのは無謀ですよ。怪我をしても知りませんからね？」

頑として道を譲らない相手に、呆れるように溜息をつく。哀れむような視線を投げてフレイは腕を軽く振った。

＊　＊　＊

金色の手甲が空気を切り裂く。

リーチは少女に分があるが、手数は圧倒的に己のほうが多い。相

手の懐に潜り込めばそれで終わりだ。そう考えたフレイは直線的に少女へと迫る。

左の拳がヒットする寸前に、少女がかるく跳躍して左に避けた。さすがにこの程度で驚きはしなかったかと、さらに地を蹴って拳を向ける。額、胸元、こめかみ、腹、大腿、下腿。数え切れないほど繰り返した基本にして必殺の連撃を、休む間もなく撃ち続けた。

しかし当たらない。小さな身体は無数の腕をかいくぐり、脚を狙った一撃は手にした獲物で器用に受け流される。最後に放った左の踵が辛うじて衣服の端を引っ掛けて、白いエプロンに黒焦げた線を残した。

……思った以上に速い。まるで猫のように軽い身のこなしだ。

フレイは目の前の少女に対する危険度認識を上方修正する。自分から仕掛けた攻撃が相手に当たらないなど、滅多にあることではなかった。

「なるほど、逃げ足だけは速いですね。褒めてあげましょう、これが避けられたら」

ふたたび長い脚が地面を蹴る。後退して一撃目を避けた少女に対し、さらに張り付くように大胆に間合いを詰めてゆく。振り切ろうとする相手に追いつき、容易に自らの間合いに飛び込んだフレイが嘲るように笑った。これで終わり――

――止めの一歩を踏み出すべきその瞬間。戦士としての勘が、全力でフレイの身体を後ろへと引っぱった。

「ッ！？」

ギリギリのところで止まった頬に、火傷のような痛みが走る。

不覚にもバランスを崩してよろめいてしまい、身を守る軽鎧が耳障りな音を立てた。

……傷はついていない。辛うじて無事だった。そう理解したと同時に徐々に鼓動が大きくなり、遅れて溢れてきた冷たい汗がつぅ、と頬を舐めてゆく。必要な間合いの倍以上を後退させられた彼女に向けて、小さな敵は淡々と口を開いた。

「攻撃は放つ瞬間が一番キケン、なの。そんな大振りは隙を増やしているだけ、なの」

その言葉を聞いて理解する。拳を突き出す寸前に相手が放った一閃が自分の頬をかすめたのだ。攻撃を繰り出す直前に存在する一瞬の”溜め”を狙ったと、あの少女は事も無げに言ったのだ。

「あんまりバカにしていると死んじゃうぞ、なの」

赤銀の切っ先をフレイの眉間に向けて、少女が不敵な笑みを浮かべている。

あと僅かでも前に踏み出せば斬られていた、という現実。不覚にも震えそうになった膝を懸命の叱咤で黙らせて、フレイは敵を強く睨みつけた。

「……もう、痛い目じゃ済まないと思いなさい」

その言葉に、相手が僅かに苦笑した。気のせいだったかもしれない一瞬の表情の変化に、フレイの感情が激しく軋む。胸の前で右の拳を左手で包み、自らを鼓舞するように詠唱した。

《猛れ、風よ。我の鎧となれ、全てを薙ぎ払え！　極旋風！》

凛とした声が響き、大気の匂いが変わる。フレイを中心に大気が吸い込まれるように集まってゆく。術者を守るように生まれたつむじ風はさらに周囲の大気を吸い込んで、すぐに竜巻のように大きく成長した。

中心に位置するフレイが一歩進むと、それに従うように旋風も前へと動く。風の障壁に触れたすべてが暴力的に従わされ、天空から地面へと叩き落される。巻き込まれた土埃が周囲に降り注ぎ、視界が悪化していった。

「これでそのか細い武器は届かない。願いなさい――自分の命が消えないことを」

フレイはその四肢をぐっと縮め、前傾姿勢のまま静止する。ひとつ大きく息を吸った彼女は、その足で獣のように地を抉った。

残像を生むほどのスピードは、容易に相手までの距離をゼロにした。

迎え撃つように振り下ろされた一太刀を受け止めた、と同時に荒々しい暴風が敵を叩く。小さな体がぐらりと揺られて隙が生まれる。目ざとく反応したフレイがさらに詰め寄ると、相手は弾かれたよう

に右後方へ飛んだ。

即座に拳を向ける。敵の反応速度は確かに凄まじいが、旋風の加護を得た身体は相手と比べても格段に速い。加えて、吹き荒れる風は相手に体勢を整えることを許さない。風が敵を捕らえた瞬間勝負は決まるだろう。

ほんの僅かに遅れた右脚が岩を砕く。飛び散った拳大の破片を暴風が捕えた瞬間、荒々しかった風がさらに激しく吹き荒れた。

「貴女にも、もうすぐ同じ目に遭わせてあげますよ」

天空へと巻き上げられ、そのまま見えなくなった破片を尻目に薄く笑う。

時間にして数分もない激しい攻防の末、ついにその時は訪れた。

「っ！」

フレイの左腕が小さな体を掠めた刹那、相手が痛そうに片目を閉じた。吹き荒れる砂粒が目に入り、一瞬動きが鈍った体を、暴風がついに捕まえた。

「そこまでですねッ！」

相手の身体が僅かに浮き自由を失う。見せ付けるように右脚を高く持ち上げて、フレイは歓喜の笑みを浮かべた。全力を込めた一撃を叩きつければ良くて骨折、悪ければ死ぬ。少なくとも戦闘不能に陥ることは間違いない。

フレイは勝利を確信して右脚を振りぬいて――見事に空振りした。

「な、」

渾身の力を込めて叩き付けたハズなのに、肉を叩く感触が、骨を砕く感触が得られない。フレイの瞳がみるみるうちに困惑の色に染まってゆく。驚きを隠せないでいる彼女の目の前で、相手の姿が幻のように溶けて赤い霧となった。

「なんですって……」

振り抜いた脚を地に下ろして、半ば呆然とその姿を目で追う。赤い霧は吹き荒れる風など無いかのように揺らめいて、赤銀の刃へと姿を変えていった。

「残念でした、なの」

研ぎ澄まされた殺気に全身を撃ち抜かれて、フレイはカクンと一歩後退させられた。

無様に放心していた自分を斬るチャンスは幾らでもあったのに、背後を取った敵はそれを見逃した。この事実を冷静に捉え、相手の力量を認めてフレイは慎重になるべきだった。しかし、幾多の戦場で英雄と並び称えられたプライドを優先させてしまった彼女は、愚直に正面から向かってしまった。

「バイバイ、なの」

敵の構えが変わっていたことに気付いた時には、全てが遅かった。

＊　＊　＊

愛刀を鞘に収め、ぽんぽんと労うように手を当てる。ふぅっ、と大きく息を吐いたサキは、微かに首を傾げて困ったような顔をした。

「気絶させちゃった、なの」

よく考えれば相手を追い返すだけで良かったのに、つい斬ってしまった。風を纏ったフレイが想像以上の難敵だったので、そこまで気が回らなかったのだ。

「ま、いいか。なの」

こうなってしまえば当分は目を覚まさない。誰かに運ぶのを手伝ってもらえばいいと考えて、サキは南門を後にした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5998w/

手を引く勇者と引きずられる魔王

2011年11月19日18時29分発行